第27回
自治労
文芸賞

散文の部

審査委員紹介

第27回自治労文芸賞の小説・ルポルタージュ・紀行文など
散文の部審査委員は次のみなさんにお願いしました。

鎌田 慧さん

社会派ルポライター。近著に「さようなら原発の決意」「狭山事件の真実」など

増田みず子さん

86年「シングル・セル」で第14回泉鏡花文学賞受賞。著書に「月夜見」など

道浦母都子さん

歌人。歌集「無援の抒情」で第25回現代歌人協会賞を受賞。近著にエッセイ集「たましいを運ぶ舟」

自治労文芸28　もくじ

写真

第28回写真コンクール受賞作品……5

自治労文芸賞

第27回自治労文芸賞・入賞者一覧……16

散文の部

本選考座談会・散文の部審査……17
遠い叫び……（入選）鈴木　照夫　東京都本部・都庁職清掃支部・退職者……26
雪降る街で……（佳作）※桐原　則介　福井県本部・全国一般福井地方労組……44
奇跡、あるいは軌跡……（佳作）橋本　春樹　大阪府本部・自治労枚方市職員関係労組……61
給食からっぽ大作戦……（奨励賞）小倉　秀治　兵庫県本部・宝塚市職労……74
散文の部・予備選考を終えて……79
散文の部・作品短評……85

詩歌の部

詩

詩の部：審査員　山田隆昭　選評……87
手紙……（入選）後藤　順　岐阜県本部・岐阜市職労・退職者……90
65歳のラブレター……（佳作）東野　正　岩手県本部・岩手県職労・退職者……94
大きな手……（佳作）齋藤　里絵　東京都本部・ネットワークとしま……98
瓢箪島ひとりぼっちの無人小屋……（佳作）牧本　敏秀　広島県本部・自治労広島県職連合組……100

短歌

短歌の部：審査員　森川　多佳子　選評……102
くらしの破片……（入選）鈴木　照夫　東京都本部・都庁職清掃支部・退職者……104
日常……（佳作）米谷　茂　大阪府本部・自治労泉佐野市職・退職者……108
故郷……（佳作）山崎　俊定　東京都本部・自治労都庁職・退職者……112
幼き日の記憶……（佳作）鈴木　広　山形県本部・川西町職労・退職者……116

俳句

俳句の部：審査員　小沢信男　選評……120
神は賽子を振る……（入選）川崎　岳史　奈良県本部・奈良市職……122
探し物……（佳作）光平　朝乃　大阪府本部・自治労枚方市職員関係労組……125
きょうあした……（佳作）山崎　俊定　東京都本部・自治労都庁職・退職者……127

川柳

川柳の部：審査員　島田駱昭　選評……129
無題……（入選）田中　良積　北海道本部・釧路市役所ユニオン・退職……131
海色へ……（佳作）※柳谷たかお　青森県本部・外ヶ浜町職……132
無題……（佳作）南出　孝次　三重県本部・松阪市職……133

まんが

２０１８まんが大笑・入笑作品……134

自治労 第28回 写真コンクール

特　選

「私の街」

髙見　卓男（岡山県本部・岡山県職員退職者会）

日が暮れて苗の植えられた田んぼの水面に、微かな茜色が混ざった暗い青色の空が映り込み、その奥には、煌々と輝く工場群が見える。美しい幻想的な写真です。光の当たらない樹木やあぜ道が、シルエットになり写真全体の雰囲気を支えています。構図のバランスも絶妙です。エピソード欄には、私の街では、農業と工業が両立していますと書かれています。自分の住む街の特徴をシンボリックに表現した完成度の高い作品です。

「Happy Birthday to We」

木谷　昌経（山梨県本部・中央市職員組合）

次女の誕生を心待ちにする３歳の長女の様子を中心にとらえた５枚の写真で構成された作品です。５枚の写真を、生まれる直前、出産、その直後、出産後と次女が生まれるまでの時間の経過に沿って組み､奥さんと長女の様子が写っています。作品の中に、親と娘の期待に満ちた時間が流れ、特に姉になる長女の気持ちが良く表れています。見る側も幸せになれるような作品です。

「工場要塞」

西川　喜博（三重県本部・三重県企業庁労働組合）

夜の工場をクローズアップでとらえ、工場の堅牢さと不気味さを表現しています。西川さんは、この工場が要塞のようだったと書かれています。構図は良いのですが、光の数が多すぎるような気がします。要塞という表現上のテーマを感じ取ったら、撮った写真からそれに合うものを探すのではなく、撮影しているときにその視点で対象を見てください。すると自分の感性に合う対象や写真の切り取り方が見つかるはずです。

「青春」

後藤　俊夫（北海道本部・函館市職員労働組合）

4人の女の子が、散る桜の花びらに包まれ楽しそうに戯れている様子を撮影した作品です。画面に桜の木をほとんど入れず、背景にある建物の窓ガラスの写りこみでそれらを見せています。また、その建物の部屋の中も見え、そこでは同じ制服を着た女性たちが何かの勉強をしている様子が垣間見えます。春という季節感と心地よさを非常に計算された構図やシャッターチャンスでとらえた作品です。

「門前町の朝」

谷口　純一（三重県本部・三重県職員労働組合）

朝の山門前を部活に行く学生が、通過する一瞬を狙って撮影した作品です。山門の柱などや自転車に乗る学生などをシルエットに近い状態でとらえています。シャッターチャンスと光への意識が、シンプルな構図を作りださせています。手前から奥に続く石畳の地面をメリハリをつけるためにわざと白く飛ばしているのかもしれませんが、もう少し中間のトーンを出してリアリティを出しても良かったのではないでしょうか。

「イノシシ」

坂口　真里（鳥取県本部・八頭町職員労働組合）

道路沿いにあった猪の死骸を撮った作品です。いつでも起こりえる現実をつきつけられたと坂口さんは書いていますが、私は写真を見て思わず笑ってしまいました。写真は、非常に単純でストレートです。表現というより記録です。しかし、ガードレールの向こうには山々があり、緑豊かな環境が垣間見えます。シンプルな写真の中にこの街を想像させる要素がたくさん詰まっている写真です。写真はセンスだけで撮るものではありません。

「裸まつり」

須田　勝彦（福島県本部・自治労福島県職員連合労働組合）

男たちがふんどしだけを付けたほぼ裸の状態で、氷点下の中、太い綱を両手でつかみながら上にむかって登っています。構図がとても良い作品です。画面の中心にそれぞれ形の異なる被写体があり、下部には上半身だけの男の子、上部には足と腕だけ（顔が写っていない）が写され、写真全体が引き締まったバランスのとれたものになっています。

「兼六園　冬の景」

安房　政吉（東京都本部・練馬区職員労働組合）

兼六園の池泉での一瞬をとらえた作品です。季節は冬で、空には厚い雪雲があったそうです。画面には、池で泳ぐ錦鯉、葉のない枝、そして、雪雲と空が水面に映りこんでいます。全体が淡い色で統一され、その中で、真ん中の錦鯉の淡い紅色と空の青色、枝の黒い線が強いアクセントになっています。色のなくなる冬の季節感とその美しさが上手く表現された作品です。

「閉じ込められた！」

井上　晴美（福岡県本部・書記労）

透明な球体の中に人が閉じ込められているかのように写っている作品です。ビー玉越しに友だちを撮影したそうです。エピソード欄には、暇つぶしに撮った１枚と書かれています。写真には、様々な撮り方や考え方があります。シャッターチャンスを逃すまいと緊張した状態で撮影する時や井上さんのようにリラックスして遊びのように撮るような時。心の余裕がアイデアを生み、写真に面白さを加えたのかもしれません。

自治労 第28回 写真コンクール

テーマの解釈を出発点に

「第28回写真コンクール」の審査が９月20日に行われた。今回のコンクールでは「テーマ部門（テーマ：私の街）」と「自由テーマ部門」に分けて実施。76作品の応募があり、そのうちテーマ部門４作品、自由テーマ部門５作品の計９作品が受賞した。

総評

今回から２つのテーマを設け、それらを選択する形に変えました。「私の街」というテーマと「自由テーマ」としました。その結果、後者を選択した応募者が多数をしめ、作品のレベルも全体的に「自由テーマ」部門のほうが高かったです。

「私の街」、このテーマの良さは、身近だから気軽に何回も撮れるということです。皆さんスマホは持ち歩いているでしょうから、気になったものは片っ端から撮る。後でそれらを眺めれば、良いと感じるものが１枚はあるはずです。つまり、このテーマで良い写真を撮るコツは、あまり余計なことは考えず、撮影を日常化することです。そうすれば、撮影枚数も格段に増え、良い写真が撮れる確率もあがるはずです。その結果、写真を通して、街の良さを再認識している自分がいるはずです。

「自由テーマ」部門は、撮影するために被写体を求めて、様々な場所に出向き、様々な工夫をし、表現されている写真、いわゆる“うまい写真”が多かったです。このような撮影で注意してほしいことは、自分の頭の中にある絵を撮るのではなく、良いと感じる被写体を発見し、それを自分の感覚や感性に落とし込むということです。自分の中にあるイメージを描くのではなく、自分の欲しいイメージを探し出す行為です。つまり、世界の現実の中から撮りたいイメージを切り取る作業です。そこに写真が写しとった美しい現実が立ち上がります。

この両方に共通することは何でしょうか。それは、行動するということです。行動する場は、日常、非日常と異なっていても、とりあえず、撮影を通して、記録し、表現することです。撮影するという行動をおこせば、自ずと写真は生まれます。

さあ、皆さん、出かけるときはカメラを持って（スマホでも可）写真を撮りましょう。すべてはそこから始まります。

審査員
鈴木 邦弘さん
（写真家）

雑誌を中心にフリーの写真家として活動。自治労通信および『世界』などにドキュメンタリー写真を発表。93年「森の人・PYGMY」で第18回伊奈信男賞を受賞。日本写真芸術専門学校主任講師。日本写真家協会（JPS）会員。自治労情宣セミナー分科会講師。

自治労文芸　第28号

第27回
自治労文芸賞　受賞作品集

第27回自治労文芸賞・受賞者一覧

散文の部

入選『遠い叫び』　鈴木　照夫　東京都本部・都庁職清掃支部・退職者
佳作『雪降る街で』　桐原　則介＊　福井県本部・全国一般福井地方労組
佳作『奇跡、あるいは軌跡』　橋本　春樹　大阪府本部・自治労枚方市職員関係労組
奨励賞『給食からっぽ大作戦』　小倉　秀治　兵庫県本部・宝塚市職労

詩歌の部

詩／審査員・山田　隆昭さん

入選『手紙』　後藤　順　岐阜県本部・岐阜市職労・退職者
佳作『65歳のラブレター』　東野　正　岩手県本部・岩手県職労・退職者
佳作『大きな手』　齋藤　里絵　東京都本部・ネットワークとしま
佳作『瓢箪島ひとりぼっちの無人小屋』　牧本　敏秀　広島県本部・自治労広島県職連合労組

短歌／審査員・森川　多佳子さん

入選『くらしの破片』　鈴木　照夫　東京都本部・都庁職清掃支部・退職者
佳作『日常』　米谷　茂　大阪府本部・自治労泉佐野市職・退職者
佳作『故郷』　山崎　俊定　東京都本部・自治労都庁職・退職者
佳作『幼き日の記憶』　鈴木　広　山形県本部・川西町職労・退職者

俳句／審査員・小沢　信男さん

入選『神は賽子を振る』　川崎　岳史　奈良県本部・奈良市職
佳作『探し物』　光平　朝乃　大阪府本部・自治労枚方市職員関係労組
佳作『きょうあした』　山崎　俊定　東京都本部・自治労都庁職・退職者

川柳／審査員　小金沢　綏子さん

入選『無題』　田中　良積　北海道本部・釧路市役所ユニオン・退職者
佳作『海色へ』　柳谷たかお＊　青森県本部・外ヶ浜町職
佳作『無題』　南出　孝次　三重県本部・松阪市職

＊はペンネーム

本選考座談会

散文の部審査

出席者

鎌田　慧　さん
増田　みず子　さん
道浦　母都子　さん
司会　佐藤　環　樹
自治労文芸代表幹事

2018年11月5日　自治労本部

今回の応募作品から見る傾向

佐藤　今回、散文の部の応募は26本で、前回が28本ですので本数自体は少なくなっていますが、職場をテーマにした作品もかなりありました。また、震災などをテーマにして書いている方もいるのですが、事実経過だけを日記調に書いていて、ルポルタージュとまではいかない内容でした。

増田　ふだん書いていない人たちが書いたということですね。

佐藤　そうですね。小説の体を成していない作品が半分ほどありましたが、本当に素人の方がチャレンジをしてきたという点で、とてもいいことだと思います。

増田　そうですね。この点は大事にしたいですね。

道浦　退職者の方が多かったですね。

増田　ただ、若い人が少ないです。

佐藤　そうですね。

増田　20代、30代がいない。

道浦　自治労文芸賞においては、フィクションと短編小説の違いを、どのように区別しているか教えてください。

佐藤　募集の段階で、フィクション（短編小説、戯曲、童話）、ノンフィクション（ルポルタージュ、エッセイ、紀行文、文芸批評など）としています。ですから、短編小説はフィクションとイコールです。

増田　応募の段階で単に「フィクション」と書いてあると、分類がわからないことになりますね。

佐藤　そうですね、はい。

鎌田　大まかに言うと、フィクションとノンフィクションに分かれるのでしょうが。

佐藤　ジャンルがわかりにくいので、次回以降の募集では簡潔に整理するようにします。

鎌田　わかりました。それでは、始めることといたします。小説なので、やはり小説家の増田さんからコメントをお願いします。

鎌田　慧さん

増田　今回は全作品が小説ではあるけれども、すべての作品がノンフィクションのような気がしながら、読んできました。自分の体験から、そのときの苦労や感動、達成感、挫折感を書いているということですね。

「これはこの人の体験、1人の人間の体験談だな」ということはわかりますが、「人間なら誰もが同じものを感じ取れる。たまたまこの人が体験したことではなくて、何か自分に伝わってくるものがある」という普遍性から考えると、私自身は、小説だとは思います。だから、あったこと全部を書いても小説にはならない。フィクションを取りまぜて本当らしさを出しますが、読む側はこれが体験だろうが、想像だろうが、創作だろうが、事実だろうが、関係はないと思います。

それで、いつも思うのですけれども、この自治労文芸は非常に特殊な分野なのですね。仕事という枠の中での立場の難しさ、仕事における困難な事柄を何とか乗り越えた、あるいは乗り越えられなかったことが書かれていますし、先ほど鎌田さんが指摘された自治労の特性ではあると思います。実は、いつもそこで、混乱しております。公務員の苦渋は理解できるのですが、公務員の苦労とそこに頼っている市民全体の苦しみのようなものとが合致しない。そのあたりで何か新しい展開が出てこないかなと思ってはいます。どちらかというと、仕事としてうまくできたという感動が作品のメインになるわけですけれども、これを公務員ではない市民の人たちが読むと、少し疎外感があります。市民参加がほとんどないので、「公務員の人がうまくリードして、やってくれているな」ということで終わる感じがしてしまう。それは大事なことだとは思いますが、（自治労文芸の枠を超えて）一般社会に作品を出したときに、何か違和感が出てくるのではないかとは思います。

鎌田　どこか遠慮しているのですね。

増田　やはり立場上、書いてはいけないことが多過ぎるのですね。

鎌田　名前が出ると地域住民から直接、非難されるケースもあるわけで、その目線を感じて仕事をしているため、微妙なのですね。ノンフィクションでエントリーする場合、やはり事実を書くことになりますから、なかなか自分たちの仕事について書けない。地震や火事、原発事故などの対応に一生懸命取り組んだということは書けるかもしれない。ただ、そうした作品は残念ながら応募がされていない。あとは、それからまったく離れた身辺雑記を書いて、そちらの方で頑張ったり、あるいは昔の思い出を書くなど、自治労の運動に関係ない内容だったりする。そのようなところに苦悩が見えているのですが。

増田　小説はフィクションなのですね。でも、まったくの創作では絶対に書けないもので、何か事実があって、それを書く。フィクションのふりをして本当のことを書くという感覚があります。個人情報の保護もありますし、そこに出てくる人物や場所が特定できるような書き方をしてはいけないことになっているわけで

す。最初からそうした限界はあると思うので、その中でどのぐらい頑張っているかということだと思います。

鎌田　ちょっと話がそれますが、川柳や俳句、詩などの応募状況はどうでしたか。

佐藤　今回、大きく減ってしまいました。散文は先ほど申し上げたように、28作品から26作品に。詩は21作品から26作品と微増ですが、短歌が10作品から6作品に減っています。

道浦　なぜだろう。それほど減ったとは。私は信じられない。

佐藤　俳句も10作品から5作品に減っています。

道浦　俳句も……。

佐藤　ええ。極端に少なくなっています。

鎌田　なぜかな。

道浦　市井では川柳も俳句に取り組む人が非常に増えています。

佐藤　ちなみに、川柳は27作品から8作品でした。散文以外は激減しています。

道浦　世の中には他にもたくさんのコンクールがあるため、そちらに応募するのではないかしら。

鎌田　そうですね。

佐藤　かつては自治労文芸が大きな位置を占めていて、自治労文芸賞への応募作品は１００ぐらい来ていたものですから。

道浦　１００作品も来ていた……。

佐藤　ええ。今はインターネットでいろいろな自己表現もできますし。

鎌田　ああ、インターネットですか。

増田　小説に関しては「誰かに読んでもらって、ちゃんと評価されたい」と思うと、ネットで流すだけだと、だめなのですね。何かのコンクールに応募するという形になりますから。

鎌田　かつては各単産に作家集団があって、単組の支部など地域にさまざまな雑誌があり、地域で切磋琢磨して、自治労文芸賞に応募するという流れでした。職場にしっかりとしたサークル活動があったのですが、今は鍛えられる場がないですから。

佐藤　おっしゃるとおりです。

鎌田　訓練の場がまったくないため、投稿と同じ形で来るのですね。昔は地域に運動として教える人たちがいたのです。

佐藤　いましたね。

鎌田　ええ。自治労はまだこのように文芸賞が実施されているからいいのですが、他の産別組織ではほとんどなくなっています。文学賞がないから、そこにむけて努力し批判される文学運動がほとんど消えてきているのですね。今は地域や職場で小説を書く余裕がなくなっているのでしょうから、労働者の文芸全体がずっと衰退しているのです。街には懸賞雑誌もあり、そこでの募集も多く、短歌や俳句などを創作する人は増えています。

道浦　今は年齢が二十代や三十代の人が多いです。また、大学に短歌研究会というものがあり、そこでは、賞ごとの選者などを研究して作品を出す。早稲田、京大、立命館さらには外国語大等にもある。そこから新人が出てくるのです。

増田　そうですか。

鎌田　いずれにしても、いま文芸賞があるのは、労働組合では自治労しかないのですね。

道浦　ある意味、「自治労の文芸賞をもらったことは、とても名

増田　みず子さん

誉なことだ」というふうにもう少し知名度をアップしなければという気がします。

鎌田　そうですね。労働者文学の代表なのです。現在も労働者文学を扱う雑誌はあり、企業や産別組織を超えて応募は来ていますが、フリーターが多いのです。職場にいると、書けない。自分の職場を書くということはとても難しい。

増田　難しいですね。

鎌田　自治労のある職場では書いても大きな問題になることはないし、職業上の守秘義務があるから、それほど危ういことは書かないのだけれども、企業社会の職場には表現の自由がないのです。だから、自治労の中から文学を引っ張ってほしいのだけれども、最近はなかなか良作の応募が少ない。びっくりするような作品が来ないですね。

現代的テーマを描いた力作「遠い叫び」

道浦　散文に応募があった26作品で賞から漏れたものの中に、例えば原発や災害をテーマにした作品はありましたか。

佐藤　ありました。ただ、「何月何日、○○が起きた。何月何日、現場で○○を作業した。何月何日、帰った」というような文章です。

道浦　どちらかというと、ノンフィクションですね。

増田　それでも迫力があればいいのですけれども。入賞作品については、「雪降る街」と「奇跡、あるいは軌跡」のどちらからかで選ぶことでいいのではないかと思います。

鎌田　そうですね。

道浦　3人とも評価が揃っているのは「奇跡、あるいは軌跡」ですね。私はどうしても自分に引きつけて書いてしまうのですが、この作品にはそのような発想があるのかなと。

増田　作品は「ゼロから作る」とよく言われるのですけれども、それは絶対に不可能ですね。まずは自分が書きたいと思う気持ちです。書きたいものがはっきりあることは、それを刺激した何かの事件なり人物なりが必ず実在しているわけです。だから、ある程度、事実をなぞるしかありませんが、人物や土地などを特定されないような方法で書くことは技術だと思います。

道浦　「奇跡、あるいは軌跡」は妻が登場してから、急に現実的になりますね。そのあたりは気になられなかったですか。

増田　いや、おもしろかったです。「ぼやっ」とした意識から、何に刺激されて覚醒していくか。どんなことに刺激され、体が動いたり、心が動いたりするのかという瞬間が書ければ最高だなと思います。だから、普段、その人がどのようなところにアンテナを張って生きている、暮らしているかという価値観がおのずと出てきて、人柄が出てくるのではないかと思うのです。その意味で、この作品は静かで地味で、でも、何か徐々に思い出してくるもの、刺激になるものがはっきりしていて、いいなと思いました。随分、

丁寧に書いてあると思いました。

鎌田　「遠い叫び」は、実話なのでしょうかね。妻がだんだん衰えていって、死んでしまう。結末に向かって静かに進んでいく。

増田　いいと思いますね。

道浦　これは大変な力作ですね。

増田　鈴木照夫さんですね。以前は何か攻撃的な小説を書かれていたような気がしますけれども、今回は「お年を召して、静かになってきたんだな」という印象でした。

道浦　現在では、延命（治療のあり方など）について、随分と考えられてきていますし、テーマも現代的だと思いました。

増田　おもしろいですね。病気かと思っても、自分の体が丈夫なせいか、何回も復活してしまうというところも予測がつかなく、おもしろいと思いました。小説としては一番整っているし、きちんと書いてあると思います。

鎌田　「雪降る街で」は女性が書いているように感じますが男性が書いていて、女性を主人公にした作品です。災害が原因で賃金が削られ、組合が関わる問題になり、解決の方向を歩むという内容がうまく表現されています。

道浦　母都子さん

増田　そうですね。これは組合小説ですね。

鎌田　ええ。れっきとした組合小説で、それほど力んでいない。時間を追って書いていくという静けさを穏やかに書いていて、いいなと思っていました。こぶしを振り上げて頑張っているような感じではなくて。

増田　職場の状況が具体的でとてもよくわかります。どちらかというと、ノンフィクション的な感じで読ませてもらいました。

道浦　私もノンフィクションに近いと思いながら読みました。

佐藤　増田さんがおっしゃったように、事前選考においても文芸幹事から「ゼロから作り上げたのではなくて、職場であったことをヒントに書かれている」との言及もありました。

増田　そうですね。ゼロから作り上げる必要はないので。

鎌田　（作品の舞台となった）雪が降る町の情景がよく表現されていると思います。

道浦　私も雪の光景がとてもうまく描かれていると思いました。

増田　三つの候補作品は出ました。これは何作、選べばいいのですか。

佐藤　入選1本と佳作2本ほどになります。

増田　3人ともマルがついたのが、「遠い叫び」と「奇跡、あるいは軌跡」ですね。そこから入賞作を選びましょうか。

増田　「奇跡、あるいは軌跡」まとまっているといいますか、意図がはっきりしていて、人の生きた証のようなものがじわりと出てきて、静かでいいと思いました。エキセントリックなところがない。しっかりしていると思いますけれども。読みやすいのはどちらですか。

鎌田　文章や作品として上手いと思うのは、「遠い叫び」ですね。

増田　あとは、二つは佳作です。「雪降る街で」と「奇跡、あるいは軌跡」ですね。

受賞以外の作品から気づくこと

佐藤　ありがとうございました。それでは、ここで他の作品について先生方から批評をいただき、今後の創作の際のご参考にしていただきたいと思います。まず、「稲穂の大地に浮き輪を投げろ」について何かアドバイスなどがあればお願いします。

増田　浮き輪を投げるかどうかの部分がかえって邪魔でした。これがなければ、大分すっきりするのではないかなと思います。

道浦　スーパー（マーケット）の部分は、体験しないで書いているのが伝わりました。

増田　小説の書き方でいえば、具体的なエピソードを重ねていくことが、読者にとって一番わかってもらいやすいと思います。

佐藤　浮き輪は下手にテクニックが先行し、表現として考え過ぎてしまったのではないかという意見が事前選考で出ていました。

増田　そう思います。

鎌田　あとは、「サルの花山車」はいかがでしょう。

道浦　お祭りの部分は要らないと思うのです。サルの話だけでよかったのではないかなと。

増田　これはお祭りで話を運ぼうとしているので、この部分を外されると、作者は困るのかもしれません。何回かの祭りの場面を重ねていくことで、自分の人生を重ねていく書き方なので。書いた後で、それを外してしまってみて、読めるかどうかのチェックを自分でやってみるといいかと思いますね。足りない部分は他で書き足すという具合です。でも、きれいにまとまっているし、人の幸福感が地味ながらも伝わってきて、好きでした。

鎌田　サルの花山は見たことはないけれども、サルが山車に乗っているのですか。

道浦　からくり仕掛けのサルと書いてあるので、頭に烏帽子を被り、裃をされたサルが山車についているのだと思います。

増田　ここの描写がもう少し強烈だと、印象に残りやすいと思います。

道浦　なぜサルが出てきて、そのようなことになったのか、そのあたりを書かれていないでしょう。

増田　「なるほど、サルだから印象に残ったんだ」と納得できればいいのです。それゆえに、逆効果になってしまい「これ、要らないのでは」と言われてしまうと、悲しいかもしれない。ただ、自分の思いと他者が読みたいことは、本当に違うのです。小説は人に読んでもらうためのものなので、読んでもらって、その反応でもう1回書き直せるかどうかをどんどん試していくのが訓練だと思うのですけれども、一方で小説はひっそり1人で書く側面もあり、なかなか…。1人でやっていると、わからないところだと思います。傷つくのが嫌で、批評されたくないかもしれませんが、他者からの指摘がないとわからないことはあります。

道浦　私たちも同じです。だから、出品を考えている人には「絶対、歌会に出なさい」と言います。

増田　『てぶくろ』の少女」は、一つのことを集中的に描写すると、とても筆が伸びると思います。全体をまとめるような書き方だと、余りまとまらなくなるというような気がしましたから。

一点集中主義で書かれた方が、いいものができると思います。だから、はっきりとしたストーリーがあった方がいいのかもしれませんね。

佐藤　筆者に直接お話を伺ったのですが、「奇跡、あるいは軌跡」を最初に書いて、重たいテーマだったため気分転換で明るい小説を書きたくて、この『てぶくろ』の少女」ができたということです。

道浦　この『てぶくろ』の少女」はウクライナの童話でしょう。もう少しその内容を入れてほしかった。「どんな童話かな」と思ったので調べたのですけれども、もう少し入っていたらよかったなと、個人的には思いました。

増田　固有の名称を出したときに、「それでわかるだろう」ということから説明を省いてしまうかもしれませんが、読んだことのない人がわざわざ本を探さなくてもいいように、ある程度わかるように書く必要はあると思います。

道浦　「あの時の風」ですが、世界情勢の部分は要るのかなと思いました。

佐藤　事前選考でも「要らない」という意見が多かったですね。

鎌田　フィクションにしないでもう少しリアリズムといいますか、腰を落とした感じで書いていくと結構リアリティーがあったのですけれども、フィクションにし過ぎたムリが出ているのではないのかな。またこのような作品を書いてほしいですね。

増田　もっと徹底的に。

鎌田　はい。

道浦　女性ですね。

鎌田　このような視点で書くのはとてもいいですね。

道浦　応募者の中で一番若いです。

増田　パワーがある。

鎌田　しかし、どこか書いていることが現実感としてうまくリンクしないのですね。どこが悪いのだろうな。惜しいですね。

道浦　アメリカと中国との関係などの記述が大ざっぱなのかもしれないです。

鎌田　あとは、公務員はいろいろな災害に応援で派遣されていますから、そこで考えたことを小説やノンフィクションなど作品にしてほしい。当地で一生懸命に働いているわけですからね。

自治労の立場から社会や人間を描く作品を

佐藤　全体としてのアドバイスと今後、どのような作品を書いてほしいかなどについてお話いただけますか。

鎌田　今は、職場について書く人はほとんどいない。最近、女性作家のコンビニを題材にした優れた小説がありましたが。コンビニなど第3次産業を舞台とする小説は出てくるけど、工場や鉄道などを題材にした作品はほとんど見られなくなってしまった。

増田　そうです。あとは、若い人が家庭を書かなくなりました。親との関係などをまったく書かないのです。

鎌田　親子のことを書かないのか。

増田　そうです。負担でもないし、家族は友達関係のような感じだからでしょうか。

鎌田　昔の小説は、たいてい親子の葛藤などから始まったりしますが。

増田　職場も、若い人にとっては終身雇用の場ではなくなっています。

鎌田　そうですね。

増田　職業に対する、職場に対する考え方は大きく違う。でも、公務員はほぼ終身（雇用）なのです。

鎌田　そうね。最近は非正規も増えましたが。

増田　だから、やはりとても特殊な立場にはなりつつあるのですね。

鎌田　それで、文化活動の受け皿があるのだから書いて、修行してほしい。仕事に関係ない小説を書いてもいいわけだから。

増田　そうですね。そうすると、2年に1度の文芸賞ですと難しいですね。月1ぐらいでどんどん作品を出して添削してもらい、読んでもらい、感想を言ってもらうということの繰り返しが必要かなと思います。

道浦　今回は、ノンフィクションの作品が最終選考に出てきませんでした。

鎌田　ノンフィクションがね。やはり仕事のことを書けない。今、一般社会で書けないのと同じように、自治労の中でも仕事に関することが書けなくなってきているのでしょうね。

増田　そうですね。暴露話を書くより写メで撮って、動画で流したりして告発のようなものがいくらでもできるので。

鎌田　ノンフィクション、ルポルタージュがなくなってしまうと本当に困りますよ。社会がノッペラボーとして、歴史が刻まれない。事象が見えなくなってしまう。

増田　小説もそうです。時代がわからなくなる。若い人が何を考えているのか、わからなくなる。

鎌田　そうそう。痕跡が残らないのですね。

佐藤　前々回の文芸賞では被災地で実際の活動を記録した方がノンフィクションで入選しています。

鎌田　そうでしたね。はい。

佐藤　これは上手でした。

増田　公務員の立場からノンフィクションは難しいのですね。

鎌田　守秘義務による縛りがあるからです。

増田　小説も非常に書きづらいのは確かです。

鎌田　でも、何だかんだ言っても、やはり公務員は（地位が）安定している。安定しているから悪いという意味ではなくて、安定しているからいいのですよ。公務員が安定していないと、世の中はめちゃくちゃですよ。

道浦　「だから、（公共サービスは）こんなに大変なのよ」というものを書いてほしい。

鎌田　そうだね。それから、公務員は変なことを書くと、「公務員らしくない」「おまえ、公務員なのに、よく、こういうことを書くな」などと言われかねない部分もある。

増田　そうですね。いつも気をつけなければならないかもしれませんね。

道浦　公務員というイメージがあるのですね。

鎌田　やはり世間の目があるから、それを意識しているから、書くものに影響するかもしれない。

佐藤　自由な表現として書きにくくなっていますね。

増田　書きにくいところを、どのようにして書くか。

鎌田　自治労文芸賞は労働組合の文学賞であり、これまで組合員が職場の中で働きながら考えていることや運動の経過、教訓。そこから職場が変わっていくさまなどを描いた作品が受賞してきました。自治労の組合員が関わる仕事は社会のあらゆる領域をカバーしております。そこから見える社会の姿や人間を描く作品を期待しています。でも、今回は応募作品が少ないように感じました。職場の矛盾を突くあるいは職場の中の喜びや悲しみ、笑いなど、職場の中から生み出される作品を期待しています。公務員の仕事と生活にこだわってほしいですね。

増田　今回も面白い作品に出会えたと思います。応募者は公務員としての自覚をお持ちになった作品を出されていますが、社会が見る公務員というものに対しての見方もあると思います。自治労組合員の一人として書く小説と、その立場性を抜いた場合で書ける小説とを両方書いて、比べてみてほしいと思います。それぞれのスタンスで書く小説がどのように変わるのか、変わらないのかを実感してもらえたら。自治労文芸賞への作品と他の文芸コンクールに応募する作品と両方を書いてみてください。今後、とても貴重な体験になると思います。

道浦　ノンフィクションの作品がなくて残念でした。現実がフィクションを越えてしまう、今を象徴しているのでしょうか。自治労とか組合員といった感覚が薄れているのでは、とも感じました。やはり、自治労という立場からの声があってほしいと思います。社会と個人とを結ぶ場所にいるはずの組合員の方々です。そこからしか見えないものが多くあるはずです。ぜひ、その視点を生かして、自治労文芸ならではの作品を生み出してほしいと思います。

以上

入選――フィクション

遠い叫び

東京・都庁職（退職者）
鈴木　照夫

梶原良二は誰かに呼ばれた気はするが、相手も何の用か聞き返しもしない。しないというよりできないのだ。具合はどうか、元気を出せと言うのだろうが、そんなことは甚だ迷惑だ。話しかけないでくれ、何もしなくていい、放っといてくれ。

寝返りもうてない、寝返りどころか頭が枕から落ちているのも、腕がベッドの端から垂れているのも戻せない。体をくの字に丸めベッドから転げそうだが動けない。だるい、この上なくだるい、できれば息もしたくない。誰かに手を借りても動くのは酷く億劫だ。体の何倍もの重りが乗っているようで、一本の指をほんの僅か動かすのも重労働だ。

入院して五日目だが三度目の入院になる。彼はスーパーに長く勤め支店長になったが、人手不足は常態で、かぼちゃや玉葱の段ボールを三つも重ねて担ぎ倉庫から店頭に並べるが疲れることはなかった。六十歳で定年になりその後四年間を嘱託で過ごした。そのころから体力が落ち少し動いてもだるさを感じるようになった。嘱託は続けようと思えばまだ続けられたが、体力に自信がなくなると気力も薄れ退職願いを出した。幸い二人の子供はそれぞれ家庭を持っていたが、妻は五年前に亡くなっている。

職を退いてみたがだるさが気になり近くの村井内科へ行くと詳しい診察が必要と光ヶ丘病院を紹介され、慢性肝炎と診断された。担当の坂上医師が肝臓は沈黙の臓器で症状が出たときは手遅れになるのが多い、まだそれほどではないのでゆっくりと体を休めて規則的な生活を心掛けるよう注意する。酒を控えて良質な蛋白質とビタミン類を含むものをとり、睡眠を十分とって一日に一

万歩を歩き、ストレスを溜めないようにと指導する。
仕事を辞めてからは酒量は少なくなった。食事も内容を別にすれば三度とっている。睡眠も以前に比べて十分過ぎるほどだが運動らしい運動はしていない。
食事の内容と睡眠を心掛け、毎朝近くを歩くようにしたが半年ほどすると体重が落ちている。六十キロ前後で推移していたのが三キロほど減った。食べる量を増やしても増えない。尿の色が濃くなっている。坂上医師に相談に行くと血液と尿の検査を行ない、診察を受けると、
「進んでいますね、薬を出しますから確実に服用してください」
日常の細かな注意を再び受ける。
「だるさが出たり、肌の色や目の白いところを毎日見て変わっていたらすぐ来なさい」
梶原は家に帰っても話す者はいないのでひとりソファに腰を下ろし不安になっていた。だるさが出たらというがこのだるさだろうか、買いものに行っても、散歩に出ても、台所で食事の用意をしても腰を下ろしたくなる。暫く休むと回復するというより、こうしていたら何もできないと立ち上がる。子供らに相談すれば心配だろうと話さないできた。
ベッドに横たわっていると自分の体を持て余し手も足も頭も千切って捨てたくなる。丸まった体は胸を圧迫するが仰向きもできない。体を動かすくらいなら胸の圧迫を我慢する方が楽だ。もうどうなってもと不貞腐る気力もない、頭には考える力はなく、目は開けていられない、目を開けて見えるものを識別していたらそれで全身が硬直しそうだ。他から見たらさも窮屈に見えるだろうが自分でどうにかする気力も体力もない。腹の中のものが抜けて空っぽになっているのではと思わせるような重さも温かさも感じない。だが酷いだるさも少し消えるときがある。それは回復というより意識が薄れさらにだるさが強くなる前触れだ。何かに掴まりたいが体が動かない。誰かが体に触れれば吐き気がするほどの悪感がする。

最初の入院は三週間ですんだ。
「横断が始まってますね」
目ぶたをめくって坂上医師はそう言うと入院の手続きを勧めた。だるさはそれほどでもなかったが動作が遅くなっているのが感じられた。緩慢な動作とだるさはどんな病気にも共通していると気にもしなかった。
長男の岳人が梶原宛の郵便物を持ってきた。近くのマンションにいるので誰もいない家の様子を見てくれるよう頼んでいる。持ってきた中に鎌木からの切羽詰まった内容のハガキが入っている。連絡したが通じない。どうかしたのかと殴り書きしてある。
今でこそ「日々堂（にちにち）」は中堅のスーパーだが梶原が入ったころは草創期で鎌木は一年先輩だった。要領がよく積極的でもあって何

度も助けられてきた。後年梶原は支店長になるが鎌木は五年も早く、役員にまでなっている。体調を崩して退職した梶原を気にかけ、折に触れて連絡をくれる。役員になれたのは同時期の入社では彼だけだったので梶原も嬉しかったが、あるとき辞めたいともらしたのに驚き慰留したが翻意しなかった。

会社が大きくなると梶原も経験したが本社の役員が支店間を競争させ、業績を上げた店や逆に思わしくないところを、全支店長の集まる会議で読み上げる。店の業績は売り上げの額だけで評価され、下がると激しく叱咤する。鎌木も叱られる立場にいたが役員になると逆になる。売り上げの下がるのは人口の減少や収入減、高齢化、他社の出店など支店側にも言い分けはあるが考慮されない。役員にも担当の店が業績不振になると閉店や転勤がある。そんな立場に耐えられないともらされれば梶原も強い慰留も憚(はばか)られる。打たれるより打つ方が苦痛なのだ。結局彼は転職するがその後も付き合いは続いている。

入院は長くはないだろうとケータイの電源を切っていた。連絡すると、くたばったのかと思ったよ、と屈託がない。

「一種にするな」

「そうだな、打たれ方が違ってたからな」

会社では鎌木の方が苦労は多かったかもしれない。警備会社に移り夜勤を大変だが前に比べたら天国だ。近く会おうと約束し、体がだるいと愚痴を言える者もいないので彼に聞いてもらおうと思っていた。

体はどこがどう痛いというわけではないし苦しいわけでもない。立っているのが億劫になったり、座っていても長くなると横になりたくなる。

退院時の診察ではかなりよくなっているということだが、体調は喜ぶべきものではない。日常生活の指導を受けて家に戻る。病院のカーテンに仕切られたベッドの上より手足が伸ばせるだけ気分がよい。窓から見える空の色も木々の梢も新鮮である。それまで目にもしなかった庭隅(すみ)の小さな草が小花をつけているのをじっと見ていた。それから半年ばかりはよくも悪くもならず曲がりなりにも過ごしていた。

都合を聞いて鎌木に会うと転職してからの方が生き生きしている。倉庫番は夜中に荷が届いたり早朝に搬出するトラックのチェックはあるが人との軋轢は少ないだけ気楽だという。彼は以前のことは話さないが元々は気弱なのだろう。仕事に対して積極的に取り組んだのは優しさを隠すためだったかもしれない。しかし梶原には仕事のある者が羨ましい、元気ならまだ続けていたのだ。

近況を話し終えると鎌木は、実は、と少し言い渋んでから話し始めた。

孫が今年小学校に入ったが落ち着きがないと何度か呼び出されて注意を受けた。授業中に教室を歩き回ったり廊下に出る。学校が何をするところか理解していない。言い聞かせても聞かないの

で思案していると、保健の先生が精神科の受診を勧めた。子供はそんなものだと気にもしなかったが、親が余りにも心配するので診てもらうと発達障害の疑いがあるから、六ヶ月後に来るようにとのことだ。親は結果を話すのも言葉に詰まり涙を流すので、気丈にしていないと子供にも障ると繰り返し聞かせる。普段は活発で家の中でも外でも飛び回っていて障子や壁に体当たりも平気でする、怪我を心配する親の注意も聞かない。きつく注意すると泣き喚く。

梶原は慰めも適切な対処も言えない、それがどんな病気なのかもわからない。病気というより我が儘ではないかと想像する。しかし鎌木の真剣な表情からはそんな暖気なことではなさそうだ。子供だから徐々に治るのも期待できる、どこの子にもある、気にするほどではないと言うしかない。鎌木は慰めは不要というように首を振ると温かくなったビールを呷る。

疑いがあるというが既にその段階ではないと察し梶原の中にも得体の知れない不安が膨らむ、俺にできることがあれば言ってくれ。と言うのが精一杯でだるいと愚痴も言えなくなってしまった。

退院後はよくなったという実感はなく、だるさと食欲不振による体重の減少が続く。それでも日常の身の回りは自分でできている。半月ほど過ぎたころ岳人が来た、丁度横になっていたので調子がよくないと錯覚したのか、

「飯も食わないで寝てばかりではよくならないよ、一人でいるからだ、俺のところへしばらく来いよ」

「大丈夫だ、ちょっと横になっただけだ」

岳人のところは広くないし二人の子供がいる。頭の上で騒いだり、遊ぼうとせがまれても相手をするもは苦痛だ。

「毎日これないから、それで言うんだ」

妻の雅江は看護師だから病人の扱いは慣れているし、心根は優しいが子供は腕白盛りだ。

「坂上先生に細かい注意も聞いている、入院のタイミングも知っているから何かあれば連絡するより先に病院へ行く、俺のことは気にしないでいいから。子供らは元気にしてるか」

「相変わらず真っ黒になって遊んでるよ。連れてくるか」

「いや、今はいい、少しよくなったら会いに行くよ」

うちへ来い、行かない、と押し問答になるが、妥協もなく呆れて帰って行く。翌日は雅江が来て食事を作り、掃除をしてくれたが、心配させまいと起きていた。帰った後に横になるとそのまま眠ってしまった。

それから半年ほど過ぎたころまた疲れが酷くだるさも続くようになった。尿が焙じ茶に似てきたので坂上医師の診察を受ける。血液と尿、CT検査からすぐ入院を指示される。

二度目の入院は長くなるかもしれないと漠然とした不安に駆られる。体は自分のものでないような自分の意思が通じない。腹部

が張り食欲がないと訴える、すると肝炎の進行を食い止めると点滴が始まる。

頭は混乱し、ひとつのことに収斂されず勝手に散らばっていく。だがこのときも二ヶ月ほど過ぎることになると、疲れもだるさも落ち着いてくる。

「不思議な体ですね、梶原さんは。多くはどんどん進行していくばかりだけど、既のところで戻っていますよ」

「先生のお陰です、ありがとうございます」

三度はないようにしましょう、と日常の注意を受けて家に戻る。その後は体調もよく症状は感じられなかった。気をつけていたのもあるが四・五ヶ月が過ぎるころ、だるくてどうしようもない嫌な気分が襲ってくる。横になりたい、そればかりが欲になる。買いものにも行けずいつものスーパーにネットで注文する。

八ヶ月ほど我慢したが、とうとう三度目が来たと重い足取りで病院へ行く。四年で三度だが今度こそ帰れないのではと、恐怖に襲われながら坂上医師の顔を窺う。

梶原を見るなり問診もせずに傍らの看護師に入院の手続きを指示する。梶原もその覚悟で来たしその準備もしてきた。症状も前の二回より違ってだるさもこれまでより強い。

隣のベッドに寝ている患者の咳も看護師が出入りする足音も耳に入ると無性に腹が立つ。聞くだけでだるさが倍加する、静かにしてくれと願っているとまた呼ぶ声がする。誰かが来て励ますのだろうが益々悪くするだけだ。

オヤジよ、そのとき岳人らしい声が聞こえたが返事ができない、声の方へも向けない。聞かなくても言いたいのはわかっている、そっとしておいてくれ、俺の見舞いはいいから帰って仕事の段取りでもしろ。岳人はプログラムを製作する会社にいる。内容はオートメーション工場の制御システムから個人商店の在庫管理まで、依頼によってさまざまのようだが競争が激しいので少しでも早く完成させなければならないと零している。

「延命措置をどうするかって、先生が聞いてきたけど希望するか」

「ううん、ああ、何だ、それあ」

朦朧とする頭の中で言葉にならない、岳人の言うのを理解し自分の意思を言うのができない。坂上医師が梶原に聞いたのかもしれないが返事がないので子供に聞いたのだ。

「お前のいいようにすればいい、いちいち聞くな」

話しかけられるのも腹立たしいが返事をするのはもっと辛い、言いたいこともまとまらないし言葉を発するのは苦痛なだけだ。何を聞かれても頭に止まらない、脳が拒否するのだ。それでもぼんやりした頭の中で岳人らしい声を反芻する、何を聞いたのだと思い出していると、妻が亡くなるときに聞かれたのと同じと気がつき、俄に覚醒する。

ああ、あのとき、そして今でも思い出すたびに苦い悔恨と同時に胸の痛みさえ覚える。ずっと心の中に引き摺っているというのに、今また子供の岳人が自分のために決断を強いられている。そして同じように苦しみを背負うかもしれない。俺の先はいくらもないが岳人は何十年もある。その間ずっと蟠りを抱えさせるのは気の毒という他はない。

妻の民代は梶原が入社した「日々堂」の練馬支店の先輩で、新入社員の教育がかりを兼ねていた。仲間にも一目おかれ、鹿児島の出で「ハチキン」と言われるように男勝りだが仕事にも同僚にも目配りを欠かさない。

あるとき店も改装が行なわれ、工事の遅れから翌日の開店が危ぶまれた。角山支店長は十時を過ぎると女性社員を帰宅させ、残った男子が準備を続けた。仮眠もとらずに開店時間にどうにか間に合った。民代が梶原に恥ずかしそうに、これ食べて、と神包みを渡す。梶原は宮城県北部の高校を卒えて上京後、アパートにいて食事は外食ばかりだった。包みを開けるとみたこともないおかずが並んでいる。同席していた仕出し弁当を食べている者が次々と覗き込み、おふくろが来たのか、これだろう、と小指を立てる。違うと赤くなって否定するが、赤くなった、赤くなったとはやされる。

それからしばらくして打ち合わせの途中で民代が渡すコーヒーを見て、いいな、いいなとまたはやされる。

当時のスーパーは大阪にできた「主婦の店」がダイエーと名を変え全国に支店網を広げ、後発のスーパーは追い付こうとするが水を開けられるばかりだった。日々堂は歩みは遅いが毎年都内と近郊に一店の割りで支店ができ、二人は別の支店に転勤になるが、付き合いは続いていた。

民代が三十歳を前にして、結婚する気がないなら別れたいと最後通牒のように言われる。梶原はタイミングを計っていたが会う機会が少なく焦ってもいたので、それを機に鹿児島へ挨拶に行く。これまでの経過を話して結婚の許可を求めた。

民代は気が強く六つの年上だ、絶対に離婚しないならと念を押され了解してくれた。そして、こういう話は仲人を立て午前中に来るものだ、ここいらにはここいらの仕来りがある、それに倣わないと肩身が狭くなると諭されたので、遠縁の叔父に頼んで再度挨拶に行き翌年に結婚した。住まいは知り合った練馬付近がいいと開通したばかりの関越道に近いアパートに決めた。いずれ庭付きの一戸建てに住みたいと共稼ぎを続けるが、子供が二人できると転居先を探さなければならなくなった。

民代は海が見えるところがいいと言うが、練馬に海はない、その代わり大きな池の石神井公園がある。東側の緩い斜面には広い庭の大きく瀟洒な家が並んでいる。そんな家には夢にも住めないが、斜面の上にも家が建ち並び、その辺りにも池の見えるところ

がある。休日に見て回り不動産屋にも相談する。二ヶ月ほど過ぎたころ中古の二階建てが売りに出たと連絡があり、行ってみると二階から池が見え小さな庭もある。家もそれほど古くはなかったので民代も気に入りすぐに決めた。

民代は仕事を辞めて子育てに専念するが、中学に上がってからパートに出ると学校給食の職を得た。

梶原は食品売場の主任になり会社は順調に伸びていた。長男は大学を出てＩＴ企業に入り、妹のひろみはどこで知り合ったのか埼玉県の飯能で野菜農家を営む竹田勇一と結婚した。梶原の実家も農家なので嫁の苦労は見ていたから心配したが、知っている集落中の共同作業による手作業から、機械化に変わり、個人の才覚で行なう農業になっていた。ときどき軽トラックで畑のものを持ってくるがさほど苦にもしていないのに安堵する。

梶原は五八歳で支店長になるとますます帰りが遅くなった。朝は六時に家を出て十時か十一時に帰り、会社に泊まることもある。

店は都内と近郊に三十店を越え業績は順調で強気の出店を続ける。他社との競走も激しくコンビニが周囲に増加してくると売り上げは頭打ちになる。それでも社員はゴールの前の競走馬のように鞭を当てられる。

毎日の売り上げをその日に本社に報告するが前日より低いと、理由を聞かれ、打つ手はあるのかと問われる。戸惑っていると考えてすぐ知らせろと容赦はない。

梶原は時間があれば店内を巡回し客の好みや様子を見ている。本社が安売りにこだわり容量の大きいまとめ売りを方針としているが、小分け品を多くし、近くの商店街と組んだり、地方の地ものを並べたりもする。それは一定の効果を上げ、小分け品は他店にも広められた。だが周囲の人口は高齢化と減少に加え、業者間の競争は目を覆うばかりになっている。高齢化はネット注文を増やすがその分来客は減る。毎日神経を磨り減らしても誉められることもない。家は食事と眠るだけになった。

梶原は六十歳で定年になると肩の荷が下りる思いであった。それでもこれといった趣味もなく辞めればやることのない不安があったので会社の嘱託制度に応じた。

嘱託では納入業者との交渉にあたったが、それに慣れてきたころ、妻が体調不良を訴えた。それまで医者にも薬にも縁はなく、健康に自信があって、梶原が風邪で鼻をぐずらせたり咳き込んだりしていると、気持ちがだらけていると叱ったりもした。

「わたし、お腹が出てきたみたいなの」

元々小肥りだが外見上は気にならなかった。パートには欠かさず出ているし、家の内外はいつも整えられ、ちりひとつ目にしない。窓ガラスの曇りも障子の桟も汚れを見つけるのは困難だ。庭木の刈り込みも季節ごとに花を咲かせるのも、家にいない方が多い梶原には過ぎた妻で何の心配もしなかった。ときどき親戚のと

ころへ行ったり、友だちと食事に行くくらいだ。
妻は両足を床に投げ出し大儀そうに右足を手で引き寄せて曲げるとスカートを捲る、赤黒く肥えた足を初めて見る。
「少し歩いた方がいいんじゃないか」
と言ったが、運動不足ではないと素人目にもわかる。肌の色といい、張りといい、何か病的なものを感じさせる。これよ、そういうと膨らんだ脹ら脛を親指で押す。数秒して離すとそこに指の跡がくっきりとへこみ、周囲と違う白く濁った色が残る。
「痛いとか、苦しいとかはあるのか」
「それはないけど、だるいの、少し動いただけでも、それに腰が重いの」
「気になれば診てもらえよ、大丈夫だと言われればいいし、必要なら治療は早いほうがいい」
「恐いわ」
こんな気弱なことを言う妻を知らない。放ってはおけないと近くの村井内科に連れて行く。ベッドに横になるよう言ってカーテンを引く。梶原に外で待つよう指示し、しばらくして呼ばれて入ると、
「梶原さん、詳しく診る必要があります。ここでは検査ができませんので病院へ行ってください、これまで入院されたことはありますか」
「ありませんが」
「それなら光ヶ丘病院に紹介状を書きます。できだけ早く診てもらいなさい」
光ヶ丘病院は地域医療振興協会が運営する病院で、付近の診療所ではこの病院を紹介するようだ。紹介状の作成を控え室で待っていると梶原が呼ばれる。
「いつごろからですか、だるいと感じるようになったのは」
「言い出したのは一週間ほど前です」
「奥さんには直接言うと動揺しそうで言いませんでしたが、右側の乳房にかなり大きな痼りがあります。気がつきませんでしたか」
はあ、と曖昧に答える。乳房の大きな痼りなら触れればわかるかもしれない。妻の乳房に触れていながらわからないはずがないと思ったのかもしれない。そうは言われても妻と接したのはここ数年ない。
「手遅れでしょうか」
恐る恐る聞いてみる。初期の段階なら手術で治ると聞いたことがある。
「詳しい検査をしないとわかりませんが、骨への転移もあるかもしれません。早目に受診をしてください」
聞いておかなければならないと思いながら、何も思いあたらない。深く頭を下げて診察室を出ると次の患者が入っていく。会計を済ませ妻を促し表へ出る。

「先生、何か言ってた？」
「いや、早めに診てもらえって」
「わたし、どうなるのかしら」
「何がだ、結果も出ていないのに余計な心配するな。ちゃんと調べたら何もないってことだってあるからな」
二日後に光ヶ丘病院へ行き、受付に紹介状を出す。大きなロビーはホテルかと見間違えるほど明るく綺麗だ。窓から差す日が床にくっきりとした鋭角の影を落としている。その上を車椅子に乗った人や点滴のスタンドを押している人、腕をとられて覚束ない歩みの人が踏んで行く。壁際に並ぶ椅子に掛けている人もみな項垂れている。その中を看護師がきびきびとした急ぎ足で過ぎる。
受付に呼ばれて診察券と受診番号を記した紙片を渡され、乳腺外科と表示のあるところで待つようにとのことで奥へ進む。科ごとに仕切られた控え室で待っていると看護師が来て、受診の前に採血とＣＴの検査を受けるよう、案内図を受け取る。
妻はどちらも初めてなのでだるさも忘れて緊張した表情だが、どちらもそれぞれ十分ほど出てくる。
「どうだった」
「何ともないわ、こんな検査ばかりだといいけど」
順番が来て診察室に入る。
「国崎です」
「梶原です、家族の者ですがお話をお聞かせいただいてよろしいですか」
「ご主人ですか、かまいませんよ」
白髪混じりのいかにも自信ありげな国崎の前にかける。パソコンに映るＣＴの画像と血液検査の結果から、向き直って、
「体調はいかがですか」
「だるさが強く、腰も痛いです」
「そうですか、右乳房の腫瘍は初期の段階を越えていますのですぐ入院して治療を始めます、ご都合はありますか」
都合を聞くくらいならまだ余裕があるのだろう、直ちに入院を強いられるよりはいいかもしれないと勝手に解釈するが、どんな治療があるのか知らないし知識もない。
「先生にお任せするしかありませんので、よろしくお願いします」
「入院後は治療と検査を平衡して行ないますが、痛みも出てくるかもしれません」
妻は軽くないと悟ったのか俯いてしまった。
「入院日は月曜と木曜日になりますが、再来週以降なら可能です」
「急なお話に家内が戸惑っているようなので少し時間をいただけないでしょうか」
「構いませんが、間をおいてもよくはなりませんのでそれだけは承知しておいてください」

二人は国崎に頭を下げて診察室を出る。妻は青ざめて足取りも重くなる。会計を済ます間も椅子にかけて塞ぎ込んでいる。気分はと聞いても返事はない。帰りはタクシーに乗り、家に戻るとソファに横になる。

「病院へ何と言おうか、放っておくわけにはいかないから」

子供らに知らせると翌日に岳人夫妻とひろみ夫妻が来たので、診察の結果を説明する。妻がトイレに立ったのを機に村井医師の見立てと国崎医師の話の端々から感じるものを交えながら、ここ数日の様子を話す。岳人の妻の雅江は看護師だから様子を聞いて理解したのだろう。

「お母さんの好きにさせるのがいいわよ、治療もその後のことも」

その後とは看取(みとり)を言うのかと雅江の顔を見ると真剣そのものだ。岳人が、

「こんなになるまでどうして放っていたんだ。仕事仕事って家にいなかったせいだ、一人で悩んでたんだろう」

不機嫌この上ない、ひろみも同調して責める。ひろみの夫の勇一が見兼ねて、

「そうは言ってもお父さんの立場もあるから、まずはお母さんの希望を聞いてよい治療を早く始めるのがいいよ」

戻ってきた妻は力なく、話の輪を避けるように台所の椅子にかける。

「お母さん、体調はどうですか」

勇一が聞いても答えない。梶原が、

「右の乳房全体が硬く熱もある、骨とリンパ節にも移っているようなんだ」

「乳がんは転移し易いのよ、あちこち散らばっていると手術は難しいから薬物治療になるかもしれないわね」

雅江が手遅れのように言うと、勇一が、

「薬物というのは抗がん剤のことですか」

「そうだけど放射線も併せて行なうでしょうね、お母さん、何か希望はあります?」

妻には聞こえているはずだが返事はない。気持ちの整理がつかないのか、窓の外の秋晴れの雲のひとつない空を見ている。梶原が、

「雅江さん、入院は早いほうがいいよね」

「ためらっている場合ではないかもしれないわね」

「再来週以降の月曜か木曜日が入院日なんだ」

それまで関心なさそうにしていた妻がいきなり主張する。

「ここにいたいわ、わたし、ここがいいわ」

「そんなことを言っているわけにはいかないんだ、自分のことなんだから、冷静に体に聞いてみるといいよ。今の治療は痛くも痒くもないというし、スタッフも親切だから家にいて心配するより安心だよ」

何の根拠もないがどこかで聞いたのを思い出した。岳人もひろみもそれがいいと勧めると、妻は覚悟を決めたのか嫌とは言わなくなった。

平成二十三年十一月二十一日妻が入院する。手術は拒んだのと転移がいくつか確認されて、難しいとのことで抗がん剤治療を主に行なうことになった。

抗がん剤を投与して二週間後に検査を行ないその結果によって続けるか薬を変えて行なうかを決める。その間は特別な治療もないので帰宅も可能と言われて戻ると、やっぱり家がいい、と何度も口にする。それを何度か繰り返し効果もさほどでないとわかると、病院へ戻りたくないと言い出す。放射線治療を併せて行なうころになると痛みも出てきて帰宅もできなくなった。エコー検査で左側にも痼りが見つかる。

病院から延命措置は希望するか問われる。妻はすっかり気落ちし病気そのものを拒否するように自分の意思も言わなくなる。あらぬ方を見つめ話しかけてもまともな返事をしない。梶原はまた子供を呼んで相談する。

症状が思わしくなく、受け答えも自分では難しくなっているのを子供らも知っている。

「治療を続けるかどうかってこと?」

「うん、それもあるが。治療の中止となれば病院を出て福祉施設に移らなければならない。できるだけ治療を続けていきたいが、万が一のときの措置をどうしたらいいか聞いておきたいんだ」

「延命のことでしょう、みんな悩むのよ。延命措置を始めると途中で中止できなくなるから、意識がないまま長引く患者もいるのよ。そうなると家族も大変だけど、お母さんはどうしたいかだわね」

雅江は職業からくる冷静さと経験から言うのだろうが親身が感じられない。悪気のないのはわかるが、今は妻に寄り添うのが必要だ。

「症状がよくならないなら家に帰って静かに過ごすのもどうかしら、私もできるだけ来るようにしたいけど、毎日というわけにもいかないし」

ひろみが夫の顔を窺う、農家も長くは留守にできないのだ。

「俺も来るようにするけど、ひろみは当分お母さんのそばにいたらいいさ。お母さんはこの家が気に入っているから、落ち着くんじゃないかな」

勇一は節々の太い手で日焼けした顔を撫でながら言うが、子供らはまだ小さいので引き止めているわけにもいかない。

「それも方法だけど、家で見るとなると訪問医に定期的に来てもらわなければならないし、いつも誰かが家にいなければならないの。場合によっては介護も必要になるわ。お父さん始めみんな仕事を持っているから都合をつけるにしても大変よ。それに同じ人の方が様子がわかっていいんだけど」

梶原がその役目を担うのがいいと言うのだろうが返事はできない。今すぐ仕事を辞めるわけにはいかないし、子供たちに頼むのも負担が大きい。近所の知り合いに頼むにしても四六時中は無理だ。

なかなか決まらないので梶原が、万が一のときは延命はしない、それまでは入院を続け必要な治療も続ける、と子供らに告げ病院にも伝えた。

梶原はベッドから転げそうな端っこにようやくとどまったいる体を動かせないほどのだるさの中に、「延命」を聞くと苦い悔恨と遣り切れない身を裂かれる思いになる。体が弱っているからだけではない、妻の終末の結論が折りに触れて思い出されるのだ。長くはないだろうとは察しられてもそれだからといって自分が下したのは本当に正しかったのか、いや正しいかどうかはわからないが、妻に寄り添い、少しでも安らぎと安堵を与えてやれただろうか。もう少し根気よく妻の意向を聞き出してそれを尊重すべきではなかったか、あまりにも性急に決めてしまった悔いは消えない。それに妻の意向を確めないばかりか子供らの意見も聞くには聞いたが、それらも無視する格好になった。妻はもっと長く生きていたかったはずだ、気に入っていた家に戻ってくればもう少し生きていたかもしれない。気分がよくなり、庭から見える石神井公園の満開のさくらを見下ろせたかもしれない。よく聞いていればそうしたいと言ったはずだ。それを仕事のせいにして入院を続けさせた、家に戻れば自分が面倒をみなければならない、仕事も辞めなければならない。妻の食事から日常の細かいところまで手をかけてやらなければならない。

あのとき仕事はまだ辞めるわけにはいかないと強く思っていたが、それは妻の面倒と比較してできるはずはないと心のどこかにあったからだ。後になって考えてみると妻の面倒を避けていたのだと気がつき愕然とした。ひろみが家に戻るのがいいと言うのも、妻が遠く微かに叫んでいるのも聞いてはいなかった。

梶原は聞いていないが女同志の気安さから親子でそんなことを話していたかもしれない。ひろみはためらいもなく農家に嫁いだが農家は自然が相手だ。都会のくらしで自然に親しむのは難しくなっているが、妻は子供のころに親しんだであろう木々や草花を思い出しては気持ちが和んでいたのであろう。狭い庭にも不満を言わず草花を絶やさなかったのは、幼いころから育んだものが生かされていたのだ。ひろみもそれを見ていてあるいは母に聞かされているうちに、そういう世界に憧れを抱いていたのだ。

梶原も農家の出だが家の手伝いは好きではなかったので何かと用を作っては避けていた。上京してからはすっかり子供のころのことは忘れている。妻が狭いところに並べる鉢も邪魔だと内心舌を打っていた。季節の野菜を持ってくるひろみ夫妻に、懐かしいわ、この泥がついているじゃがいも、葉のついている人参も、と

しみじみ見ていた。梶原は泥が落ちて汚れると忌ま忌ましく思ったものだ。

延命を望まないと病院に伝えると妻は急速に弱り意識が薄れてくると個室に移される。家族が励ますようにとの病院の依頼だが名を呼んでも返事はない。傍らのモニター画面の値が少しずつ下がっていくが医師や看護師は来ない。堪り兼ねてナースステーションに伝えると、こちらでも見ていますからご心配ありません、と素っ気ない。延命を望まないというのはこういうことなのだと腹立たしくもなるが、既に何をしても手遅れのようにも思われる。延命措置を希望すれば状況が変わったかもしれないと思いながらも、以前、延命措置の知人を見舞ったことがある。

気持ちよさそうに眠っている穏やかな表情だが、体中からいくつもの管が傍らの機械に繋がれ、ボコボコと泡の音や低く唸るモーターの音が絶えずしている。聞こえるのは機械の音ばかりで人の気配を感じさせるものはない。目は天井の一点を見ているが明らかに認識している目ではない。それでも家族は生き続けてほしいと願うのだろう。そう思うが故にあらゆる可能な方法を希望するのだ。意識はなくても肉体があって触れれば温かいのに希望を持ち続けるのだ。

妻に延命を希望したとしても、あの無機質で治療の一部なのかどうかわからない、生きている実感もなく、いつまで続くのかわからない不安もあった。

延命を希望しないと病院側に伝えた梶原は自分の命でなく、本人の意思も確認していない。法的に違法ではないにしても手を下すのと同じではないか、と悩まされ続けてきた。家族とはいえ自分以外の命を左右する決断は許されるのか、しかもその決断は利害とまではいえないが、少なからず個人的な都合に左右される。何の蟠りもなく客観的に本人の立場に立っての判断は誰ができるだろう、もしできたとしてもそれで反省も後悔もしないですませるだろうか。

残された者の逝く者への情が深ければ深いほどどんな決断をしてもすっきりとした気持ちになれないのではないだろうか。短い時間に決めなければならないのだから、それが最善となるとも限らないし、第一人の命への関与なのだ。そのときは納得しても時間が経てば思いも変わる、事情も違ってくる。

妻は苦しむこともなくもちろん何かを口にすることもない、まだまだ生きて桜の花を見たかったであろうが、梶原は責められていると強く思いながらもすでになす術はなくなっていた。取り縋ってもう一度目を開けてくれと叫びたかったが、死を確認するために医師と看護師が入ってくる。妻は暖かくなり始めた三月十六日に亡くなった。

梶原は数日頭から離れないままベッドに横たわっていたが、それが気分を強めたのかいくらか体調が戻り気だるさも抜けてき

た。それを見計らったように岳人家族とひろみ家族が見舞いに来た。岳人には男が二人、ひろみには女が二人の子がいる。岳人の下の富士也が入ってくるなり、
「じいじがいた」
大きな声を上げると雅江が、シーッ、と口に指をあてる。
「気分がいいのか」
岳人もいつもと違うのに気をよくする。
「おじいちゃん、遊ぼうよ」
ひろみの長女の佳代が梶原の腕をとる。
「遊びに来たんじゃないの、おじいちゃん病気なんだから」
富士也もねえねえとせがむ。
「ちょっと起きてみるか」
岳人が心配そうに手を貸す。
「久しぶりにみんなの顔を見たら元気が出てきた、談話室へ行くから先へ行ってジュースを飲んでな」
四人の子は、やったあ、と出て行くのを勇一が後を追う。
そろりとベッドに半身を起こすと少し目眩がする。下を向いてじっとしていると落ちついたのでベッドの下のスリッパを足でさがす。
「車椅子を借りて来ようか」
「大丈夫だ、いいよ」
談話室は病室を出て右へ行きナースステーションの斜め向かいで三十歩ほどのところだ。三人が護衛のように前後につくのが決まり悪い。慎重に手摺りに掴りながら行く、久しぶりに歩くがそれほど苦でもない、息切れも途中で足が止まるのもなく入って行くと、日曜日のせいか席がほぼ埋まりにぎやかだ。
「おじいちゃん、こっち」
勇一の次女の早苗が手を上げる。テーブルの上には缶コーヒーと茶のペットボトルがある。かけるといきなり富士也が、
「遠足に行くんだ」
「いつだ」
「うーん、こんど」
「どこへ行くんだ」
「うーん、ママ、どこだっけ」
「忘れん坊は行けないの、思い出して」
思い出そうと首を捻るが出て来ない。
「電車に乗って、それから、野球をするところだよ」
「所沢の遊園地か、いいなあ、じいじもついて行っていいかい」
「じいじは、だめ」
「どうしてだ」
「病気が治っていないから、ママと行くんだ」
富士也は幼稚園に通っているが口が達者でサッカークラブにも通っている。兄の駒人はおとなしくあまりしゃべらない。このままでは友だちもできないとスイミングクラブに通わせたが、運動

も苦手のようで続かない。
　岳人がテレビの囲碁講座を見ていると隣に来て見ている。興味がありそうだと近くの囲碁教室へ連れて行き、小学二年だというと、始めるのに早過ぎるのはない、というので通わせてみると一年以上も続いている。家でも練習したいというので近く用具を見に行く、それも楽しみなのか、どことなくおどおどしていた態度が薄れている。
　梶原は孫らに会うたびに大人びてくるのに目を細めながらも、ありあまる元気を受け止められないのが情けない。特に女の子はおしゃまで可愛いが、ときにどきりとするようなことを口にするのに驚く。頃合いをみて岳人が延命措置はどうするか、とそれが目的でもあるように言い出す。
「それなんだが、少し考えてみたんだ。こういうことになればそのときは近いだろうってな。今日はいいが急に変わることもあるから。よくなったり悪くなったりを繰り返していくだろうが、全快は望めそうもないな。だけどそれによってお前たちは一喜一憂しないでくれ。孫たちの行く末も気になるし、この世にも未練はある。それを言っても詮ないが確実に終末に近づいているのは確かだからな。それでなんだが、いま岳人が言ったことはしなくていいからな」
　聞いていたひろみはハンカチを握り締める。雅江はこういう場面に何度か立ち合っているのか硬い表情をしているが冷静だ。岳人が、
「それでいいのか、親父が言ったからってためらわずにそうできるかどうかわからないけど」
　本人がいいと言っても家族は一分でも一秒でも長くと思うだろう。
「わしはお母さんのことで今も悔いがあるんだ。あれでよかったのか、もっと母さんに寄り添わなければならなかったのではと思うんだ。思い出すと病気より悲しいし悔しいよ。母さんのときはわしが決めたから悩むのはあたりまえだが、お前たちにわしのような思いをさせたくないんだ。もしわしに万が一のときがくればそのときは動揺しないで自分と家族のために生きてほしいんだ」
「だけど親父、生身の人間だよ、俺も。そう簡単に割り切れるかよ」
　ひろみがハンカチを目にあてると、
「そんなこと今は言わないで、まだまだ先があるんだから。それに何かやりたいことはないの？」
　子供らが厭きて走り回るのに、勇一に外で遊ばせてきてくれないかと頼む。周囲の席は楽しげに話し合っているところもあるが、深刻な顔を寄せあってひそひそと続けている辺りの空気は動かないようだ。
　ひろみが心配そうに梶原に目を向けるが決めたことだというしかない。岳人にもひろみにも蟠りなく生きてほしいのだ。

誰でも生まれてくるのは親の意思だが、その後の生き方は自分の意思だ。だが死は誰が決めるのか、誰の意思によればいいのか、人の命に限りはあるが、自分自身の命だとしても自分だけの意思では決められないかもしれない。それでも自分の意思を示しておかなければならなくなっている。一人で静かな死を迎えるのはできなくなった。今は誰かの手を煩わさなくてはならない。死に立ち会えば少しでも長く、少しでも苦しまず、少しでも希望に添うようにと考えないわけにはいかない。しかもそれは一律ではない、どんなに手を尽くしたとしても後に残る者には、あのときを思い出し、そのたびに悔いを噛み締める。それらを少しでも和らげるのは死を迎える者の義務だ。

「わしが自分のことを決めておきたいのは、お前たちへの配慮でもあるが、自分を納得させるためでもある。これまでお前たちにも母さんにも多くの勇気と力をもらってきたが、何もしないまま過ごしてしまった。だからそれにけじめをつけるためでもあるんだ」

「そんなことはないよ、親父は家族のために懸命に働いてきたじゃないか、俺たちがこうしていられるのもそうだと思ってるよ。謙遜なんかしなくていいんだ、やりたいようにやればいいよ。俺らにもできることがあればやらせてくれよ」

「今は何も望むものはない、お前たちは自分や家族のために好きなようにやってくれればそれでいいんだ」

梶原の意思が固いと察したのか子供らは黙った。

「繰り返しになるが終末期になったら延命はしない、治る見込みのない治療もしない。これは病院へも伝えておく」

どこで遊んできたのか孫らが戻ってきた。佳代は何の花か白い花を数本手にしている。駒人はすすきの穂を富士也の首に触れると、止めてよ、と言うのにまた押し付ける。後から戻ってきた勇一は、

「この先の公園は広くていいな、畑にしたらかなりのものが収穫できそうだ」

「おじいちゃんの家に行っていい？お花がいっぱいあってきれいなお庭だから、ちょうちょやかたつむりがいる？」

梶原は虚をつかれたように返事に困る。花が咲いていたのは妻が元気にしていたころだ、孫らがよく来たのも妻がいたころで跣で庭をかけまわっていた。今は手入れもしていないから雑草が増え木の枝も伸び放題だ。

「ちょうちょは晴れた日じゃないと来ないけど、かたつむりは雨の日がいいな、雨はいやか」

「雨でもいい、傘も長ぐつもあるから」

「そうか、じゃあ、花をいっぱい咲かせておかないとな」

わあい、佳代が飛び跳ねると早苗も一緒に跳ねるのを、ひろみが制する。

「親父、帰れそうか」

「見たところ血色もいいし、動きも言葉もはっきりしているから、よくなっているわよ」
雅江が嬉しそうに言うと梶原もそんな気がしてくる。
「退院するの？　いつ」
佳代が約束だと小指を出すので梶原も小指をからませる、振られると力が強い。
「約束したから、お花、あげる」
「いいのか、ありがとう」
佳代は花が好きなのだ、都会と違って近くにも咲いているだろう。梶原は枕元の引き出しから財布を取り出し、孫らへの遠足の小遣いと、帰りに何か食べて行けと数枚の札を渡す。孫らは飽きてきたのかじっとしていない。
「今度は家で会おうな」
うん、うんと孫らが元気に廊下へ飛び出して行く。
「たびたび来るのも大変だろう、もう大丈夫だから心配しなくていいからな」
それでもまた来ると言い残して帰って行く。急に身の回りが静かになると寂しくなる、孫らの見舞いは嬉しいが疲れもする。今夜は熱が出るかもしれないと思っていると体が火照ってくる。
翌日は血液とCT検査の後に坂上医師の診察を受ける。
「不思議な体をしてますね、梶原さんは。これなら退院も近いですよ」
「ありがとうございます、先生のお陰です」
「過信はいけませんよ、三回目ですが次が本当の最後になるかもしれませんから」
半分脅しのように言われるがその夜はなかなか眠れない。折角生きて帰れるのだから庭の手入れから始めようと思案する。
妻が気に入っていた家も古くなると建て替えも希望していたが、一度リフォームしただけだ。家の隅々まで妻の思い入れがある。調度品も飾り付けもほぼそのままになっている。亡くなってみると建て替えも大幅な模様替えも妻の残したものを処分するようでできない。家の中はそのままにしたいが庭は放っておけない。近所の人も前を通る人も足を止めるくらいだったが、今は誰ひとり振り向く者はいない。
妻がこの庭を見たら嘆くに違いない。最後に自分の意思を示さなかったのは、言わなくてもわかっていると思ったのかもしれないが、わたしがいないと、何もしないんだから、と咎めているだろう。孫に言われるまでもなく退院できたら手をつけよう。帰ったらのんびりというわけにはいかないがそれでもいい。もしそれが原因で四度目の入院になっても悔いはない。妻の最後を最善だと判断したのは身勝手からなのだ。それを償うためにも後悔しながら生きる他はない。
病院から催促もなかったので、延命の書類は必要かと巡回診察のとき坂上医師に聞くと、次回のために書いておきますか、と笑

いながら出て行く。

それから一週間後に退院して家に戻ると安心したのか体が嘘のように軽い、仏壇に向くと遺影がほほえんでいるようだ。やはり家がいい、家族が揃っていたころが思い出される。妻にも子供らにも守られている気がする。年が明ければ七回忌だ、その前に庭の手入れを終えておきたい。庭から見えていた石神井公園の池は前にマンションが建ったので、その横に少し見えるだけになった。それでも庭に続くその景色を見ていると心が穏やかになる。

だいぶ荒れているなあ、このままではいけない、明日からでも雑草刈りから始めよう、枯れ始めてところどころ茶色に変わっている庭へ下りて行った。

佳作――フィクション

雪降る街で

福井・全国一般福井地方労組
桐原　則介

第一章　大雪の朝

二月六日、その日は、雪がしんしんと降り続いていた。前日から降り始めた雪は、未明にはすでに八十センチには達していた。

午前五時過ぎ、雪が降り続く中を朱美は、自宅を出て職場に向かって歩き始めた。毛糸の帽子と手袋、防寒用ジャンパーにゴム長靴という恰好で。細かい雪がみるみるジャンパーのフードにたまっていく。普段は、自家用車で三十分程かけて通勤しているが、この日は車での通勤を断念した。自宅横に止めてあった軽自動車は、雪ですっぽりと覆われ、白いかまぼこのようになっていた。しかも、この日は、自宅前の市道には除雪車が通っておらず、腰のあたりまで雪が積もっていた。これでは、駐車場の雪を除雪し、車を車道にだしたところで、とても大通りまで進めそうになかった。

朱美は、仕方なく、病院までの十キロほどの道のりを歩いて出勤することを決断した。一緒に暮らす母親のために玄関前から車道までの通路の雪をスコップで掻き出すと、雪の中を歩き始めた。

しかし、雪道を歩き始めてすぐに、朱美は後悔しはじめた。雪の上にわずかに残る足跡の上をおそるおそる進むしかなかった。ズボッ、ズボッと長靴が雪にめり込み、ひどいときには膝まで雪に埋まって、足がなかなか抜けなくなる。

五十嵐朱美、三十三歳。精神科病院に務める看護師だ。朱美は

この日、本当は出勤日ではなかった。ところが、昨日、夜勤を終えて自宅で休んでいると、同僚の須藤博子から連絡が入った。「子供が急に熱を出したから、明日の日勤を代わってもらえないかな？」と。朱美は、軽い気持ちで「いいけど、今度なんかおごってよ」と、引き受けたのだ。朱美は、「あの時、何か用事が入っていると言って、断っておけば良かった」と今さらのように後悔した。

朱美の暮らす地方では、冬場に降雪に見舞われることは珍しいことではなかった。朱美も、前夜のテレビニュースで大雪への注意が呼び掛けられていたので、いつもより一時間以上も早く起きて備えてはいた。しかし、まさかここまで大雪になるとは思ってもみなかった。

街の景色は、昨日までとはまるで一変していた。道路はもちろん、街全体がすっぽりと雪に埋もれてしまったようだ。いつも見慣れた通りのはずが、街灯にうっすらと浮かぶ街並みは、どこか知らない街に迷い込んだような錯覚さえ感じた。朱美の住む家は、市の中心部から外れた田園地帯の中に造成された住宅地にあった。住宅地のはずれに広がる田畑は、一面雪に覆われて道路との境目さえ分からない。誤って側溝に落ちてしまう危険性もあった。等間隔にポツン、ポツンと並ぶ街灯を道しるべに歩くしかなかった。

一時間近くも雪に埋もれた道を進むと、ようやく市街地へと続く県道にたどり着いた。その頃には、いく分雪も小降りになって、遠くの山並みがうっすらと明るくなっていた。ここまで来れば、さすがに除雪車が道を開けてくれているだろうとタカをくくっていたが、朱美をさらなる困難が待ち受けていた。

県道は、除雪用のブルドーザーによって、車道の雪が歩道側にきれいに押しのけられていた。しかし、歩道に積み上げられた固い雪の塊は、朱美の背丈程もあり、とてもその上を歩けたものではない。

仕方なく朱美は、雪の防波堤に囲まれた車道に出て、市街地の方向に歩き始めた。しかし、圧雪された車道はツルツルとすべり、抜き足差し足で歩くしかなかった。しかも、時折通る車のヘッドライトに背後から照らされ、朱美は慌てて雪山に身体を押し付けて車をやり過ごすしかなかった。立ち止まって何台かやり過ごしてはみたものの、市街地へ向かう車の数は増えていく一方だ。このままでは、雪道でスリップした車がいつ自分に突っ込んでくるかわかったものではない。

あきらめて引き返すことも考えてはみたが、もし自分が出勤しなければ、夜勤の職員がそのまま働き続けることになるだろう。朱美の勤務する認知症病棟では、夜勤の際にほとんど仮眠も取れずに一晩中走りまわっている。夜勤で働く職員の顔を思い浮かべると、さすがに勤務に穴を空ける訳にもいかなかった。

暫くどうしたものか迷った挙句に、朱美は、突然振り返って、

手を大きく降り始めた。「もうこうなったら、病院まで乗せてくれる車を捕まえるしかない」そう心に決めて、手を振ってみたものの、そう簡単に見ず知らずの人間を乗せてくれるやさしい人は現れなかった。何台かの車が手を振る朱美の横を通り過ぎていく。意地になった朱美は、車道に大きく身を乗り出して手を振ると、ようやく一台のランドクルザーが停まってくれた。

天井に山のように雪を乗せたまま走ってきたその車から、ドライバーの青年が顔を出して「どうかしましたか?」と声を掛けてきた。朱美は、「病院に行きたいので、車に乗せて下さい」と大きな声で叫ぶと、返事も聞かずに助手席に乗り込んだ。

黒縁メガネのまじめそうな青年は、二十代後半ぐらいに見えた。その青年は、戸惑ったように「どこの病院まで行くんですか?どこが悪いんですか?」と、尋ねてきた。朱美は、「助かりました。ありがとうございます」と、お礼を言うと、「竹花病院まで行きたいんですが」と、遠慮がちに告げた。竹花病院は、精神科の病院で県内では名の通った病院だった。青年の表情が少し曇った様子を見て、朱美は、すかさず補足した。

「いえ、私が病気ってわけじゃありません。私は、竹花病院に勤めている看護師なんです。今日は、この雪で車を動かせなくて、困っていたんです」

そこまで朱美が説明すると、青年も納得したようで、車を発進させた。車の中には、ラジオニュースが流れていた。時計を見るとすでに六時を過ぎている。朱美は硬い表情のままハンドルを握る青年に「あなたはどこまで行くんですか?」と、おそるおそる尋ねた。青年は、少し言葉を選んだ上で「僕は駅前の近くなんで、そこまでなら構わないですよ」と、答えた。

竹花病院は、駅前から延びる電車通りをさらに一キロ程先に進んだところにある。まあ、そこまで車に乗せてもらえれば、後は歩いていけるだろう、と朱美はホッとした。

県道は、市街地に近づくにつれて徐々に混み始め、ノロノロ運転が続き、やがて渋滞で車は全く進まなくなってしまった。その間にも雪が再び激しく降り始めた。ワイパーが休みなく左右に首を振るものの、次から次と降りしきる雪の大きな粒がフロントガラスに張り付き、視界がだんだん狭くなっていった。このまま見知らぬ青年と二人で車ごと雪に埋もれてしまうのではないか、そんな不安が朱美の胸の中で広がった。

「この渋滞はどこまで続いているんでしょうか?」不安な気持ちを紛らわすために、朱美は青年に聞いてみた。彼とてそんなことは分かるはずもないと思いながら。その青年は、黒縁メガネを片手で抑えながら、「おそらくこの先の国道との交差点までは、渋滞が続いていると思いますよ」と、落ち着いて答えた。

国道との交差点は、まだ三キロ程先のはず。慌てた朱美は、「これじゃ勤務に間に合わないよ」と、思わず呟いた。夜勤との引き継ぎは、午前八時十五分から始まるが、普段なら七時過ぎには病

院に着いて、引き継ぎの前に自分が担当する患者の看護記録を一通り目を通している。こんな調子では、引き継ぎの時間にも間に合わなくなってしまう。朱美は、ここで車を降りて再び歩いた方が病院に早く着けるかも知れない、と思案を巡らせた。

そんな朱美のあせる様子を察したのか、その青年は、「この渋滞がいつまで続くかは分からないので、歩いた方が早いかもしれませんが、この先の橋を歩いて渡るのは危険だと思いますが…」と、的確な助言をくれた。確かにその通りだ。橋の上は道幅が狭く、車をよけようとして端によれば、今度は川に転落する危険性がある。

時刻はすでに七時半を過ぎていた。この大雪の中で危険を冒すよりも、引き継ぎ時間に遅れたとしても、ともかく病院にたどり着くことが大事だと、朱美は思い直した。あきらめて朱美は、窓の外に目をやった。スコップで雪かきを始める住民の姿もあちこちで見られるようになったが、みんな車を車庫から出せずに悪戦苦闘している様子だった。

「この雪じゃ、仕事に遅刻しても、仕方ないですよね」と、青年に声をかけると、「僕も仕事に遅れないようにと思って、朝三時に起きて車庫の前の除雪をして出かけてきたんですが、この渋滞だと間に合いませんね」という返答が帰ってきた。するとその時、朱美のスマートフォンが鳴った。見ると、夜勤をしている後輩の吉沢花蓮からのラインだった。

「朱美先輩、引き継ぎに間に合いそうですか?」朱美は、「ごめん、雪で渋滞につかまっているから、遅れそう。師長が怒っているの?」と、返信した。すると「師長もまだ来てないから大丈夫です。でも副師長がめっちゃイラついてます」と、返事が帰ってきた。朱美は、「これは、困ったわ」とつぶやきながら、副師長に遅れる旨をメールで送信した。しかし、副師長から返信は返ってこなかった。

朱美がそわそわしながら車の列の先に目をやると、渋滞の列に並ぶ前方の車の何台かが、しびれを切らしたように、信号を右折するのが目に入った。市道を抜けておそらく旧道に向かったのだろう。駅前に行くには、国道を使うのが一番の近道だ。しかし、国道と交差しない向こうの旧道に出た方が早く着けるかも知れない。朱美は、そんなことを考えて、「もしかして向こうの旧道を使った方が早いかも知れませんね」と、提案してみた。

青年は、また黒メガネを片手で抑えて考え込んだ上で、「このまま渋滞を進むより、その方がいいかもしれません。行ってみますか」と、同意してくれた。前方の信号が赤に変わり、右折表示が出たところで、青年はハンドルを右に切った。

朱美を乗せた車が市道に突入すると、やはりここにも除雪車はまだ通っていない様子で、降り積もった雪の中に前の車が通った轍が残っているだけだった。朱美の軽自動車ならおそらくタイヤが雪に埋もれて、スタックを引き起こして動けなくなっていたに

違いない。朱美がヒヤヒヤして見ていると、青年の車はグイグイと雪の中を進んでいった。

「この車はなんて馬力があるの」と朱美が驚くと、「一応この車、四WDなんで」と青年は答えた。それでも対向車が来れば、おそらく行き違いが出来ずに立ち往生することになるだろう。朱美は、対向車が来ないことを祈るような気持ちで前方を見つめた。幸い対向車はなく、雪の積もった市道をなんとか通り抜けることが出来た。旧道に出ると、雪で道幅は狭くなっているものの車は流れていた。

「よかったわ、やっぱり雪道は四WDに限るわね。私の軽自動車だったら動けなくなっていたわ」と、朱美がほめると、「昨年、四WDに買い替えたんですよ」と、青年は得意げに答えて、初めて笑顔になった。

「それにしても、なんで市道はこんなにブルトーザーが来るのが遅いのかしら」と、朱美の口から不満が漏れた。すると青年は、少し表情を曇らせて、「除雪車が遅れると市民に迷惑をかけますよね。でも、今回は夜中からブルトーザーがフル稼働で動いているはずなんですが、ここまで一度に雪が降ると今あるブルトーザーだけでは対応しきれないんです」と、説明した。除雪作業は、市から委託を受けた建設業者が行っている。朱美は、自分が随分、勝手な不満を口にしたと恥ずかしくなった。「ごめんなさい、あんな夜中に働いてもらっているのに文句を言ったら罰が当たりますよね。もしかして、除雪業者にお勤めだったんですか?」

「いや、僕は、市役所に勤めているんです」

「ああ、そうだったんですか。市役所の方もこういう時は大変そうですね。雪がひどいからって仕事を休むわけにはいきませんよね」

「それを言ったら、看護師さんの方が大変だと思いますが」

そんな会話をしていると、ラジオの交通情報が流れた。大雪のため高速道路が昨晩から通行止めになっていること。国道もトラックがスリップで脱輪し、大渋滞が起きていることを報じた。それを聞いた青年が、「助かりましたね。あのまま元の県道を進んでいたら、僕らも渋滞で動けなくなるところでした」と言った。

朱美を乗せた車は、ようやく電車通りに差し掛かった。時刻はすでに十時近かった。車が信号で止まったところで、朱美は、「ここまで乗せてもらって、本当に助かりました。ありがとうございます。私はここでおりますので」と、青年に頭を下げて、スマフォを手に持ち、慌てて車を降りた。

雪はいく分小降りになっていた。融雪の水が噴き出す交差点を朱美は、慌てて渡った。振り返って、動き出した青年の車に大きく手を振ると、青年も慌てたように手を振りかえしてきた。その手には、毛糸の手袋が握られていたが、朱美は気が付かないまま、病院へと急いだ。

第二章　豪雪の中の勤務

朱美がようやく病院に着くと、すでに午前十時を過ぎていた。病院の裏手の路地には、雪で埋れた職員用駐車場に入れない職員の車が列をなしていた。玄関前では、事務職員が総出で外来用の玄関前の除雪作業に追われていた。

朱美が認知症病棟のナースステーションに着くと、副師長の北島三津子がイライラした様子で待ち構えていた。「五十嵐さん、遅刻よ！　遅れた分は、残って残業してもらいますからね」と、副師長から厳しい言葉をかけられた。朱美は、カチンときたが、ぐっと堪えて、「遅れて、すいませんでした」と頭を下げて、やり過ごした。まだ日勤の職員は、ほとんど到着していなかった。病院近くに住んでいる職員が日勤の体制に就いているだけだった。夜勤体制からそのまま勤務を続けている三人の職員を含めても、まだ通常の日勤体制には人数が足りなかった。

簡単な引き継ぎを受けて、いつもより多くの患者の担当を割り振られた朱美は、さっそく病室を回った。体温や血圧をチェックしながら、患者の容態に変化がないか、ひとりひとり確認していく。「今日はご飯、全部食べれましたか？」と、声をかけたり、不穏な様子の患者には、しばらく横について話しかけてみるなど、患者の様子に合わせて対応していく。この日は大雪の影響からか、窓の外を眺めて、不安そうに何かを訴える患者が多い。「心配しなくても、大丈夫ですよ」と、声がけをして、患者を落ち着かせるように努めた。

朱美は、病室を回りながら、気づいたことをメモに残していく。後でナースステーションに戻って看護記録をパソコンに打ち込まなくてはならないからだ。竹花病院では、職員の離職率が高く、ただでさえ慢性的に人員不足に陥っている。それに加えてこの日は、いつもより職員が少ないために、休む暇もなく、各病室に行かなくてはならなかった。

お昼を過ぎて、ようやく仕事がひと段落したころに、遅れていた職員が何人か朱美の病棟にも到着した。おそらく何時間もかけて歩いて来たに違いない。ここでようやく昨晩から働いていた職員は、仕事から解放された。

朱美が休憩室で休んでいると、仕事を終えた花蓮が話しかけてきた。「朱美先輩の家は遠いのによく病院まで来れましたね」、と。朱美が事情を話すと、花蓮は、副師長の北島が「大雪で来れません」と連絡を入れてくる職員に対して、「歩いてでも来なさい」と、どなり散らしていたことを教えくれた。「それって、ひどすぎない」と、朱美が言うと、近くにいたベテラン看護師の沢田清美が「サブちゃんもパニックになってんだよ。朝一番にタヌキ師長から家の除雪で腰を痛めたから今日はあなたにまかせるわ、なんて連絡がきたもんだから、あせったのよ」と、事情を説明して

くれた。清美は本来この日は休みだったが、朝急遽、副師長に呼び出されたのだと言う。しかし、花蓮は納得がいかないらしく、「でも、だからって部下に八つ当たりすることないと思うんですけどね」と、不満を述べた。朱美も同感だった。実際、「歩いてでも来い」と言われても、無理な職員もいるだろう、と。

「それにしても、この雪は明日以降も続きそうだけど、どうするんだろうね。大雪だからといって、患者さんを放っておくわけにもいかないしね」と、清美が言った。すると花蓮が「明日、本当は私休みなのに、日勤に入れって言われました。まあ、私の家は歩いて通勤できるんで、こんな時ですから仕方ないですけどね。それより、家が遠い人は、今日は帰れないんじゃないですか？」と聞いてきた。窓の外を見ると、相変わらず雪は降り続いている。雪で遠くが見えないほどの激しい降り方だ。これは、今日は病院に泊まるしかない、と、朱美は覚悟を決めた。それにしてもいつまでこの雪が続くのだろうかと、気持ちが重たくなった。

午後の仕事も終えて、夜勤の職員への引き継ぎを行った。しかし、日中、忙しくて看護記録をまったく打ち込んでいないので、その業務が残っていた。朱美は、自分が気が付いた患者の容態は出来る限り、看護記録に残すようにしている。それは、後で患者の容態が悪化した時に、自分が看護記録をちゃんとつけておけば、いつから容態に変化があったか次の担当者が分かるからだ。実際、朱美自身がベテラン看護師の看護記録を見て、助けられたことが多い。

しかし、そうして残業をしても、竹花病院では、時間外手当の申請をできるわけではない。申請には師長の許可がいるからだ。朱美の病棟では、夕方に入院患者が立て込んだりするなどのよほどの事情でもない限り、師長が残業申請を認めてはくれない。残業申請を提出すると、「勤務時間中は何をしていたの」「要領が悪いからよ」と、責められる。朱美も最初は不満であったが、最近はあきらめて残業申請はしていない。だから、副師長に「遅刻した分、残業してもらうからね」と言われた際も、朱美は、「言われなくても、どうせ残業になるわよ」と、心の中で叫んでいた。

この日は、とりわけ日中息つく間もなく動き回っていたので、まったく看護記録を付ける時間が取れなかった。そのため定時の五時をはるかに超えて、結局、看護記録を打ち込み終わったのは、午後七時を過ぎていた。仕事が終わると、疲れがドッと襲ってきた。朱美は、仕事中から気になっていた自宅にひとりでいる母親に連絡をとった。

「ごめん、今日は雪がひどくて帰れないから、病院に泊まることにする。そっちは大丈夫なの」と聞いた。すると母は、「夜道は危ないから帰って来なくていいよ。こっちは大丈夫だから」と、めずらく強く念を押された。しかし、食事をどうしたのか気になって尋ねてみると、雪がひどくて買い物に行けなかったようで、

「冷蔵庫の残り物で済ませたわ」と、案外落ち着いた様子で返事が返ってきた。母親の実家は、今住む所よりさらに雪深い山間の地域にあるので雪には馴れているのか、それほど慌てた様子はない。母は、「それより、朝も早かったのに、こんな遅くまで働いて体は大丈夫なの？」と、逆に朱美のことを気遣ってくれた。朱美は、母親に心配を掛けたくなかったので「まあ仕事が忙しいのは、いつものことだから」と、答えておいた。

スマホをチェックすると、同僚の博子からラインが入っていた。

「こんな日に勤務を代わってもらってごめん。大丈夫だった？」

「大丈夫じゃなかったわよ、出勤に五時間もかかったよ。それに職員が少なくて仕事が回らなくて大変だった」と、朱美は返信した。

「ホントにごめんね。この埋め合わせは絶対にするから」

「今回の貸しは、高くつくわよ。それより子供の熱は大丈夫だったの？」

「たぶんインフルエンザだと思う。この雪で病院に連れて行けなかったから、明日近所の病院に連れて行くつもりだけど」と、返信があった。この大雪では、子供の通院も大変なことだと朱美は気遣った。「そっちも大変だったんだね。お大事にね」と、返信した。

ラインを終えて、スマホでニュースをチェックしてみると、「国道で千台以上の車が雪に埋もれる」というニュースが流れていた。掲載されている写真をみると、トラックが何台も雪に埋もれていた。にわかに信じられない光景だった。まさか自分がいつも通勤で使う国道でトラックが雪に埋もれるなんて思いもよらぬことだった。朝の出来事を思い出し、あのまま県道を進んで国道に入っていたら、自分も今頃、あの青年と雪に閉じ込められていたのかも知れない、そう考えると朱美は、怖くなった。

この日から三日間、雪が降り続いた。それによって、街全体が完全に機能マヒに陥っていた。街の大動脈である国道の通行止めが続き、いまだ何百台もの車が取り残され、自衛隊まで出動する事態になっていた。朱美は翌日も日勤を行ったが、その日も雪が降り続き、その晩は、後輩の花蓮のアパートに泊めてもらうことにした。この間も、まともに出勤できる職員の数は限られていた。そこで、三日目には、朱美は夜勤体制に入ることになった。

大雪になって四日目、ようやくこの日、雪が小降りになり、時折、晴れ間も見られた。夜勤を終えた朱美は、なんとか翌日は休みが取れそうなので自宅に帰ることにした。同じ夜勤体制に入っていた同僚の博子に車で家の近くまで送ってもらうことになった。博子の家は、朱美の自宅の近くを通る県道をさらに進んだ先にあった。市内の幹線道路の除雪は徐々に進んでいたものの、いまだ市道までは手が付けられていない。除雪された幹線道路も沿道の雪山で使える車線が限られ、市内の至るところで、渋滞が起

きていた。午前十時に病院を出発した車は、国道を迂回して、二時間以上もかけて、郊外に出た。途中で朱美は、博子にあの日の出来事の一部始終を話した。博子は、「その人、よく車に乗せてくれたよね。まるで救世主じゃない。それで連絡先は聞いたの？」

そう聞かれて、朱美ははじめて名前も連絡先も聞いていなかったことに気が付いた。「なんだせっかく公務員と知り合うチャンスだったのに」と、博子に言われると、朱美は「そんなこと考えてる余裕はなかったよ、あの時は」とふくれっ面をした。

朱美が副師長から「遅刻した分、残業して帰れ」と言われたことを博子に伝えると、博子は、朱美に同情してくれた。

「何なのその言い方、ヒドイね。でも、他の病棟の人から聞いたんだけど、今回の雪で勤務に来れなかったり、遅れたりした職員は、欠勤や遅刻扱いにされるって、言われたらしいよ」

「ウソでしょ。あんな大変な思いをして出勤したのに遅刻扱いにするわけ。だいたいあの雪じゃ、遠くからは仕事に来れないよね」

「せっかく雪の中を何時間もかけて通勤してきたのにね、それで遅刻扱いなんて踏んだり蹴ったりだよ。ウチの旦那の工場は、翌日から一週間休業になったわよ」

「普通の会社は休みになるわよね。それなのに遅刻とか欠勤扱いはないわね」

「朱美って、労働組合の執行委員だったよね。他の役員に何とかならないか聞いてみてくんない？」

朱美の職場には、正社員でつくる全員加盟制の労働組合があった。執行委員は、各部署で選出されている。朱美は、昨年の秋に認知症病棟の執行委員に選ばれたのだ。といっても、朱美の病棟では、執行委員は順送りなので、これまで役員をやったことがなかった朱美に順番が回ってきた、ということだ。「次の執行委員会の時に聞いてみるけどね。ウチの病院って、職員が文句言っても聞かないだろうけどね」と、朱美は答えるしかなかった。

いつも通る県道に向うために、旧道から市道に入ったところで、トラブルが起こった。対向車を避けるために、博子が車を路肩に寄せて一旦止まったところ、前輪タイヤが雪にめり込んで、空回りを起こし、進めなくなってしまった。朱美が車を後ろから押してみるが、車は動かない。博子と二人で途方に暮れていると、近くを通りかかった作業着姿のおじさんが一緒に車を押してくれた。それでも、車はスタックから抜け出せずにいると、そのおじさんが近くで家の除雪を行っていた住民たちに声を掛けて、男性四人が集まってくれた。朱美は、そのおじさんから「お姉さんもう車に乗って。車が動き始めたらお礼はいいから、ブレーキを踏まずに一気に県道までいきな」と声を掛けられた。男五人がかりで後ろから押され車はようやく雪のくぼみを抜けて、前に進みだした。朱美はあわてて窓をあけて後ろに向かって、大声でお礼を言った。朱美が「すごい親切な人たちだったよね」と言うと、「こういう時だから、お互いさまだね。ウチの旦那も近所でスタ

ックした車を助けたって言ってたわよ」と、博子が答えた。
お昼過ぎに朱美の住む町内の近くまできたが、その町内の市道は、いまだ除雪がされていなかった。車を降りて、そこからは自宅までトボトボと歩いて帰った。住宅地の横に広がる雪原は、時折顔を出す陽の光に照らされて、遠くまでキラキラと輝いて見えた。自宅に着くと、母親が玄関前で雪かきをしていた。かなり疲れた様子だったが、朱美の顔を見ると「よく帰って来れたね」と安堵した様子だった。屋根に積もった雪は、人の背丈ほどもあり、下屋まで張り出していた。早く屋根の雪下ろしをしないと危険な様子だった。朱美は、この疲れた体で明日一日中、除雪作業をしなければいけないのかと思うと、憂鬱な気持ちになった。

第三章　労働組合の会議

豪雪から二週間程たった二月下旬。街はようやく元の姿を取り戻しつつあった。市道に残っていた雪も除雪が進み普通に通行できるようになった。国道の路肩に煤けた雪山が残るものの、幹線道路の渋滞もほとんどなくなっていた。それでも朝晩は零下まで冷え込み、凍結した路面に注意しながら通勤する必要があった。
こうした中で大雪のため延期されていた竹花病院職員労働組合の定例の執行委員会が開催された。日勤の仕事が終わった午後六時半に朱美は、事務棟にある組合事務所に入った。すでに十人程の執行委員が顔を揃えており、さっそく執行委員長の司会で会議が始まった。
この日の議題は、三月に毎年行っている春闘の賃上げ交渉に向けた要求項目の案を練り上げる事だった。ところが、会議をはじめてまず話題となったのは、豪雪の際の病院側の対応についてであった。口火を切ったのは、急性期病棟の執行委員だった。「ちょっと聞きたいことがあるんですが、あの大雪の期間に出勤できなかったり、勤務に遅れたりした人の扱いはどうなるんですか？
ウチの病棟の師長からは、出勤出来なかった人は欠勤、遅れた人は遅刻扱いにすると言われたんですが…」
これに精神デイサービスなどの介護部門の執行委員が反応した。「それって酷いじゃないですか。あの雪の中で出勤しろって言われても無理ですよ。ウチの部署では、課長から連絡があって、年休扱いにしておくから無理して出勤しなくていいと言われましたよ」
「それは、あの大雪では、デイサービスなどの利用者も誰も来ないからだろうけど、病棟の方は入院患者さんがいるから、職員には歩いてでも出勤しろって、指示がでてたのよ」と、別の病棟の看護師が説明する。
朱美も自分の病棟の状況を報告した。「ウチの病棟では副師長から、遅刻したら、その分を残業してから帰れって言われました。でも、普段から残業してても申請できないのに、遅刻したから残

業しろというのは納得がいかないです。それに『歩いてでも来い』というのも、ひどいと思います。あの状況で遠くから歩くのは無理があります」

別の病棟の執行委員からは、「ウチの病棟では、隣の市から六時間近くかけて歩いて出勤した職員もいるんですが、病院に着いたら体調が悪くなって寝込んでしまったんです」という報告もあった。

ここで執行委員長を務める男性看護師が「この件については、みんなからの不満の声が強かったので、今日事務長と協議してきました。事務長から大雪の期間は、遅刻した人も欠勤した人もすべて年休に振り替える、という返答をもらいました」と、説明した。これに対して「そんなの当たり前のことだわ。なんでもっと早く周知しないのかしら」と、突込みが入った。

「でも、年休が残り少ない人はどうなるんですか？　やっぱり欠勤扱いですか？」という質問が出された。委員長は、困った様子で「そこまでは確認しなかったので分かりませんが、無理して出勤した人もいるので特別休暇というわけにもいかないでしょうから…」と言いかけたところで、「そんなのかわいそうでしょ。他の会社では一週間休業になったところもあるくらいなんだから、欠勤にしなくてもいいでしょ」と、ベテラン看護師から声が飛んだ。女性の書記長が「公休と勤務を振り替えたりして欠勤にならないようもう一度確認してみたらどうでしょう」と、委員長に促した。

それでも納得のいかない看護師からは、「あの大雪の中を歩いて出勤しろっていうのは、おかしいでしょ。ウチの病院は職員のことを全く考えていないのよ。これに抗議したほうがいいんじゃないの」と、意見が出された。委員長は、「そうは言っても、病棟には看護師の配置基準も定められているので、非常時でも職員を確保しないといけないのは確かなので…」と、言葉を濁した。

「でも、言い方ってものがあるわよ」と、納得がいかない様子だった。朱美もその通りだと思った。

慢性期病棟の執行委員が「ウチの病棟では、師長から連絡があって、家の周りの状況を伝えたら、じゃあ無理しなくていいよ、って言われました。歩いて出勤できる範囲の職員に急遽、勤務を要請して対応しましたが…」と、報告した。

ここで竹花病院労働組合が加盟する中小労連の専従書記長の水田俊夫が発言した。「あの大雪の期間は、他の会社では知事の要請もあって一斉休業をしたところが多かったようです。無理をして出勤させると、途中で車が動けなくなったりする危険性があったからです。病院は、患者さんもいるので休業はできませんが、職員の安全確保に責任を持つ必要があります。あの状況で遠くから歩いて出勤しろ、というのは、使用者としての安全配慮義務に反していると思います」

「ほら、やっぱりちゃんと抗議しないとだめなんじゃない。管

理職は患者様のことを第一に考えて、なんて言うけど、職員が事故にでもあったら病院はどう責任をとるつもりなのよ」と、ベテラン看護師が声をあげた。水田が続けた。「他の病院では、職員に対して災害時に徒歩で出勤できるか、どうかをあらかじめ調査しているところもあるようです。もちろんその場合、豪雪だけじゃなくて、地震や豪雨など災害の種類によっても変わってくると思いますが。事前に災害時の危機管理対応をちゃんと経営者が作っていないから各部署の管理職の判断でバラバラの対応になってしまったんじゃないでしょうか」

これを受けて書記長が「今回は事前になんの取り決めもないから、師長がパニックになって、部下に怒鳴り散らしていたんだと思うわ。今後も豪雪だけじゃくなて、他の災害もあるかもしれないからちゃんと交渉で対応策を協議した方がいいわね」と、話をまとめた。

朱美は、もやもやとした気持ちがスッキリしたような気がした。委員長が病棟以外の他の部署についてはどうだったのか、質問した。

患者への給食をつくる調理課の執行委員が発言した。「私たちの部署では、大雪の予報が出ていたので、あの日、早出の職員は前日から病院に泊まっていたんです。早出が午前五時から仕事なので大雪になると間に合わなくなるので。それでなんとか時間通りに患者さんに食事を出すことが出来ました。ただ職場のみんなからは早出がこんなに大変なのに手当が一回五百円しか付かないことに不満が出ていますが」

「五百円って、少ないわね。夜勤だったら一万円近く手当が出るのにね」と、他の部署の執行委員から同情する声が上がった。

「今回の豪雪で他の病院では給食が間に合わなくて患者様に迷惑をかけたところが多いのに、ウチの病院では一度も食事が遅れなかったというのは、事務長もほめていました」と、委員長が付け加えた。

「だったらもっと手当をあげてあげればいいじゃない。去年まで給食の外部委託を検討していたくせにね」と、ベテラン看護師が突っ込みを入れる。「だいたい事務長じしんが電車通勤だから、あの期間、出勤してないし、ドクターでも一週間来なかった人がいたんですよ。調理師の皆さんを見習ってほしいですね」と、事務部門の執行委員が付け加えた。

この日の執行委員会では、この後に春闘交渉の要求項目についても検討した。最終的には職場集会を開催して決定することになるのだが、執行部の要求案としては賃上げと一時金は昨年の要求額と同額にすることになった。その上で付帯事項として調理課の早出手当のアップを入れた。その他に何か要求すべき事項がないか、委員長がみんなに尋ねた。

他に意見がでない様子をみて専従の水田が「さっき、普段から残業代が申請できないという部署がありましたが、どういうこと

なんですか?」と、質問した。朱美は、少しとまどいながら説明した。「あの、ウチの病棟では、看護記録などを打ち込むために残業になっても、師長が残業申請を認めてくれないんです。申請すると、勤務時間中になんで出来なかったのか、要領が悪いんじゃないかと責められるので、誰も申請していません」と。

これに対して、他の病棟の執行委員からは「ウチの病棟では、定時になっても仕事が残っていると、師長の方から残業を申請するようにと声をかけてくれますよ。要領が悪いからだ、とか言われたら、申請できないよね」と、意見が出された。

水田からは「その師長は、みんなが業務がおわるまで残っているんですか?」と、さらに質問を受けた。朱美は「副師長は、遅くまで残っている時もありますが、師長はさっさと帰ってます」と、答えた。水田は、「本来、タイムカードがない場合には、管理者が職員の労働時間を確認するか、そうじゃなければ、職員の自己申告を妨げてはならない、と決められています。それに看護記録も業務ですから、それが時間外になれば当然、残業代が発生します」と、説明した。

朱美は、労働法のことなど詳しく知らなかったので、そんなものかと驚いた。しかし、委員長は「本当はそうなんですが、師長の肩をもつわけじゃないけど、確かに勤務時間中、他の職員としゃべっていて後で時間外に看護記録を付ける職員もいるんですよね」と、答えた。これには、ベテラン看護師が反論した。「そういう職員には師長が注意するのはいいけど、朱美さんの病棟は、慢性的な人員不足で勤務時間中に看護記録をつける時間がないから、時間外になっているんでしょ。だから残業代の申請を認めないのはおかしいわ」他の執行委員からも「他の病棟のように師長がその日の業務が大変だったかどうかはわかっているんだから、ちゃんと申請するように声をかけるべきだと思うけど」という意見もだされた。他の執行委員からは、「私が以前勤めてた病院では、タイムカードがあったけど。なんでここの病院はないんだろ。それも要求した方がいいんじゃない」という意見も出された。そこで書記長が「残業代の申請を規制するような管理職の対応を改めるよう要求してはどうですか。それとタイムカードの導入も要求に入れましょう」と、委員長に促した。

委員長は、あまり乗り気ではないようすだったが、「じゃあ、そうするか」と応じた。

朱美は、自分の発言から思わぬ展開になったことにとまどいながらも、師長の対応がおかしいと、他の執行委員が言ってくれたことがうれしかった。

執行委員会を終えて、外にでると雪がヒラヒラと降っていた。その雪が街灯に照らされて紙吹雪が舞っているように朱美には見えた。

第四章　団体交渉

経営者側との団体交渉は、三月中旬に行われた。団体交渉には、医療法人の理事長は出席せず、事務長以下、各部署の部長が参加する。組合側は、執行委員が全員出席し、交渉場所の会議室の前には、組合員が大勢待機している。やぼったい背広を着た専従の水田も交渉に参加した。

交渉冒頭、立派なスーツを着た事務長が豪雪のことに触れ、「職員の皆さんには献身的に業務に従事してもらい、大変助かりました。とりわけ、調理課に関しては、一度も遅れることなく、食事を提供できて、理事長からもお褒めの言葉がありました」と、あいさつがあった。しかし、経営者側が丁寧な対応だったのは、ここまでだった。賃上げや一時金に関しては、昨年並みの回答が示されたものの、他の手当増額の要求に関しては、にべもなく拒否された。

組合の委員長が「調理課の早出手当の増額はなんとか検討してもらえませんか」と要求した。しかし、事務長曰く、「今年度は、豪雪の影響もあり、ベットの稼働率が落ちてしまい、医療収入が減少したので、昨年並みの賃上げ回答も本当は苦しいところでしが、理事長のご配慮により、この回答になったのです」と。これ以上要求するとは何事だ、と言わんばかりの高飛車なもの言いだった。それでも、書記長が調理課の組合員たちの思いを受けて、豪雪の際に調理師がどれほど苦労して対応したのかを説明した。しかし、事務長は、「病院の経営が厳しいときに、これに協力するのは職員の当然の務めです」と言って、これを切り捨てた。はじめて交渉に参加した朱美は、事務長の高圧的な態度に気おされてしまい、何も発言できなかった。

話題が残業代の申請の問題に移った。これについては事務長が「残業申請について病院として規制したことはありません」という、木で鼻をくくったような返答を行った。これに対して、書記長が現に残業をしても申請できずにいる職員がいることを訴えた。これには女性の副事務長が「仕事が遅い人にばかり残業代を支給していては、定時までに仕事を終えている職員に不公平になるでしょ」と、言い放った。

これに対しては、「別に遊んでいるから残業になるわけではありません。離職者が多くて人員不足だから残業になっているんです。そんなことはわかるでしょう」とベテランの執行委員が言い返した。そこで水田が「職員の勤務時間を管理するのは、法人側の責任です。長時間労働が社会的にも問題になり、労働基準監督署が医療機関にも査察に入っていますが、今のような説明で通用しますか」と、副事務長に問いかけると、彼女は表情をゆがめながら「残業代の申請を認めないとは言ってないでしょ。ちゃんとした理由があれば認めているわよ」と、言い返した。「そもそも

タイムカードを導入していないのがおかしいんじゃないですか」と、水田が迫ると、「タイムカードの導入は今、検討しています。予算のこともあるのですぐに返事は出来ませんが」と、答えた。

書記長が部署によっては、師長が残業を申請するように声をかけるところもあり、管理職の対応がバラバラだ、と指摘した。これに対しては、看護部長が「その点については、各病棟の師長に残業になる職員には、残業申請の声掛けをするよう対応を統一します」と、回答した。

最後に、豪雪の際の病院側の対応をめぐって議論となった。事務長は、「大雪の期間については、出勤できなかったり、遅刻した職員については、すべて年休に振り替えて対応しました」と、改めて回答し、年休の残り日数が少ない職員に関しても、欠勤扱いにはせずに勤務を振り替えるなどして対応したことを報告した。職員に対して「歩いてでも出勤しろ」と無理な対応を促した点については、「想定外の大雪だったからやむを得なかった」と言い訳をしつつも、今後、各職員の状況をきちんと把握するように管理職に徹底する、という回答を行った。組合側が求めた非常時の対応マニュアルの作成については検討する、という前向きな回答を得られた。

交渉を終えて組合事務所に戻ると、「管理職の暴言についての謝罪がなかったわね」と不満を漏らす執行委員もいた。朱美も、決して納得がいったわけではないが、こうした問題で労働組合がきちんと主張できる、ということにむしろ驚きを感じていた。自分の部署で管理職にひとりで抗議するのは、やはり難しい。しかし、組合としてまとまれば、病院側の理不尽な対応に対しては改めさせることも出来るものなんだ、と分かった気がした。

団体交渉の翌週、朱美が定時を過ぎて看護記録を付けていると、田野木師長が近づいてきた。「遅くなる様なら、ちゃんと残業申請を出してから帰りなさい」そう言って、立ち去ろうとした師長は、振り返って「でも、ウチの病棟の残業代が増えると事務長に文句言われるのは私なんだからね」と、嫌味を言い残していった。近くにいた博子が朱美のところに来て、「ナニあのタヌキ師長。そんなの私たちに関係ないじゃないの」と、憤った。横から花蓮が話に加わってきた。「でも、事務長って、日ごろは患者様の事を第一に考えろなんて言ってるけど、実は数字しか見てないんですね」と。これに朱美は、「本当だね。でも師長から残業申請の声掛けがあっただけでも少しは団体交渉の成果があったということかな」と、笑った。

病院のまわりでは梅がちらほら咲き始めた。雪はすっかり融けてなくなり、季節は、徐々に春へと向かっていた。

第五章　思わぬプレゼント

豪雪から四ヶ月がすぎて、六月を迎えた。朱美の自宅の周りの

畑では、大麦が小金色に実っていた。大雪で一面が銀世界に覆われていた田畑が、水田の苗のみどりと、大麦の黄金色がきれいなコントラストを描いていた。

六月の定例の執行委員会に朱美が参加すると、専従の水田が真ん中にマジックで「檄」と書かれた赤い大きな布を組合事務所に広げていた。水田の説明によると、大雪の際の除雪費が膨らんだことにより市の財政が大幅に赤字になり、それを理由に市当局が市役所の労働組合に対して、一律の賃金カットを提案してきた、ということらしい。しかし、除雪費の膨張による市財政の破綻のしわ寄せを市の職員に負わせるのはおかしいと市職員労働組合がこの提案に反対し、交渉を重ねているので、それを支援するために、赤い布に応援のメッセージを書いてほしい、と頼まれた。

この件は、五月下旬に新聞報道された時に朱美の職場でも話題になった。「大雪で一番大変な思いをしたのは市職員なのに、賃金カットは可哀そうだ」とか、「もしかして市職員の賃金カットがないと、税金があがるの」という不安の声もあがった。朱美は、大雪の朝の出来事を思い出し、あの青年も賃金カットされるのかと思うと他人事には思えなかった。市民から除雪への不満・苦情が寄せられて対応に追われたであろう市の職員たちが、今度は財政赤字のしわ寄せを一方的に押し付けられるというのは、なんとも理不尽な話だ、と朱美は思った。

各執行委員が「賃金カット反対。頑張れ」とメッセージを書き込んでいた。朱美は水田に、なんで市職員にだけ負担が押し付けられるのか質問した。水田は、「本当は、市長の財政運営が悪いから、除雪費を賄いきれなかったんですよ。でも、公共サービスを削減すると市民から不満がでるから市職員の賃金もカットしようということですね」と、説明された。「それって、市長とかの責任で、一般の職員のせいじゃないですよね」と、朱美は言った。「豪雪の時にも頑張ってくれた市職員への賃金カットは許せない！」と書いた。水田から市役所の職員に誰か知り合いでもいるんですか、と聞かれて、朱美は、あの日の黒メガネの青年の話を紹介した。

それから何日か過ぎたころに、水田が休憩時間に朱美のところに届け物があると言ってやって来た。見ると、それは、朱美が大雪の日に無くした毛糸の手袋だった。驚いて水田に事情を聴くと、「この間書いてもらった檄布を市職労の事務所に届けた際に、五十嵐さんから聞いた話を向こうの役員の人に伝えたら、後日この手袋をウチの事務所に届けてくれたんです。車の中に忘れてあったそうですよ。その人は、市職労の執行委員だったみたいです」と、教えてくれた。近くにいた博子がその話に加わってきた。「すごいじゃない、朱美。あのメガネ王子、朱美のこと覚えていてくれたんだ」と、歓声を上げた。朱美は気恥ずかしくなって、「そんなんじゃないよ、博子」と否定した。博子が「水田さん、その人の名前とか連絡先は分からないんですか？」と、聞いた。する

と水田は、カバンからメモを取り出し、「五十嵐さんの方からお礼をしたいと言われるかと思って、連絡先も聞いときましたよ」と言って、それを渡してくれた。

メモには、「芦田学」という名前とケータイの番号とメールアドレスが記されていた。朱美は、恥ずかしそうにそれを受け取り、水田に礼を言った。水田は、「向こうも大変感謝してましたよ、五十嵐さんに抜け道を教えてもらったとかで」と、笑った。博子が横から「その人はもしかして独身ですか?」と質問してきた。水田は、笑いながら「それはどうでしょうか。でも、芦田さんも五十嵐さんの連絡先を知りたがっていましたから、連絡してみたらどうですか」と、言ってくれた。

水田が帰った後、博子が「朱美、私に感謝してよ。この出会いは、あの日私が勤務を代わったおかげなんだから。今度は私がおごってもらう番だね」と、朱美をはやし立てた。朱美は、「まだお付合いできると決まったわけじゃないわよ。うまくいったら、博子にもお礼をしなきゃね」と、言って笑った。

朱美は、豪雪の中、勤務した時の事を思い出し、あの時、頑張って働いたことのご褒美として思わぬプレゼントがもらえたように感じた。

佳作――フィクション

奇跡、あるいは軌跡

大阪・自治労枚方市職員関係労組
橋本春樹

闇。わずかな月光すら感じさせないぶ厚い雲に覆われたような世界。そして静寂。

―ここは何処だ？

応える声はない。

居場所を尋ねるよりも、むしろ私は何者なのだ。気がつくと此処にいた。

そして私には肉体がない。

意識は確かなものだが、身体的な感覚はまったくない。だからといって自由という訳でもない。狭い檻のような箱の中に捕らわれの身となっているような感じがする。

「やあ」

近くからの声。厚手のガーゼでできたマスクで覆われた向こうから聞こえるような声だ。相変わらず暗闇の中にいるが、声が聞こえたことで幾分安心した。

「なんとか言えよ。気がついたんだろう」

―ここは何処だ？

同じ問いを繰り返した。

「どこだと思う？」

―想像もつかない。気がついたらここにいたんだ。

「俺も同じさ。気がついた時にはここにいたんだからな。だが、俺は知っている。我々が今いる場所は書庫だ」

―書庫？

「そうとも。さして教養がなくても、その単語くらいは知っているだろう。ここは図書館の書庫さ」

そういわれてみると、確かに書庫らしい。
「そして我々が存在しているのは本の中だ」
—本の中？
「そう。本の中。一冊の本の中に我々は存在している。もちろん別々の本だがな。ただでさえ窮屈なのに、一冊の本の中に一緒に押し込まれちゃ窮屈でしょうがない」
—何故ここが書庫で、そして何故本の中にいるとわかる？
そんなことはあり得ない。
「ありえないと思っているだろ？」
そいつは低く笑った。
「じきにわかる。もうすぐ夜が明ける。そうすれば閲覧室の方から少しは明かりも入ってくる」

そいつの言うとおりだった。
ほんの少しの朝陽が射し込んできただけではあるが、確かにここは書庫だ。
「閲覧室と違って、書庫は静かだから居心地は悪くない。それに我々はまず貸し出しには出ない。ということはずっとここにいるわけだ」
—一生か？
それを聞くとそいつは、ふん、と笑い飛ばした。
「一生なんて概念は捨ててしまうんだな。この世界の考え方じゃない」
おそらく私は人間でない以上、そいつの言うとおりに一生という概念はない。それは生命だけに存在する概念だ。
生命？
生命とは何だという問いかけを自分自身にしてみたが、今自分が置かれている状況を考えるとまったく無意味な気がした。
「それはそうと、一年に一度、蔵書を点検する。本来、図書館にあるべき本がきちんと存在しているかどうかを確認する作業だ。その時に図書館に必要とされない本は廃棄されてしまう。だからここにいる連中はその時期が来たら、ざわつき始める。しくしく泣くもの、言葉にならない叫び声を出すもの。色々さ。ここに長くいる連中は、どんな本が廃棄されていくかよく知っている。古い情報ばかりの本。心無い利用者に落書きされたり、ページが切り取られたようなものだ。だが、安心しろ。我々は廃棄されない」
—何故だ？
「ここで気がついて、初めて蔵書点検をした時に聞いたからさ」
—何を？
「地域資料というやつさ。我々は、いや、我々のいる本はこの図書館のある町の役所の労働組合の機関紙一年分を製本したものだ。そういう類の本は廃棄されない。お前もそうだ。俺のが２００１年度でお前のは２０００年度。だから安心していればいい」
労働組合の機関紙？

何故、私がそのような本の中に存在しているのか。もちろん答えは見いだせない。
—そもそも、あんたは何者なんだ？
「無駄な質問はやめろ。誰だっていい。そもそも誰でもないのかもしれない。人間でないことだけは確かだ」
—じゃあ、どういう性質のもなんだ？
「そうだな……」
そいつは少し考えた。
「意識としか言いようがない。魂と言ってもかまわないだろうが、そんな得体の知れないものよりもずっと確かなものだ」
—意識？
「そうだ。意識だ。といってもここに存在する前の記憶の一切は損なわれてしまっている。ただし、記憶はなくても知識はある。我々が書庫について共通した認識を持って話ができるように」
私はそいつの言葉の続きを黙って待った。
「縁という言葉は知っているか？」
—もちろんだ。
「人間であれ、我々のような意識であれ、縁というやつで絶えずつながっているものだ」
—輪廻転生。
「そう。闇と静寂の中にいて、意識を研ぎ澄ますと、何かの拍子にぼんやりと記憶が甦ってくることがある。といっても断片的なものでしかないがな」
—それであんたは何者だったんだ？
「だから断片的なものでしかないと言っただろう」
少し苛立ちを含んだ口調だった。
「断片的ではあるが、縁もゆかりもないものではない。縁。つながるにはつながるなりの理由がある訳だ」
—それで？
「個々の職員の手が俺、つまりこの本に触れた時にピンとくるものがあった。カメラのフラッシュが目の前で光ったような感じだ。これから話すのは、その時に湧いてきたイメージだ。記憶と言ってもいいだろう」
そこまで話すと、そいつは意識を整えるように間を置いた。
「俺はおそらくこの町の役所に勤めていたことがある。どんな仕事をしていたのかまでは思い出せないが、とにかく忙しかった。土日の休みまで、あと何日働けば休みの日が来るかっていうことばかりを考えていた気がする。ただ、どうして労働組合の機関紙を束ねて製本したものの中にいるのかまでは思い出せない。いずれにしても、そういう類の本だ。捨てる訳にはいかないだろう」
—私もその類ということだな？
「もちろんだ。俺と同じようにお前とお前の居場所であるその本とは、何かでつながっているはずだ。しかし、お前はその本を読むことはできない。住み着いているだけだ。そして俺もお前も、

この本を読みに来る奴なんていない。労働組合の古い機関紙なんて読みたいと思う輩なんていないだろう。しかし、破棄されずにここに居続けるのさ」

私は隣人のことを闇と呼ぶことにした。薄暗い、あるいは非常灯のかすかな明かりだけがある闇に覆われている書庫。隣人といえども姿かたちのない奇妙な存在。奇妙な存在といえば私も同じだが、くぐもった声は闇を連想させる。今のところは妥当な名前だ。

「誰かに読まれるということは随分と気持ちのいいことらしいぜ。人間にページをめくられると、くすぐったいような何とも言えない快感があるらしい。だから誰でも売れっ子作家の本に居場所を求めたがる」

—そういうものか。

「だがな、さっきも言ったように縁がなけりゃそうはならないってことさ」

「それに、たくさん読まれるということは痛むのだって早い。コーヒーを飲みながら読むやつだっているだろう。コーヒーをこぼされてでも見ろ。次の年の蔵書点検で廃棄されちまう。そう考えると、誰にも見向き去れない本、しかも捨てられることのない本にいることのありがたさがわかるだろう」

—そういうものか。

「あとひと月もすれば蔵書の点検が始まる。まあ気楽にしていればいいさ」

記憶を手繰り寄せることは無意味なことだ。取っ掛かりはひとつとしてない。闇の言うとおりに縁というものによって私が今ここにいるとしたら、何かしらの記憶があってしかるべきだ。しかし、閉館後の闇と静寂の中、神経を研ぎ澄ませて、あるいは緊張を緩和させてみても、思い出せるものは何ひとつない。

—私は何故ここにいる？

「ふと、何かを思い出すことがある」

闇だ。

「私もそうだった。何故ここにいるのか。ここで気がついてからは、来る日も来る日もそのことばかりを考えていた。お前が今感じているようにな。だが、それはまったく無駄な努力でしかなかった」

—縁と言っただろう？何かしらあってしかるべきじゃないのか？

「努力して甦るものではないっていうことだ」

—どういうことだ？

「ある時……、それがいつなのかはわからないし、どんな理由かもわからない。だが、ふと何かしら甦ることがある。ここで意識として目覚めたようにな」

—市役所のことか？

「そうだ。それが本当かどうかなんてわからないし、証明するものも何もない。だが、確信するに値するリアルな記憶だ。そういうものが得られたっていうことは悪くはないと思わないか？」
—悪くない。
「そうだろう。お前も気長に待つことだ。時間はたっぷりとある」

私は記憶を手繰り寄せることをやめた。今、私は意識として書庫に佇んでいる。なかなかできない経験だ。
ここにいると不思議と退屈することはない。そもそも私のような存在には退屈という感覚がないのかもしれない。意識として存在しているのだから、ぼんやりとしながらも何かを考えている。その何かはやはりぼんやりとしたものがほとんどだ。空腹眠気を感じることもなければ、何かしらの欲求が湧いてくることもない。正確に言えば、私は何処から来たのか、ここに来る前はどのような存在であったのかを知りたいことくらいだ。しかし、それを知ったからといってどうということもない。今のところはここにいることしかできないからだ。意思はあっても、自ら行動を起こすことはできない。ぼんやりとした時間にほんの少しのアクセントがつくくらいのものでしかない。
「起きているか？」
闇の声だ。
起きているも何も、ここで気がついて以来、眠ったことなどない。意識とは眠らないものだ。
「ところで、人間の手に取られて本を読まれるというのは実にいいものらしい」
闇が羨ましそうに呟いた。
「前に聞いたことがある。後ろの書棚にいた奴でな。そいつは世界文学全集の中の一冊で、確かシェイクスピアだった。人間の手でページをめくられる時の快感といったら、これ以上ないくらいのものらしい。だが、そいつはその年の蔵書点検で捨てられちまった。まったく同じ本の寄贈があり、それと差し替えられたのさ。それと」
そこまで言って闇はほんの少し間を置いた。
「読まれている時はそいつの意識を感じられるらしい」
—意識？
「そうだ。ワクワクしたり、ドキドキしたり。悲しみや喜び、感動で涙を流す時、同じような感情を得ることができるって話だ」
—面白い。
「確かに。だが、俺達にはそうした経験を味わうことはまず無理だ。前にも言ったが、誰も我々の住処であるこの本を読もうなんてしないからな。そうそう、ここの職員に佐伯って名前のやつがいる」
—佐伯。
「変わった奴さ。本がきちんと整理されていなければならない。

その信念だけで生きているような奴だ。以前に話しただろう。俺がほんの少しの記憶を取り戻した話を。あの時に私を手に取ったのが佐伯だった。ひと月に一回程度は佐伯がやってくる。書庫にある本が、然るべき所に並んでいるかどうかを点検しに来るのさ。お前もそのうちに会えるだろう」

佐伯。図書館の職員。闇の話を聞く限りは、変わった性格というより、几帳面な性格なのだろう。

そういえば……。水彩画の色彩を極限まで薄めたようなイメージだ。

私はいつか図書館にいたことがある。

記憶。これが縁の記憶というものか。

夏の陽射しが射し込む閲覧室の壁際。私が椅子に座って一冊の本を読んでいる。何の本かはわからない。私がどのような顔で、背格好かもわからない。だが確かな記憶だ。そこにいた実感がある。何もなしにそんなシーンが思い浮かぶわけがない。図書館という単語がキーワードになって、ぼんやりとした記憶を手繰り寄せることにつながったのだろうか。

だが記憶はそれだけだった。

佐伯がやってくるまでにどれくらいの時間が経過したのかわからない。

書庫のレイアウトでも変えるのか、本を動かす音が聞こえる。その音がだんだん近づいてきた。

「佐伯だ。もうすぐ会えるぞ」

闇の声だ。

佐伯が私の前に立った。ちょうど私の前に佐伯の顔がある。

縁なしの丸眼鏡の向こうの目は、少しばかり神経質そうな光を放っている。眉間に刻まれた深い皺がそう思わせる。五十歳くらいだろうか。短くカットされた髪の八割ほどは白いが、丁寧に整えられている。痩身ではあるが不健康という訳ではなさそうだ。肘までめくり上げたシャツからのぞく腕の筋肉を見ればわかる。

どこかで出会ったような気がした。気がしただけだ。確かな記憶ではない。

佐伯は無表情に私を掴んだ。その動作は実に丁寧だった。母親に頭を撫でられたような心地良さを感じた。いつかそんなふうな経験をしたのだろう。そして佐伯は本を布で優しぐこすって埃を取り、ひとつ上の段に本を移し替えた。隣には相変わらず闇がいる。

「佐伯は書架に隙間があるのを好まない。書架にピシッと本が収まっていなければ気が済まないのさ。しかも分類通りにな」

—分類？

「目の前に並んでいる本を見てみろ。白くて小さなシールにアルファベットや数字が書いてあるだろう。それが分類だ。分類に従って本は並べられている。もちろん、我々もだ」

―ということはいつまでたっても私とあんたは隣同士っていうことか。
「そうとも。一年ごとに束ねられた機関紙が並んでいるんだ。間に誰かが割って入ってくることはない」
―ここから出ることはできるのか？
「まだそんなことを考えているのか。我々は我々の意思でここに棲みついている訳じゃない。以前に言っただろう。縁だよ、縁。我々は縁によって支配されている。意識はあるが意思に基づく行動はできないんだよ」
闇の説明は実に明快だ。
「本が廃棄され、リサイクル本として誰かの手に渡っていけば、今より少しは手に取られることもあるだろうが、誰も貰っていってはくれないだろう。あるいは焼却されてしまったとしたら……、そのあとのことはわからん。ただひとつ言えることは」
―言えることは？
「俺とお前は一心同体ってことさ」
―一心同体。
「何か変化があるとしたら我々は同じ扱いを受けるということだ。でもまあ心配するな。我々を捨てようとする奴なんていない。少なくとも佐伯がいる限りはな」
―それにしても。
「なんだ」
―ここらあたりにいるのは私たちだけなのか？近くで他の声を聞かないが。
「我々だけだ。前にも言ったように、このあたりは読まれないが捨てられない、そういった類の本ばかりだからな。いくら縁といったって、そうしたところに来る奴なんてそうそういないさ。それにここにある本の数はざっと一万冊はあるだろう。以前に佐伯が呟いたのを聞いたことがある。〈一万冊の本がきれいに並んでいる〉奴はそう呟いた。何か美味いものでも食った後のような笑みを浮かべながらな」
私は佐伯の笑顔を思い浮かべようとしたがうまく想像できなかった。
「すべての本に意識が宿っている訳じゃない。人間、犬、花……意識が宿ることができるものはいくらでもある。だがな、意識ってやつは、おそらくそのすべてに宿るほどの数は存在しない」
―人間や犬には存在するだろう。
「魂の抜け殻というだろう。魂のない、つまり意識のない人間だっているさ」
―それでは死んでしまうだろう。
「意識と命はイコールの関係ではない。意識がなくったって生きていけるさ」
確かにそんなものかもしれない。
―ひとつ訊いていいか？

「なんだ？」
―我々は一心同体といっただろう？
「そうとも。意識としてここに存在している限りはな」
―限り？
「いつまでここにいるかなんてわからないということさ。縁に導かれて、またどこか別の場所で目覚めるかもしれない。ここでの記憶を遥か遠くに追いやってな」
―何かきっかけでもあるのか？
「わからん奴だ……」
闇が溜息のように呟いた。
「我々の意識は縁によって支配されている。意思でもって何かを選択するということはできないのさ」

＊

蔵書点検は、人間の世界でいうところの一日で終わったようだ。数人の職員が書庫で黙々と作業を続けていた。時折、叫び声や泣き声が聞こえた。廃棄される本に宿った意識の声。闇の言うとおりだった。
そうした声を聞いても、不思議と哀れみは感じなかった。意識は本から切り離されるのだろうが、いつかまたどこかで意識として甦る。運が良ければ、もう少しまともな所で目が覚めるだろう。薄暗くて窮屈な書庫以外の何処かで。
蔵書点検とは、本につけられたバーコードをスキャナーで読み取る作業のようだ。佐伯が私を書棚から引っ張り出し、ボールペンのようなものの先端で本を擦り、元通りに戻した。くすぐったさを覚えたが、ほんの一秒か二秒のことでしかなかった。
「今回は佐伯の担当で良かった」
闇の声は少し満足そうだった。
「人の手に触れられるのはいいものだ。ほんの少しの間だったがな。特に佐伯は本の扱い方をよく知っている。実に丁寧だ。前回は随分ガサツな奴が担当で、棚から出される時に、汚い爪の先で引っ掻かれるような感じがしたし、床に落とされもした。もちろん痛くも痒くもないが、なんとも不快なものだったよ」

＊

その時は突然やってきた。
佐伯が私を閲覧室に連れ出した。静かだが、書庫の静けさとはまったく異なる。存在する人の気配がそう感じさせるのだろうか。
カウンターから見る閲覧室の光景は、どこか見覚えがある。フロアの中心に立つ柱の周辺には蔵書検索用の端末が囲むように配置されている。そして柱を中心に放射線状にも書棚が立ち並んで

いる。
私はかつてここに来たことがある。はっきりとした根拠はないが、確信と言ってもいい。書棚の壁面に貼ってある棚番号のアルファベットのゴシック体のフォントも、甦った記憶と寸分たがわず重なった。

「ありがとうございます」
佐伯から私を受け取ったのは八十歳くらいの女性だ。一切の濁りもない白髪を後ろで束ねている。濃紺のワンピースがほっそりとした身体を包んでいる。
彼女は私を日当たりのよい窓際の席に連れて行った。
彼女の手が機関紙を一枚一枚めくっていく。
秋期・年末確定闘争。春闘。人員確保闘争。
労働組合の機関紙らしい言葉が目につく。
彼女は懐かしそうに、そして慈しむようにそれらの記事を読み進める。
彼女の手がとまった。
２００１年執行部役員選挙。
立候補者として記された中の一人の文字を彼女がなぞる。
木築雄介。
私だ。
その名前を目にした瞬間、記憶が甦った。肉体はないが、私という意識が激しく揺さぶられるような衝撃を受けた。いつか闇が言った。つながる理由があると。
そう。私はかつて木築雄介だった。機関紙の記事にも見覚えがある。仕事をしながら労働組合の役員を務め、主に機関紙の作成を担当していた。私の書いた記事、私の書いた見出し。何もかもがぼんやりとして掴みどころのない意識の世界が雲をきれいに散らしてしまったようにすっきりした景色となった。
木築雄介という私は死んでしまい、いくらかの時を経て、意識としてよみがえったのだ。
「雄介さん」
彼女がささやいた。
妻の声だ。
私が木築雄介だった頃、妻の髪は黒かった。何年が経過したのかはわからないが、すっかり老いてしまった。
妻とは職場結婚だった。妻は結婚後も仕事を続けた。子どもはいなかった。結婚してすぐに新築の一軒家を買った。小さな庭があり、妻はそこに季節ごとの花を咲かせた。そして写真を撮り、アルバムにまとめていた。季節ごとの花は毎年変わり、二人で写真を眺めながら、時の経過を懐かしんでいた。こんなことになるのであれば、アルバムを図書館に寄贈するよう伝えておけば良かった。そうすれば、いつかそこで出会えたかもしれない。
佐伯。

そうだ。図書館司書として採用された佐伯を私が組合に加入するように誘ったのだ。ぶっきらぼうな感じの男だったが、労働組合の説明をする私の言葉に誠実に耳を傾けてくれた。

機関紙を製本して図書館に寄贈するといったことはしていなかったが、私の死後、誰かがそうしたことを思いついたのだろう。生きているうちにそれができていたら、佐伯と接する機会がもっとあったかもしれない。

再び妻はページをめくり始めた。

『木築雄介さんを偲んで』

妻の手のぬくもりを心地良く感じながら見た。新聞でいうところの二面記事だ。組合員が亡くなると必ず書く。これまでの在課歴を人事課に確認し、同じ職場だった職員に人柄やエピソードを聞いてまとめる。もっとも書きたくない記事だった。

妻が読むのに合わせて私も文字を追う。妻の目は私の目だ。

＊

木築雄介さん。あまりにも突然の訃報を受け、私たちは激しく動揺しています。朝、目を覚まさないあなたは、くも膜下出血で、既に息を引き取っておられました。妻の恵子さんはあなたの両肩に手をかけ、何度もあなたの名前を呼んだそうです。

あなたは市役所に入職後、市民課、交通対策課、市民病院、文化財課を経て、再び市民課に戻りました。口数の多いタイプではなく、どちらかといえば傾聴することが得意でした。同僚や後輩のよき相談相手でしたし、時には上司からも相談を受けたと聞きます。

組合の役員としては主に機関紙の製作に携われました。第一稿には必ずといっていいほど、わざと誤字を忍ばせました。校正する役員にしっかりと記事を読ませるためです。そして校正している間に本来あるべき記事に手直しを済ませて答え合わせをするのです。役員選挙も終わり、来月には若手の役員を対象に機関紙製作の学習会を行う予定で、亡くなる前夜も資料づくりをされていました。

こうして偲ぶ記事を書いていると、あなたについての思い出が改めて次々と湧いてくるのですが、限られた紙面では書き尽くすことができません。

「ちゃんとまとめろよ」と穏やかにたしなめられそうですが、どうかご容赦ください。あなたのことを記憶に深く刻み込みますとしか言えません。これから記事を書く時、紙面の校正をする時、輪転機を回すたびにあなたのことを意識することでしょう。今はただ冥福を祈るばかりです。どうか安らかにお眠りください。執行部一同。

＊

そして妻は静かに本を閉じた。
私に涙が降り注ぐ。もちろん妻が流す涙だ。涙とはこんなにも熱を帯びたものだっただろうか。
「ありがとう」
妻がささやいた。
「さようなら」
—さようなら？
妻は私がここにいることを知っているのか？
否。そんなことはあり得ない。私に関係する本に別れを告げただけのことだろう。
妻は膝の上に置いた本の表紙に両手を重ねて乗せ、涙が乾くまでの間、記憶に浸っていた。そして私も記憶の中にいた。
組合に寄るので、帰りはいつも遅かったが、夕食は必ず一緒に食べた。一本のビールを二人で分け合い、その日の出来事を話しながら食事を済ませる。妻が三歳上だったが、二人とも退職したら長い間旅行に行こうという話をよくしたものだ。二人とも温泉が好きだったが、組合の動員が土日に入ることが多く、のんびりと旅行を楽しむことはほとんどできなかった。組合役員の処遇改善は全然進まないと冗談まじりに言われることはあったが、やめろと言われたことはなかった。
「ありがとうございました」
私は再び佐伯の手に戻った。
—やめてくれ。
私は叫んだ。佐伯に声が届かないのはわかっているが、私は妻の元にいたい。戻るべき場所は薄暗い書庫ではない。妻の手。そこそが私の居場所なのだ。
「この本はいつでもここの図書館にありますか？」
妻が訊いた。
「もちろんです」
「それを聞いて安心しました」
「これは除籍してしまうような本ではありません」
妻がほんの少し笑みを浮かべた。
「いつでも読みに来てください。貸出することもできますが？」
妻は首を振った。
「十分です。事情があって、もうここに来ることはできなくなるので……。ありがとうございました」
佐伯が私を書庫に連れていく。もう妻の姿は見えない。佐伯に抱えられた私は、彼の満足感を感じた。利用者から感謝の言葉を受けることは図書館の職員としてはこれ以上ない喜びなのだろう。だが、それは私を心地良くするものではなかった。
そして佐伯は佐伯らしく私を元の場所に戻した。
「お帰り」

闇の声からは嫉妬が感じられた。手に取って読まれる快感を存分に味わったと思っているのだろう。
「どんな感じだった？」
応える言葉を探したが適当な言葉は思いつかなかった。
どんな感じ……。
―俺のことを何か思い出さなかったか？
闇のこと……。闇はかつて市役所で働いていたと言っていた。今はこの世界で縁によって隣人としている。もしかしたら闇も同じ市役所で労働組合の役員をしていたのかもしれない。２００１年執行部役員選挙。立候補者の人である私の前か後ろに記された人物、そして私を偲ぶ原稿を書いたのは闇かもしれない。縁によってつながるということであるのなら、あながち間違った推測ではないだろう。だが、それは確かな記憶ではなかった。
―いや。何も思い出さなかった。
「そうか」
落胆を含んだ声だった。
闇に必要なのは推測ではなく、事実としての記憶なのだ。私がそうであったように、いつか闇にも同じような機会が訪れるだろう。
妻は私がここにいると知って会いに来たわけではない。しかし、かつて存在した私についてのひとつの記憶がここには確かなものとしてある。妻は私の存在する本を手に取り、私について書かれた、あるいは私の書いた記事を読み、私についての記憶をいくつか思い出し、そして涙した。
妻は私に会いに来たのだ。
奇跡。
そう、まさに奇跡だ。
縁によってここで意識を取り戻し、そして今、すべてではないが記憶を取り戻した。私が木築雄介だった時の、おそらくは最も満ち足りた自分の足跡。
それは軌跡と言ってもいい。
私がここにいる限り、再び妻の手に取られる時が来るかもしれない。妻の年齢を考えると、あるいはもうさっきのような幸福な時間が訪れる確約などありはしない。
次第に意識が遠のいてきた。妻に手を取られた時の快感も、闇と交わした会話も、記憶のすべてが淡くなっていく。
―もうここに来ることはできなくなる。
妻は確かにそう言った。
妻と佐伯のやり取りを思い出しながら思った。妻は最後の別れに来たのだろう。妻が口にした別れの言葉は、彼女自身の中にある私の記憶へ向けて放たれたものなのだ。
佐伯とのやり取りを思い出した。妻も恵子という名前を纏った人間としての終わりを近く迎えるのだろう。

だが、妻だった意識は、またいつかどこかで目覚めることになる。縁によって。そしてまたいつか、記憶を失った意識として私たちは出会い、甦った記憶によってお互いの縁を感じることがあるかもしれない。

「お別れだ」

闇の声だ。しかし、いつもの声ではない。隣にいるのに、それはひどく遠くから聞こえる。

「縁に引っ張られる時が近づいてきたんだ」

—私の声が聞こえるか？

「ああ。かすかに」

—私はどこに行くんだ？

「それは誰にもわからない……。ここでの記憶を置き去りにして、どこかに行くんだ」

—記憶を置き去りに？

「その通り。記憶のすべてがお前の意識から消えてしまう。そしてお前はまたどこかで意識を取り戻すことになるだろう。縁だ」

闇の声に耳を傾けながらも、耐え難い睡魔に襲われるように意識が薄らいでいく。縁によってつながる理由があるのなら、再び意識を取り戻した場所で何かしらの記憶を取り戻すこともあるだろう。確かなことがひとつだけある。私という意識はどこで目が覚めようとも、私以外の何者でもない。

—縁。

その呟きはもう声といえるほどの響きではなかった。

果てしない縁のつながりの中で、私という意識は存在し続ける。

—別れではない。

闇に私の声が届いているかどうかは、もはやわからない。

この世界に別れというものは存在しない。ひとつの区切りがついただけのことだ。

我々は縁によって存在し続ける。

——了——

奨励賞――フィクション

第4話「給食からっぽ大作戦」

兵庫・宝塚市職労
小倉　秀治

あ―きなこ揚げパンちゃん
農2―農家さん2
ク―クリームシチューくん
ひ―ひじきくん
や―野菜スープさん
ナ―ナレーション
み―みそ汁婆さん
ご―ごはんちゃん
調―学校給食調理員マン
農―農家さん
ハ―ハンバーガーくん
電―電話の声
地―地球さん

あ）（青い珊瑚礁の替え歌）あ～、私はあげぱーん。みんながぁ～大好きなパンなのよ～
あ～、甘い砂糖ー。きなこをかけて、召し上がれ～。（退場）
ひ）野菜スープさんこんにちわ。
や）あっ、ひじきくん。相変わらず、きなこ揚げパンさんはすごい人気だねー。
ひ）そうですね、うらやましいですよ…。野菜スープさんは明日の給食にでるのです？
や）うん。明日の給食だよ。でも、私のなかのにんじんやキャベツが苦手な人がいるから、食べてくれるかどうかちょっと不安なの…。

ひ）僕もですよ…。僕もとっても栄養があるんですが、なかなか残されてしまうんですよ…。
や）そういえばひじきくん、ごはんちゃんとの仲はどうなの？
ひ）いやいやいやいや。その話はやめてくださいよー。ぼ、僕の片思いですよ～。でも、今度会ったら、思い切って告白してみようと思ってるんです。
や）そうなんだ～。ごはんちゃんとひじきくん、両想いになるといいよね～。
※折り紙の飛行機が飛んでくる
や）ん？学校給食調理員マンさんからだわ～。なになに？（読んでいく）重大発表ってなんだろー。
※緞帳上がる
ナ）学校給食調理員マンは食べ物達にお手紙を送りました。（みそ汁婆さん、ごはんちゃんが登場）なにやら、調理員マンさんは重大な発表をするみたいです。食べ物達は宝塚市の会議室に集まってきました。さて、調理員マンの重大発表とは何なのでしょうか。
や）みんな調理員マンさんからお手紙が届いたのかな～。おや、ごはんちゃんがきているよ（肘でひじきくんを突く）おや、みそ汁お婆さんもきているみたいだねえ～。でも、なんだか元気がないみたいだね…。みそ汁お婆さんこんにちわ。ここんとこ元気がないみたいだけど、どうしたの？
み）（元気がない）最近はさっぱり私を食べてくれないのよ～。残されてばっかりじゃよ。昔は、『みそ汁さん、みそ汁さん』って、ずっと人気者だったにねぇ～。
ひ）みそ汁婆さん、僕もカルシウムいっぱいの栄養満点なんですけど、なぜか食べ残しが多いんですよ…。
ご）私は、コッペパンさんとは仲良しなんだけど、コッペパンさんはイチゴジャムやココアクリームのみなさんと美味しく食べられているから、ちょっとやきもちをやいちゃうなぁ～。
ひ）いや！ごはんちゃんはとっても美味しいですよ！ぼ、僕は、まーしろなほかほかごはんちゃんのほうが人気があると思いますご）ひじきくん、ありがとう～。
調）あーはっはっは！みなさんお待たせしましたー。
みんな）あっ、あの人は伝説の、学校給食調理員マンだぁー。
ナ）説明しよう。学校給食調理員マンとは宝塚市の学校で働く調理員であり、子ども達のすこやかな成長と元気いっぱいの健康を願って調理する人のことなのですよ。食べ残しが少なかったらうれしいなぁーと思って調理をしている人のことなのですよ。
調）たくさん残ると悲しいです。たくさん残ると泣けてきます。愛と勇気と手間暇かけて、この調理員マンが美味しく調理する。子ども達の豊かな未来のためにー。みなさん、こんにちわ。集まってくれてありがとう。今から重大発表をしたいと思います。
ご）はやくはやく～。

み）はやくはやく～。
や）どきどきする～。
みんな）どきどきする～。
調）わかりました。発表します。えへん！給食の食べ残しを減らそうという計画を考えました。すなわち、その計画とはー。
（布をとって）給食からっぽ大作戦です。
みんな）えー！
み）か、からっぽっていうことは、全部食べてくれるってことですか？そ、そんなことが本当にできるのですか？
ご）調理員マンさん、私はおわんとかにご飯粒が残っちゃうんだけど、それも全部食べてくれるってことですか？
ひ）僕の、この地味な色が苦手だっていう人も多いんですけど、色をかえなくても大丈夫なんですか？
や）とっても素敵な作戦なんだけど、本当に私のなかのお野菜達を残さずに食べてくれるのかなぁ～？
農）おいおーい！食べ物のみんながそんな気持ちでどうする！
農2）どうする！
みんな）あっ、農家のみなさんだー。
ナ）説明しよう。農家のみなさんとは、田んぼや畑で働く人のことであり、お米やお野菜などを一生懸命、一生懸命育ててくれるみなさんのことなんですよ。
農）種を大事にまきました。
農2）汗いっぱいで刈りました。
農）愛と勇気と手間暇かけて、この農家のみなさんが美味しく育てます。
2人）子ども達の豊かな未来のために～。
農）一生懸命育てた野菜です。一生懸命育てたお米です。そんな食べ物達が残ってしまうのは私たちも残念です。
農2）私たちだけじゃありません。お肉屋さんや魚屋さんだって残念だと思います
農）調理員マンさん、給食からっぽ大作戦で食べ残しが「0」になったら、私たちもとっても嬉しいんですよ。
農2）嬉しいんですよ。
地）うれしいのは私もですよ～。
みんな）あっ、地球さんだー。
ナ）説明しましょう。地球さんとは、今みんなが生活をしている星のことなんですよ。宇宙からみるととってもきれいな青い色をしています。地球さんは環境のことを考えて、これからもずーっときれいな地球でいたいなぁ～と思っている地球のことなんですよ。
地）青い地球がいいんです。きれいな地球でいたいのです。愛と勇気を軌道にのせて、この地球がくるくる回ります。人類の豊かな未来のためにー。会場の皆さん、食べ物は食べたら栄養になります。では、食べなかったら何になると思いますか？食べなかっ

た給食はごみになります。ごみが増えると環境が悪くなります。地球さんは悲しくなります。
ご）えー、私たちがごみになるの…。私たちは、みんなに食べてもらって元気になってほしいだけなのに…。ごみになって地球さんが困ってしまうなんて嫌だよー。えーん、えーん。
地）うん、ごはんちゃんの言う通りだよ。でもね、ごはんちゃん。からっぽにしたらどうだろう。からっぽになったらごみはでません。給食からっぽ大作戦は、地球にもとっても優しい大作戦なんですよ。
や）そっかー。やろうやろう！しかし、どうしたらからっぽになるんだろう。
地）こんなのはどうでしょう？楽しく食べてもらうためにテーマソングを作るっていうのは！
ご）さすが地球さん。からっぽに食べてもらうためのテーマソングを作りましょう。みんなで歌って広めていきましょう。
ひ）ごはんちゃんが賛成なら僕も賛成です！
農）よし、じゃー、こんなのはどうだろう？
一度歌ってみるよ。せーの、「お野菜果物笑ってる、お肉や魚も笑ってる～～」。みんな、どうだろう？
みんな）すごくいい！
農）よし、それではみんなで歌ってみますよー。みんないくよ。せーの、「給食からっぽ大作戦」。

※歌
ひ）ご、ごはんちゃん、お話があります。
や）おーっと、ひじきくんがごはんちゃんの前にたった～。
ハ）ちょっとまったー。
ク）ちょっとまったー。
や）おーっと、ちょっと待ったコールが入りました！ハンバーガーくんやクリームシチューくんもごはんちゃんの前だぁー。それでは、告白タイム！ハンバーガーくんからお願いします。
ハ）ごはんちゃん、同じ炭水化物同士よろしくお願いします。
や）続いてクリームシチューくんの告白タイム。
ク）僕は、ごはんにあわないおかずと言われていますが、同じ白色者同士仲良くしましょう。よろしくお願いします。
や）続いて、ひじきくんからの告白タイム。
ひ）一目見たときから、ごはんちゃんがおいしいと思っていました。ごはんちゃんが大好きです。僕と一緒に食べられてください。
や）さぁーて、ごはんちゃんの答えはどうだぁ～。
ご）（ひじきくんを選ぶ）はい。はじめはふりかけからお願いします。
ひ）（ガッツポーズ）
調）ひじきくん、よかったよかったねー。それじゃ今から、ひじきくんを「ひじきふりかけ」くんに変身させるよ～。くるくるのエ～イ！※ジャケットを着る。ウィッグをつける。

ひ）わー。
ご）わぁ～。とっても素敵。ひじきふりかけくん、とてもおいしそうだよ～。
農）よーし、ひじきくんが美味しいひじきふりかえくんに変身したよ！それじゃー最後にもう一度、みんなで歌うことにしよう！みんな準備はいいですか？
みんな）はーい。
農）それじゃーいきますよ。せーの、「給食からっぽ大作戦」。
※歌とダンス
調）会場のみんな聞いてほしいんだ。からっぽ大作戦は無理して食べても成功はしないぞ。楽しく食べる、感謝の気持ちで食べる。この二つが大切だと思います。みんなの元気なごちそうさまが聞こえてくるようにー調理員マンはがんばります。子ども達の豊かな未来のためにー。
※携帯の着信音、みんな「エッ？」って感じでキョロキョロする。
調）あ、もしもし。
電）もしもし、劇をしている調理員さんですか？
調）はい、そうです。今、劇をしている真っ最中なんですが…。
電）あっ、そうなんですか、すみません。でも、本当に調理員さんなのかぁーと思って電話したんですけど。
調）ほんとですよ。僕たちは宝塚市で働く給食調理員ですよ。
電）いやー、嘘でしょう？本当は調理員ではないんでしょう？
農）いやいや、何を疑っているんですか。本当に調理員ですよ。調理することが大好きな調理員ですよー。
※キューピー音、実際にキャベツを切る、エンディング
※テーマソング「給食からっぽ大作戦」
あったかごはんであーらっぽ
いただきまーすのいーらっぽ
うれしいばんざいうーらっぽでからっぽ
笑顔がいっぱいえーらっぽ
おいしい給食おーらっぽ
おーらっぽの次がからっぽ
※「お野菜果物笑ってる
お肉や魚も笑ってる
地球だってにっこにこー
給食からっぽ大作戦」
さらっと炒めてさーらっぽ
焦げるのダメだよこーらっぽ
結構大変けーらっぽでからっぽ
くじけちゃいけないくーらっぽ
キラキラ光ってきーらっぽ
きーらっぽの前がからっぽ
※繰り返し

予備選考を終えて

座談会を終え ～次回作のヒント

自治労文芸　代表幹事
佐藤環樹

今回の座談会は、今までにない展開で進められた。これまでは、それぞれの作品の評価を行い、先生方の意見交換を経て、各賞を決めてきた。しかし、今回は、評価を経ず、先ず各賞を決めたのち、それぞれの作品の評価となった。もちろん、この方法に問題はなく、かえっていつもよりもスムーズに進行し、無事に終えることができた。

私が感じたのは、今回に限らないのだが、ここ数年は出来栄えの「良い」ものと「悪い」ものの差が歴然としてきたことだ。断っておくが、「良い」「悪い」の基準は、上手い下手ではない。読むものを惹きつけられたか否かである。

誤字脱字については多少許している。また、多少の変更を経ると、見違えるような作品は、文芸幹事による一次選考では、残すことにして、先生方の評価を待つ。

つまり一次選考では、「木ではなく森をみる」感覚で、作品がトータルでよく出来上がっていれば、第二次選考へと導く。

ただ、誤字脱字は問題ないのだが、「ここの文章はまるまる要らない」とか、「こうしたら良いのに。勿体ない」と思う文書については、筆者の意思をそのまま尊重し、変更しないこととしている。

ところが、一次選考で議論し、「ここはこう。あそこは、ああすると、良い小説になるのにね」と議論していたことが、そのまま先生方の指摘となっている。そんな時には、一次選考で議論し、こうしたほうが良いのでは?と書き手へアドバイスし修正したものを、先生方に送ればよかったと後悔する。

今回の座談会に、そのヒントがあった。

鎌田先生が、「かつては単組の支部などさまざまな地域に雑誌があり、地域で切磋琢磨して、自治労文芸賞に応募するという流れだった。しっかりとしたサークル活動があったのですが、今は鍛えられる場がないですから。訓練の場がまったくないため、投稿と同じ形で来るのですね。昔は教える人たちがいたのです」と話されていた。

応募作は、まず全てに該当すると思うが、第三者の目を通していないと思われる。

小説は、書き手が自己満足で済ますものではなく、読み手に感動してもらうものなので、できる限り自分以外のものに読んでもらい、第三者の目をいれるべきだ。

「稲穂の大地に浮き輪を投げろ」では、浮き輪の部分は要らない。

「あの時の風」では、世界情勢の部分は要らない。

一次選考でほとんどの幹事が指摘した場所が、そのまま二次選考で先生方に指摘された。

ふと思ったのが、私たち文芸幹事が、先述の鎌田先生が言う、教える人たちになれないだろうか?との思いだ。

おせっかいは、プラスなはずだ。おせっかいをして、良い作

品としたものを、第二次選考へ回す。そんな発想は、これまでなかったが、二年というサイクルになった現在、工夫すれば可能なのではないか？　次回の幹事会で議論してみることとする。

結びに、印象に残った先生方の発言を記載する。

増田先生は、「自治労組合員の一人として書く小説と、その立場性を抜いた場合で書ける小説とを両方書いて、比べてみてほしい」。

鎌田先生は、「職場の矛盾を突くあるいは職場の中の喜びや悲しみ、笑いなど、職場の中から生み出される作品を期待しています」と述べています。

道浦先生は、「ある意味、自治労の文芸賞をもらったことは、とても名誉なことだ、というふうにもう少し知名度をアップしなければ」と述べ、自治労に課題を与えていただいた。

ぜひ、次回作へのヒントとしてほしい。

予備選考を終えて

近畿地連　文芸幹事　橋本春樹

初めて幹事となり、予備選考に参加しました。応募作品数が少なかったとのことで、すべての作品に目を通すことができました。

内容は仕事に関係するもの、しないもの。組合主催のコンクールではありますが、いわゆる労働文学だけである必要はないと思います。

そういう意味において、自由闊達に紙面を踊る文字の数々に触れることができた喜びを得ました。

文章を書くことは難しい。本当にそう思います。考え抜いて書いた文章を翌日に読み返すと、まったくひどい文章だった。よくあることです。そんなことの繰り返しの中から、いつか心に響く文章ができるのでしょう。

次回の予備選考にむけ、読む力を養いつつ、書く力もいっそう磨いていきたいと思いながら、大阪への帰途につきました。

いろいろ書きましたが、散文の可能性を感じることができた2日間でした。

AIとのバトルはすぐそこか

自治労文芸　副代表幹事　中野　暁

平成最後のコンクールは、入賞常連の柳谷さんと橋本さん、お二人を幹事に迎えて初めての審査となった。何一つ実績のない私はますます恐縮の思いだが、強力なメンバーが加わってとても心強く、全員で作品の感想を話し合うのを楽しみに自治労会館の扉を開いた。ところが森田さん、飛さん、野川さんが仕事の都合で欠席。野田さんも深夜からの合流という。審査員が半数とは残念だが仕方がない。1泊2日の行程だ。早速審査に入る。

応募が少なかったことから、前回同様、全員が全作品を読むことに決まった。思いを込め手塩をかけて作られた大切な作品たちだ。作者が違えばテーマや作風も違うので、作品の世界に没入してしまい次に読む作品の評価に影響が出ないようにしなければならない。一つ読んだらコーヒーやお茶をはさみ、時には筋トレやストレッチなどもして頭をリフレッシュさせながら

読み進めた。まるで受験生のように睡魔とも戦い、仮眠を取りながら26作品全てを読み終えたのは翌朝10時だった。

予備審査を終えての感想だが、労働者や組合が登場する自治労らしい作品が多かった。身近な世界の上で紡がれる物語を読み、こうした作品を読める場所はココしかないなと、あらためて自治労文芸の価値を感じた。今後も自治労ならではという作品が増えることを期待してやまない。もちろん独創的なSFやファンタジーなどもますます期待している。作者の想像力の素晴らしさを感じることは、読み手として至上の喜びだからだ。

気が引けるが厳しいことも言っておきたい。審査中、登場人物の名前の読みが最後までわからないということや、読みがわかっても性別がわからず、作品の世界に入っていけないということがあった。それが作者の狙いだったのかもしれないが、個人的にはルビを振ってほしいし、性別もはっきりさせてほしい。こういうところは惜しいなと感じた。今後の参考になればうれしい。

あらためて今回の応募数は26本だった。過去最低だった前回よりさらに2本減らし、最低記録を更新してしまった。止まらない減少傾向に私自身が慣れてしまったのか、数字を聞いても落胆することはなく、予想通りといった感。しかしこの辺りが底かもな、という印象だ。応募者が減った要因は山ほどあると思うが、それでも書き手が一人もいなくなることはないだろうと楽観的に構えている。文芸ブームはいずれまた来るだろう。時代はいつだって流れ行く。

AI技術の進歩が目覚ましい。自治労文芸にもAIが登場する作品がいくつかあったが、これからは小説や映画でしか見なかったSFの世界がどんどん現実化していくだろう。公務労働の現場にもAIが進出してくる時代は目と鼻の先であり、労働力としてのAI導入に反対する運動も起きるかもしれない。しかしそれが時代の流れだとしても、人間の表現欲求は無くならないだろう。何も文芸でなくてもいい。表現の方法は一つではないのだから。

とはいいつつも、次の、次の、そのまた次の元号になっても自治労文芸には残っていてほしい。AIが書いた作品との競争というのも見てみたい。なので、「その日まで文芸の火を消してはならん」と思いを強くしている。

文末になってしまったがお詫びが一つ。今回のコンクールに、私の発案で「子どもの部」を設定したが、応募はゼロだった。周知不足が原因だと言い訳しているが、責任を感じている。いい企画だと思ったのにな…。

「給食からっぽ大作戦」「お料理大好き男子になろう」「カラッポクエスト（ご飯が導く道）」

自治労文芸　副代表幹事　中野　暁

「食育」をテーマにしたシナリオ3作品のご応募ありがとうございます。作者は現役の学校給食調理員ということですが、応募作品は学校給食調理員で構成された劇団によって、実際に子どもたちの前で何十回も公演を行っているとのこと。地道な活動に敬意を表します。

登場人物は、ごはん、みそ汁、野菜などの食べ物が中心で、主人公は学校給食調理員マン。決めゼリフは「子どもたちの豊かな未来のために」で、子どもたちに食べ物のありがたさ、食べることの大事さを教える内容となっています。3作品とも子どもたちに対する愛と使命感を感じることができ、微笑ましく読ませていただきました。

子ども向けの作品ということですが「給食からっぽ大作戦」では、きなこ揚げパンちゃんが、「青い珊瑚礁」の替え歌を歌って退場するという衝撃的なシーンで始まり、「お料理大好き男子になろう」は、一世風靡セピアのノリで歌とダンスを取り入れていて、見ている子どもたちを退屈させないように工夫がされています。どうやって子どもの気を引くか、パンチの利いた小ネタが散りばめられていて、随分と考えられて創作されたことがわかります。昭和のニオイがぷんぷんして、審査員にはウケました。鑑賞している子どもたちの笑顔が目に浮かびます。

このように笑いの要素を押さえつつ、食育はしっかり。食材がどのような経過を経て私たちの口に運ばれるかや、美味しくできる調理法などについて伝えるシーンも盛り込まれています。子ども向けの作品ということで、どうしてもストーリーがシンプルで短くなってしまうのは仕方ありません。最終選考には届きませんでしたが、作者の熱意と愛を感じました。

予備選考を終えて

北信地連　文芸幹事
野田　博幸

インターネットの世界には、小説が溢れていて、多くの人が投稿しています。素人と侮るなかれ、素晴らしい小説がある一方で、面白くない作品、違和感がありそれ以上読めなくなった小説、アイディアは面白いと思ったが読み難い小説なども溢れ、まさに玉石混交といったところです。最近はそういった無料の小説を読み散らかしていますが、感心させられる小説は、「地の文」の力量が違うのかなと思うようになりました。ちなみに「地の文」とは、文章における会話以外の説明や叙述の部分のことです。同じ事柄を説明するにも、会話の中で説明するか地の文において説明するか、一気に説明するか、少しずつ説明するか、いろいろな方法があり、読みやすさ、没入感、個性、テンポなどが作られるのだと思います。

さて、今回の予備選考は、仕事の都合で遅れて参加したため、すべての作品を読むことができず反省しています。今回で3回目の予備選考になりますが、毎回、自分の中でテーマを決めて応募作品を読むようにしています。今年のテーマは「地の文」の力量を感じることとしました。専門家ではないので、作品を読むときにテーマを頭に置きながら読むだけですが・・・。

限られた時間だったため、ページ数が多い作品から読み始めましたが、思ったよりページ数のある作品が多いと思いました。基本的には、短い作品の中で作者のメッセージをきちんと伝えることは難しいと思っていますので、ページ数のある作品が出てくることは歓迎したいと思います。実際に、予備選考を通過した作品もある程度のページ数がある作品が多かったで

す。また、自治労らしく職場や組合をテーマにした作品も見かけました。

「遠い叫び」や「奇跡、あるいは軌跡」は単純に面白いと思いました。「稲穂の大地に浮き輪を投げろ」も職場の話がうまく書けていると感じました。しかし、小説として読者を意識して書く場合、完成後に、一歩引いた第三者の視点から、作品を読み返し推敲することは必要だと思います。

「土の記憶」は世界感を共有していない人に読ませるには、もう少し丁寧に説明をするともっと良くなると思いました。また「『てぶくろ』の少女」は、文章には上手さを感じましたが、記載にミスが残念でした。

作者の個性が溢れる作品もあり、手直しすることで個性が薄れる場合もあるかも知れませんが、「自分のメッセージは伝わるか」、「読み難くはないか」、「テンポ良く読めるか」、そして「この内容は会話で説明するか地の文で説明するか」などを、冷静に読み返し推敲していただくと、もっと良くなる作品もあったと思いました。

予備選考を終えて

東北地連　文芸幹事
柳谷　隆男

始めまして。柳谷隆男と申します。

川柳という、5・7・5の17音の世界に入って30年。自治労文芸賞には1989年の、第8回から応募させてもらっていた。それがご縁で自治労文芸会議の幹事を仰せつかったのだが・・・。17音という世界一短い詩の中で右往左往している自分は、散文の部の選考幹事としてはとうてい使い物にならないという不安ばかりを抱き、10月12日、新青森駅発8時37分発の新幹線はやぶさに乗車した。

第27回「自治労文芸賞」事前選考会、初めての予備選考会出席である。

自治労会館1階の会議室には佐藤環樹代表幹事、中野暁副代表幹事、近畿地連選出の橋本春樹さん（第26回自治労文芸賞散文の部入選）、そして僕、の幹事4人、舩山整総合企画総務局長と文芸賞担当の竹内敬和報道部長の計6人がテーブルに着いて始まった。佐藤代表幹事から散文の部には12県本部から26本の作品が応募され、すべての作品を隅から隅まで読んでいただきたい旨とそれぞれベストテンを決めてほしい旨の説明がされた。「えっ！明日の朝9時までに読み切るの。それも隅から隅まで」。読むペースが遅い僕は、「こりゃ、徹夜かも」と覚悟を決めた。

ホテルの一室にこもり、いよいよ読み始める。フィクション、ノンフィクション、シナリオ、童話などさまざまなジャンルの作品群。翌朝の集合時間までに読み切らなければと言うプレッシャーが頭をよぎる。それでも、午後6時からの夕食にはアルコールも用意され、前報道部長の田村美都子さんや報道担当の杉﨑穣滋さん、ラム　レベッカさんも馳せ参じ楽しいディナーとなった。そして、このお酒のおかげですっかり上機嫌となり、作品を読むペースも上がったのだった。

さて、3時間ほど睡眠も取ることができ、26本を読み切ったときの爽快感は今まで味わったことの無いものだった。

入選となった「遠い叫び」は唯一手書きで、渾身の力を込め

て書いていると実感した作品でした。佳作の「雪降る街で」は雪に関する描写が雪国に住む僕にも、そうだそうだと共感できたことがうれしい作品だった。同じく佳作の橋本春樹さんの「奇跡、あるいは軌跡」はその発想に度肝を抜かれ、まばたきも出来ないほど引きつけられたことを忘れられない。橋本さんは『てぶくろ』の少女」という題名でも佳品を応募されていて、その力量に敬服するものです。

　最終選考に残ったのは、この冊子の本選考座談会・散文の部審査に掲載されている7作品で、僕のベストテンの中に幸いにもすべて入っていたので胸をなで下ろした。開会時、佐藤代表幹事からベストテンを決めてほしいということだったので残りの3作品の題名を上げてペンを置きたい。「選挙従事者」「土の記憶」「藤原岳サンセットブルース」であった。

作品短評

「長崎大会からの帰還」

近畿地連　文芸幹事　橋本　春樹

自治労大会の閉会が遅れ、予約していた交通機関に間に合うか・・・。終始高いテンションで、臨場感たっぷり。ノビノビとした文章に好感を持ちました。読んでいると絵が浮かぶ。という点では、良い作品。流行りのコミックエッセイであれば、もっと面白くなっただろう。文章で勝負するとしたら、欲を言えば、心理描写をもっと。この作品の筆者はユーモア感覚に長けていると見ます。その視点を保ちながら、内面をより掘り下げることで作品の厚みが増します。職場や組合にはネタが満載。次回作に大いに期待します。

「藤原岳サンセットブルース」

近畿地連　文芸幹事　橋本　春樹

盗みの嫌疑で手錠をかけられる母親。そこから物語は始まる。話の筋立てに特段、新鮮味はなかったが、会話文の良さに救われた。長い作品だが、ストーリーは破綻していない。冗長にならず、最後まで読ませる力を持った作品。それでも「何かが足りない」という思いを抱きながら読んだ。母親をもっとどん底に落とす表現が際立てば、読者の心にドスンと響く作品になったと思う。惜しい。作者の筆力はなかなかのもの。要求するレベルをさらに上げるなら、一文一文の表現が陳腐なものになっていないか。他の言葉に置き換えればもっと良くならないか。この作者なら研ぎ澄ました刀のような表現に到達することができると思う。自治労文芸の場でこの作者の作品と再び出会いたい。

「ハジャに馳せる夢」

自治労文芸　副代表幹事　中野　暁

時代は果てしなく遠い未来、場所は太陽系から遠く離れ、地球外生命体が独自の文明を築いている惑星メヒコ。宇宙考古学を研究するカル・ハリ教授が惑星ヌダで発見されたハジャについて講演し、「ゲロソヨ」の大事さについて熱く語る講演録。

耳慣れないカタカナ用語が並ぶが、惑星ヌダはおそらく地球のことで、ハジャとは私たちが

事務用品として日常的に使うクリップのことだろう。紙そのものが存在せず意識で意思疎通をはかるメヒコ星人にとって、クリップの用途がわからない。その謎を解き明かさんとロマンあふれる諸説が紹介されていく。

SFらしい自由な設定が面白くクリップひとつで話を広げる作者の想像力は素晴らしい。世界観も◎。しかしクリップの他に地球で発掘されたものはないのだろうか?なぜクリップだけ?一読者として疑問が付きまとった。

○残像から幻影へ 面影に別れを

東北地連　文芸幹事　柳谷　隆男

主人公の小谷君が同じ職場で働く、先輩・神さんから人生観、死生観について大衆居酒屋で問われ、語りあう［残像の章］。そして主人公が仕事について自問自答する［幻影の章］。「死に方を考えるということは、生き方を考えることに似ている」のフレーズが心に強く残った。最終章の［面影の章］では会社を辞めた先輩・神さんと再会するのだが、多くを語らず別れてしまう。重いテーマをさりげなく表現した手法が佳であったと思う。

○土の記憶

東北地連　文芸幹事　柳谷　隆男

埼玉県加須市に住む高校生の主人公・三季。茨城県、群馬県、栃木県にも近く、ラーメンに有り付くのに4県を渡り歩いた下りは楽しく読ませてもらった。主人公は正月二日、年始に集まった親戚の人達から逃れ、自転車をこぎながら、郷土の英雄［田中正造］や［足尾銅山］［利根川や渡良瀬川］へ思いを馳せている。自転車からの風景を軽快に記すとともに、多くの史料に目を通し書き上げたことが痛いほど分かる苦労の作品と受け取った。

詩歌の部選評

詩の部

山田　隆昭

27回を数える「自治労文芸賞」ですが、私が詩の部門を担当して、すでに9回目となりました。毎回どのような作品が寄せられるか、楽しみにしています。

今回も、常連の方あり新顔の方ありで、うれしい限りですが、初めてこの選に関わった頃には現役だった方が、すでに退職されているなど、時の流れを感じています。

詩を書く場合の要素は、テーマと素材と表現であると、若い頃から教わってきました。これらの要素は、どの順番でなくてはいけない、というものではなく、おそらく三つが絡まりあいながら一篇の詩にたどり着く、というものかも知れません。

いつものように、今回も応募作の中から、次の8篇を候補としました。（順不同）

「大きな手」齋藤里絵（東京都特別区・ネットワークとしま。「差別の薄衣」連史郎（福岡市職員労働組合）。「65歳のラブレター」東野正（岩手県職労退職者）。「瓢箪島―ひとりぼっちの無人小屋」牧本敏秀（広島県職労）。「ほたる」北原陽子（岩手県職労）。「手紙」後藤順（岐阜県職労退職者）。「わすれることなかれ」浅香惠（小矢部市職労退職者）。「この手」齋藤新一（宇都宮市職労退職者）。

この中から入選、佳作を次のように選びました。

入選「手紙」
佳作「65歳のラブレター」
〃「大きな手」
〃「瓢箪島」

「手紙」は、過疎が進む土地では、その進行に合わせて先祖伝来の生産の場である畑も、荒れるに任せるよりほかはありません。そんななかで〝スエノさん〟は、病んだ老体に鞭打ち、蕎麦畑を守ってきました。しかしそれも限界に達し、介護施設に入所します。そしてついには亡くなるのですが、そのあとに残された多くの〝手紙〟。この詩の語り手は、登場するスエノさんに、現実の人のみならず、スエノさんに連なる多くの先祖たちをも見ています。スエノさんは、在りし日の此岸から、すでに彼岸に行ったひとに向けて、しかも投函する目的で手紙を書いたのではなさそうです。〝読むのでなく指でなぞる〟という一行は、土地に根付いた生き方を貫こうとしたスエノさんを、言葉を超えて実感しているかのようです。

「65歳のラブレター」は、定年退職後さらに再雇用を終えることができた〝ぼく〟を支えてくれていたのは、共に暮らした

〝君〟なのですね。ひとの魅力というものは、その時どきに感じるものですが、時を経てなお、心に深く刻まれ、残っていくのでしょう。この詩は2行16連の仕立になっていますが、1行目の過去と、2行目の現在という2行の間から、言葉は省略されていますが、長い年月、夫婦の関係性や実態の変化を読み取ることができます。それでもなお、初心は忘れがたいものなのでしょう。このように、書かれていない時間や空間を処理するのも、詩を成り立たせる重要な要素です。この詩は、行間に心の豊かなふくらみを感じさせてくれます。

「大きな手」は、手のみに着目して書かれています。場面としては、車イスを押しベッドに移動する間の、ごく日常の短い時間を表しています。しかし、いま車イス生活となったひとの〝ゴツゴツ〟した大きな手が経てきた、とてつもなく長い時間や、手にコブを作りながら生活してきた来歴を見せてくれます。〝ベッドに横になったとき／その手は自由を取り戻す〟という2行は、体は不自由になっても、生き生きと暮らしていた時を取り戻すことができた瞬間の、喜びをとらえています。その手に触れ、握り返してくれることに、しあわせを感じているのでしょう。短い詩ですが、なにげない所作であっても、心の深いやりとりを秘めていることを、感じさせてくれています。

「瓢箪島」はひとりぼっちの無人小屋と副題が付けられています。応募作品の中では、異色の物語詩とでもいうべき散文詩です。ここに書かれていることが現実にあったことかどうかは問題ではありません。帰省したある日、実家の漁船で釣りに出かけるのですが、エンジンの不調により帰れなくなってしまう。漂うにまかせて〝瓢箪島〟に漂着するのですが、その無人小屋で過ごした一夜に不思議、というより不気味な体験をしたのです。誰もいないのにひとがいた気配が、その小屋を支配しています。この詩では、恐怖を与えた実像は不明です。いわば見えない恐怖といったものでしょう。そうした心理的な怖さが、この詩を読む者に恐怖心を与えています。そして、日常の中にもこうしたことが起こりうるのだということを思わせます。

「差別の薄衣」は、さまざまな差別的な言動をするひとに怒りを覚えるのですが、自分自身が知らないうちに差別をしてしまうことを見ています。それが〝差別の薄衣〟を身にまとっているということなのですが、差別をなくすことの基本を言い当てています。

「わすれることなかれ」は、平和な世の中を生きる孫たちに、自らが見聞してきた暗い過去を、諭すように語っています。平和な世界はなるべくしてなったのではない、それは作るものだという強い意思を、静かに伝えようとしています。

「この手」は、詩を書く者が、思うように書けない現実を抱え持ちながらも、それを乗り越えようとする、身につまされる詩です。自身や創作に携わる者へのエールでもあるでしょう。

「ほたる」は、全篇ひらがなで書かれた詩です。ある夏の、平和を歌う集いでほたるの歌を唄いながら、甘い水と苦い水を対比させる歌は、平和を呼び寄せ、平和を切に願うに相応しい

ものだったことでしょう。

以上のほかにも魅力的な作品が多くありましたが、紙幅が尽きて触れられませんでした。次回に期待しています。

入選

手紙

となりの市との合併で
過疎は過疎を広げ
廃舎になった町役場の跡地に
見捨てられた老人たちが
なりゆくままに入所した
稲穂色の介護施設

親の親たちが開墾した棚田は
主を喪失すれば

岐阜・岐阜市職労（退職者）
後藤　順

名も知れぬ草に覆われ
山奥から引いた水も涸れ
谷底から吹く風たちが
遠い途を塞いでゆく

スエノさんは拒んだ

白内障を病みながらも
老女は闇の訪れも忘れ
畑を這いずり蕎麦の種をまく
一人分の野菜
一年分の漬けもの
己が食べるものは己で作る

まだ私は捨てられない

子どもらが郷に帰らない

侘しさがスエノさんをつつみ
手や足の皮膚がほころぶ
血の土地を遺棄する思いに
墓の影たちが頭をたれ
蕎麦の白い花たちが見送った

盲目になったスエノさん
溜めていた病魔が芽をふき
施設から出るとき
ふと窓の外へと
きのうまで嗅いだ老いた気配が
通路の曲がり角で消える

寝ていたベッドの下から
それまで誰にも知られず
鉛筆に唾をつけながら
文字らしきカタチが残る

スエノさんが書いた
おびただしい便せん

読むのでなく指でなぞる
便せんからつたわる
生きていたこちら側と
亡くなったあちら側とを
スエノさんが幾度となく
往来した御礼の手紙

ようやくたどり着いた
あちら側から嬉しいそうに
だれも見たことのない
スエノさんが手をふっている
左手には
書けなくなったちびた鉛筆

佳作

六五歳のラブレター

岩手・岩手県職労（退職者）
東野　正

若かった頃の君も好きだが
少しおばさんになった君も好きだ

痩せていた頃の君も好きだが
少し皮下脂肪が厚くなった君も

ワンダーフォーゲル部にいたことのある君も好きだが
低い山を登っただけでも疲れやすくなった君も

明るい色の服を着ていた頃の君が素敵だったが
リサイクルショップで見つけてきたおばさんルック姿の君も素敵だ

歯並びがあまりよくない君はそれでも素敵だが
歯間ブラシでいつまでも格闘している君も

静かな寝顔だった君も素敵だったが
乱暴にイビキをかいている姿の君も

下手くそな詩を書いていた君のまじめさは素晴らしいが
平和運動や反原発運動のデモに欠かさず出かける君も素晴らしい

社会福祉学科で無限の優しさを学んだ君も素晴らしいが
僕の理不尽な我が儘を仕方なく許してくれる君も

硬直したような正義感からしか社会を批判できない君も素晴らしいが
その愚直なまでに生硬な君も

繰り返し日本の古典文学を読み返す君には感心するのだ
時々内容を忘れてしまうこともある君にも

着付け教室にまじめに通っている君には感心する
マスターできずいつまでも卒業できないでいる君にも

両親の思い出を語り出すと止まらない君にも感心する
私のこれまでの暴言や愚行をちっとも忘れていない君にも

いつか　その時がくるだろう
いつか　天国で君を待つ大好きな父と再会できるだろう

どこかで　離ればなれになるかもしれない
どこかで　再び巡り会うことはできるだろうか

いつまでも　忘れたくはないのだ　初めて君と出会ったときの印象を

いつまでも　忘れたくはないのだ　その時の僕の心のときめきを

どんな夢を見ながら寝ているんだろう
僕を夢の中で見ることってあるかい？

佳作

大きな手

あなたの大きな手は
車イスをこいでいる
前へ　前へと・・・・・力強く
大きくてゴツゴツした手
その手をつないで
並んで歩くことはないけれど
私はその手を見つめている

車イスを降りて

東京・ネットワークとしま
齋藤　里絵

ベッドに横になったとき
その手は自由を取り戻す
私はその手にそっと触れてみる

驚くほどにタコやマメで硬くなった手
大きくてゴツゴツした手が
そっと握り返してくれる
その手のぬくもりに
私はしあわせを感じている

佳作

瓢箪島　ひとりぼっちの無人小屋

広島・自治労広島県職連合労組
牧本　敏秀

瀬戸内海では、常識では説明できない怪奇現象が起きるという。私自身は怪奇現象に遭遇したことはなかった。あの日が来なければの話しだが。

私の実家は瀬戸内の小島にある。帰省した時は必ず我が家の漁船で釣りに出かける。

それは今から二十数年前の夏。朝から一人釣りに出かけ、夕方過ぎまで釣りに興じた。ぼちぼち帰ろうかとエンジンをかけたが動かない。船はそのまま漂流し、広島県と愛媛県境の瓢箪島へ漂着した。

携帯電話もまだない時代、誰にも連絡しようもない。恐怖体験の始まりである。

腹を決めてこの日は島に上陸。辺りが暗くなり船に載せてあった懐中電灯を照らしながら今夜の宿泊場所を探す。雑木林の中にぼんやり小さな小屋を発見した。

誰が建てたか、誰が住んでいたか。中をそっと覗いてみたが、誰もいない。小屋の中は割合と広く、弱くなった懐中電灯の明かりも隅々までは届かない。小屋の中に見えない場所があるというのは人を不安にさせる。他人の痕跡が強く感じられ、しかも閉ざされているというのだから耐えられない。

置き去りにされたビールの缶が二、三個転がっている。いったいどんな人が飲んだのか。

じっと見ているとかすかに位置が移動したように感じ不気味だ。気になって何度も目を開けたり閉じたりを翌朝まで繰り返す。大きなストレスを感じた。

翌朝外が白み始めた。あの不気味さを覚えたビール缶も自分で回収し、早々に小屋を立ち去った。

後のことだが、この小屋には身の毛もよだつような怪談話があったことを知った。

以来、船釣りは止めたことは言うまでもない。

短歌の部

森川多佳子

今年の応募は全体数は少なめでしたが、三十首の連作を頑張った方が多く、心強いことでした。三十首ほどの連作は歌の数を揃えるだけでも大変ですが、さらに主題を定め、配列など全体の構成も考えなければなりません。苦労も多いのですが、それだけに言いたいことを存分に言えるという強みがあり、作者も読者も大きな充実感を得られるでしょう。

十首くらいの連作では一首一首の完成度をあげていくことが大切です。それぞれの歌に自立した意味や感覚の世界、表現の存在感があるとインパクトのある連になると思います。

入選は鈴木照夫さんの「くらしの破片」です。退職後も清掃車を見ると心に湧き上がってくる労働の矜持、現役の後輩へのシンパシーを綴り、単なる回想に留まらず、現在の人間や社会の在り方にまで掘り下げて追求し、かつ、一つ一つの場面に作者の感情が深く内在していて読み応えがありました。

「職退きて十年過ぐるも染みつきし塵芥車見れば眼に追ふ今も」の「沁みつきし」は〈何かの汚れが沁みついた塵芥車〉と読むのが普通ですが、さらに「自分の中に深く在って、まるで私の存在理由のような塵芥車」という響きも感じさせ、結句の「眼に追ふ今も」という作者の姿をリアルに顕たせます。「ごみ袋の臭気と夾竹桃の赤」「ごみの臭気を厭う人の険しい視線」には、ごみになった途端に持て余す人間心理の身勝手さがよく表され、「黙々とくらしの破片を積み混む」作業員の姿との対比が鮮やか。「ゴミ袋に透けて見える青ねぎ」には作者の優しさが滲みます。「家族団欒の場にあったもの」「工夫して生き行くたづき」であったものが「ごみ」として疎まれ捨てられてゆく状況を的確に描き、その過程に立ち会う者としての実感を大切に保ちながら、独居老人のための「宅集」や「大真面目な現業の現場と実のない国会」などより大きな場面へ展開することにも感心しました。テレビ等で言葉を弄して畏れ憚らぬ人達を観る毎日、慎ましい労働に誇りを持ち、みずからの言葉を大切にして生きる庶民の在り方を尊いと思わせる作品です。

米谷茂さんの「日常」は家族との日常を軸に、神社、図書館、絵画展などさまざまな場面に機知に富んだ着想や工夫のあるフレーズを鏤めて巧みな一連でした。一首一首が自立し、「顔認証」「エンディングノート」「人工知能」などの今日的言葉（こんにちてき）や鷗外の歌も出てきて、題材の豊さ、歌の上手さという点で抜群でした。「空カンを蹴とばし蹴とばし帰り来る孫」や「癌病棟に妻見舞う朝」「ケンカして無言の園児」などを描きながら、それらを受け止め、おおらかに時に切なく、明るいほうへ反転させてゆく姿勢が通底して、作者の歌の大きな魅力となっています。「リモコンで部屋の灯りを消している世界もこのようにして消えるのか」「絵画展終われば壁は白々と墓室のような闇が始まる」には現実と異空間、生と死のはざまを瞬時に往還するような少し怖い感覚があり、この独特の感覚は大切にしてほし

いと思います。

山崎俊定さんの「故郷」は、亡き妻を恋い、時間も空間も遥かな故郷を思い、それらがまるで眼前にあるように歌に留めて心に沁みる一連です。ほとんどの歌が現在形で書かれているので時系列がはっきり捉えにくい感もありますが、文脈から現在であると判断できる歌があって全体を引締めています。今お住まいの相模灘の風景と思い出の中の故郷みちのくの情景がともに美しく描かれています。「海の綺羅風の綺羅」「鯨尺」「玉葱苗」など言葉に雰囲気や懐かしさがあり、「隙間を支える」「過ぎゆくを潮目」などの表現が上手いと思いました。

鈴木広さんの「幼き日の記憶」は、作者が四歳の時に出征し戦死した父の記憶を辿りながら、曾孫に平和を語り、戦争法案廃止のリレートークに参加して戦争や原発に反対し続けた半生を詠んでいます。表現は直截で訥々と書かれていますが、どの一首にもリアルな場面があり、登場人物がいて決して観念には陥らず、作者の体験に根差した説得力を持っていると言えるでしょう。小林多喜二、菅原文太、早乙女勝元、美空ひばりなどにも言及があり、反戦の意志を最も強く持つ世代の切々とした訴えを私達は心に刻んでいかねばならないと思わせる一連です。

佳作はここまでですが、若い世代の田鹿幸徳さんと南出孝次さんに触れておきます。

田鹿さんの「通勤電車のヒマつぶし」は思いつくままに短歌を並べていますが、連の中に小見出しを付けるのはやめ、一首は行の最後まで続けて書いてください。「飛び起きて寝ぼけ眼で「錦町？」「糸」が模様に　ゲシュタルト崩壊」「川崎を出でて二秒で秋葉原今日も飛ばすぜ夢超特急」などは勢いがあって面白いと思います。妻の歌もよかったです。ユニークな短歌が作れそうですから、是非、来年も頑張ってください。

南出さんの「無題」は「不都合なことは真闇に葬らるそんな政治が罷り通るか」「都道府県赤穂浪士と同じ数個性はありて心はひとつ」などは面白いと思いました。全体に少々スローガン的観念的なので、主張をそのまま言うのではなく、具体的な場面や自分の体験に結びつけて詠うように方法を転換してみてください。ずっと良くなります。

抄出歌にはほんの少し添削して載せた作品があります。助詞や時制など、ささいなことで歌の流れが良くなると思います。また、どの方も、題の付け方を工夫なさるとよいでしょう。「思い出」とか「わが人生」のような一般的で没個性の題ではなく、具体的で動きのある言葉のほうが印象に残ります。

最初から三十首の連作は難しいでしょうから、初心の方は二十首でも十首でも、とにかく作って応募してください。今、歌壇では若い人達がとても元気です。中年もそれ以上の方も新鮮な気持ちで歌にのぞみ、次回までの二年間、こんな時代だからこそ、人間を大切に思い、言葉を探し、緊張して生きましょう。たくさんの作品の応募を楽しみにしています。

くらしの破片

東京・都庁職（退職者）
鈴木 照夫

職退きて十年過ぐるも染みつきし塵芥車見れば目に追ふ今も

ツートンカラーの塵芥車親し係はるは灰一色より替はりしころから

夏の陽の早くも暑しおたおたとごみ出し行けば労ひくるる

確実にありたる家族団欒の跡を袋に詰めて重ぬる

くらし跡見らるるは恥かごみ袋どれも固く結

びてありぬ
塵芥車静かに止まり黙々とくらしの破片を積み込み始む
ごみにして手を離れれば忘らるる衣食の端と言へぬもありて
人のくらし詰みこみたりしごみ袋思いは重く車の軋む
破けたる袋よりもるる臭ひ満つ夾竹桃の赤がさらに強くす
日盛りに臭ふ小道を足早に過ぐる人の視線は険(けは)し
集積所のごみ掃き寄する人の背に蔑(なみ)する目のあり少なからぬに
二百軒分積み込むと聞くごみ袋いくたび放るか車の口に
塵芥車の入らぬ小道は小走りに両手に提げて手運びをなす

短歌

ヘルメットの額のタオルも間に合はぬ炎天の汗顎(あご)を滴る

ごみ袋に青ねぎのはし透けて見ゆ慎ましき食卓浮かびて親し

汗にまみれ動作緩慢になりゆくをただ見てゐるは後ろめたかり

散乱せしごみ掻き集むるに屋根の上からすが不意に騒ぎ始むる

高齢の単身者宅多くなり集積所遠しと〈宅集〉の増ゆ

〈宅集〉は安否確認も担ひゐて変はりゆく作業の任は重たし

積み終へて車追ひゆく二人の背に汗の作業衣光てをりぬ

塵芥車去りし後の静けさに消えゆくものの寂しさ残す

非正規も働き方も知らず過ぐサービス残業は

短歌

日常のこと

蠅騒動ごみ戦争も乗り越えて今を過ごせる矜持となさむ

いつだってどこだって現場は大真面目実なき議論のつづく国会

廃棄物のごとき言葉を弄するに言霊失すると気の差すもなし

清掃員 芥改役（あくたあらためやく）その前は何と呼ばるる貝塚遺跡

整理さるるごみ集積所に日の差して街は平凡な顔取り戻す

トイレへ立つやうに誰もごみを出す〈渇水〉あれど〈渇芥〉はなし

大量生産大量消費を美徳とし築きし島に五輪の施設

工夫して生き行くたづきとせしものを捨て去り続けて終はらむ人は

日常

てのひらにすっぽり納まる孫の足長き人生軍
靴は履くな
戦争を知らない孫が甲虫「戦車みたい」と素
手でつかめり
空きカンを蹴とばし蹴とばし帰り来る孫に問
ふまい学校のこと
七キロの孫を抱けば腕つかむその手はいつか
わが柩持つ
倒れたる植木鉢の盆栽のように枯れゆく母の

大阪・泉佐野市職（退職者）
米谷　茂

短歌

残生

洗面所笑顔の練習くりかえす癌病棟に妻見舞う朝

妻病めばわが体重は五キロ減るダイエット本に載ってはいない

退院の妻を迎えるために履く白いスニーカーは妻との約束

三分咲き桜の下を入院しスキップして帰る葉桜の道

フルムーンこれがいいねと秋の京同じサイズの茶碗をふたつ

米谷（コメタニ）の印鑑ヤ行で売られてるこの町にわが一族をらぬ

三回も顔認証でもどりくるセルフ給油の樋口一葉

リモコンで部屋の灯りを消している世界もこのようにして消えるのか

短歌

通帳に光熱水費引き落とす空気もいつか買うのだろう

ケンカした園児無言でシーソーに大地蹴とばし仲直りする

幼稚園中退の履歴は書き難く中学より記すエンディングノート

息子とは将棋で絆深め合うその領域に人工知能

縁結び神社の絵馬の片隅に「ママが再婚できますように」

図書館の貸し出しカードはポイントは貯らないけど知識が増える

「人の用心」母へメールで幾万回いま圏外の天国に住む

ハイヒール手に素足で絵画展巡りゆく君もっと好きになる

絵画展終われば壁は白々と墓室のような闇が

短歌

始まる

鷗外に「帽子を脱げ」の和歌ありて登山帽脱ぐ正倉院展

語り部の一言一句に耳すますオバマの鶴を見て来し生徒

職場では小声の彼の趣味登山誰れより大きく叫ぶ「ヤッホー」

本当に会いたい人には使わない「また逢おうね」は別れの言葉

ありふるる系図に一本線が増えじいじばあばと呼ばれ始める

閉校の校長室の校長の写真遺影のごとく壁に横並び

人生の最後に酒を酌み交わす相手を未だ決めかねている

濁流に老い木一本（ひともと）悠然と最初で最後の旅をしている

故郷

秋闌けて波のうねりもやさしくて明日から師走朝の片虹

黒潮のうねり寄せきて海の綺羅風の綺羅あり亡妻恋いやまず

逝く夏の没り陽の金のそよぎ見ゆ干し物畳む手白きを跳ねてる

おりおりにあおぐ団扇の裏風に動くは暑国二百十日の

みちのくの雪溶け水の新鮮湖求めて行けば風

東京・都庁職（退職者）
山崎 俊定

短歌

が背を押す
万葉の歌碑をめぐりて帰るさの階のまち時雨
絵となる
秋闌ければ亡き妻思ほゆ口ずさみ「秋刀魚の
歌」よ遠き白雲
わろてんかそだねえと笑い教室じゅう渦巻き
となる教師術もなし
屋根を叩く楢の実の音風の音故郷はいま夕暮
れ三時
今日は今日明日は明日ある歯噛みする静かに
時間流れていくよ
身に余る工機操つる生徒なり夜学の机伏して
熟睡
友の訃を聞きてしばらく絶句せる妻は落とせ
し包丁を拾う
滾つ瀬の逸る水音しばし止み巨岩橅林横切る
静けさ

短歌

陽の落ちて谷の暗間を曲りくる旅愁というはかくなるものか

ありし日の母の読み当つ鯨尺納戸の隙間支えて残る

二人老いて祷りの時を待っている妻の白い手我の皺の手

屋根に落つ楢の実の音風の勢瀬戸に続きし炉部屋の静けさ

冬立ちて吊し干したる大根に容赦もなくて樫の実跳ね飛ぶ

掌の上の豆腐器用に刻んでる老いの味噌汁唯一レシピ

電車くる架線に石を銜えいて当るやカアと鴉知恵者

浮雲のひとひらのごと淡き月静かに走る夕風たちて

玉葱苗植うる背濡らし夕立の過ぎゆくを潮目

短歌

残りは明日に
亡き妻と知らずに届く春着の会封書の墨が跳ねて踊って
厨房のパートを終えし三人が自転車に別る秋の落日
若きの日見果てぬ夢を追う我の故郷への飛雲数えておりぬ
ボレロ聴けば嗚呼青春は遥かなり学徒出陣我記憶あり

幼き日の記憶

山形・川西町職労（退職者）
鈴木　広

幼き日のかすかな記憶父征きしその日が最後の別れとなりぬ

四歳のわれを抱きしめ父征きし最後の別れのプラットホーム

弘前の砲兵連隊に母と来て父の遺骨を受けし日忘れず

虐殺の小林多喜二の五年後に父は戦死す華北の涯に

弘前の兵舎の跡地さがしたりここより征きし

短歌

父は還らず
小学一年のわれが描きし絵一枚還らぬ父は軍服姿
幼き日の父の戦死を告げし母昨夜の夢に再び顕たす
戦傷死陸軍中尉享年三十墓碑の文字読む父の命日
石家荘の野戦病院に逝きし父の墓碑に向き合う八十回忌
朝ドラの復員シーン見るときに思い重なる還らぬ父が
お互いに戦(いくさ)に父を失いし友等と語る戦後のくらし
軍服に遺影は誰かと問う曾孫に戦死の父を語り伝えぬ
戦(いくさ)にて人を殺さず殺されず七十年を平和に生きぬ

短歌

戦争法廃止に集うリレートーク父の戦死をわれは語りぬ

新しい憲法学びし同級生平和を語る傘寿の宴に

原発や戦争させるなと訴える同年生れの文太さん逝く

四歳より戦争遺児と言われつつ齢八十平和に生きぬ

子や孫に永久に平和を願いつつ七夕まつりの短冊に書く

ヒロシマを繰り返すなと祈りつつ朝食やめて黙祷ささぐ

六歳の曾孫は指でなぞりつつ『へいわってすてきだね』絵本を読みね

シベリアより還らぬ兵士の名を刻む七十年目の追悼式に

敗戦を知らずに満州逃避行はじめて聞きぬ友

の身の上
満州の逃避行をわれに告げ八十歳の友はこの
冬に逝く
十万の命奮いし大空襲早乙女さんはおののき
語る
あの夜の東京大空襲語る人七十前をきのうの
ように
パラオには今も赤錆戦車、不発弾、兵士の遺
骨あまた散らばる
沖縄の慰霊の日に読む「平和の詩」少女のお
もいもせつせつとして
『一本の鉛筆』唄う美空ひばり「戦争いやだ
と私は書く」と
戦没者追悼式に中学生は晶子の詩読み平和を
誓う
九十歳の師が若者に伝えんと戦争体験上梓さ
れたり

俳句の部

小沢　信男

川崎岳史氏の七句を、入選にいただきます。見立てがおもしろく味わいのある句風です。

独楽は新年の季語、いまやみごとに回っていて、その暫しの立ち姿が、座敷童子の出現のごとく。年頭慶賀の句です。

山笑うは春の季語。人の世は原発崩壊・愚劣な政情など笑ってなどいられなくても、季節は巡ってくれるのですなぁ。蛙の句も、両腕ついて力んで鳴く姿に、人事を重ねるおかしみで。蛙が季語で、人事異動の春でした。

潮干狩も春。全ての生命は海から生じて地上に拡がった由。その波打ち際で幼な子が、アサリやヒトデや無尽蔵の世界と巡りあっているのですね。喜雨は夏の季語。暑い盛りの恵みの雨に、歓声あげている縄文や弥生の末裔たちよ。狩猟や農耕や人類のはるかな来し方があっての今なのだ。

鹿は奈良には年中いるが、季語としては秋で、その大きな瞳に、いっそ未来からの眼差しを感じとる。そして今の今の七五三で結びです。

わずか五七五文字ながら、いずれもなかなかに奥行きがある。俳句の妙味のひとつでしょう。川崎氏は、前回は選外のどん尻に二句をいただいた。二年後の今回は、一躍入選。選者の私も欣快です。

次に佳作のお二人を選び、前回を確かめると、同じお二人なので、おどろき当惑もおぼえました。私は本欄の選を多年受持ち、たくさんのご投稿から多々学びました。近年の減少は、さぞやご多忙と、表現の多彩化と、諸般の事情ではありましょうが。そこでやはりベテランの優位ということになります。選者も老残、おあとと交代の頃あいかとも存じます。

光平朝乃氏の六句を佳作にいただきます。自撮り棒という天下風靡の新現象を、早春の気配に静めて捉え、技あり。一転して春も盛りには、満開の花の下で当面の人事の噂が満開で。おりから競馬場ではハズレ馬券の花吹雪か。ふらりと出た夫がどこへ踏みこんできたのやら。これらのユーモラスな機微もまた俳句の妙味でしょう。やがて春も深まれば、やはり古来の練達の技こそが似合いとなる。という季節と世情の感懐でした。

そして初夏の憲法記念日に、弾痕の風化とは。七十余年前の戦争の記憶は薄らぐにせよ。鉄砲の発明このかたの歴史と現在があって、いまも世界に飛び交う弾丸や爆弾の、過半はおおかたアメリカ製だったりの、その弾痕と対峙の憲法でしょう。

山崎俊定氏とは本欄で長いお付き合いです。また佳作に選んでしまった。夾竹桃の下の親子も、緑陰のベンチのあの人も、人生のドラマの一齣の味わいですなぁ。マンションの壁と油蝉も対照の妙で、なるほど絶壁にも見えてきます。

夏みかんと昼寝は、ともに夏の季語で、季重ねながら。だからダメとはかぎらない。目を覚ますほどの響きをたてたやつが夏みかんだったおかしみですね。次の炭坑節の句には季語がな

い。けれどもまさしく盆踊りで、炭坑節でやっと揃ってきたのがおかしみだ。次の送り火も秋ながら。まず迎え火は玄関先で焚いたが、送り火はちょっと先の道端まで。それでそこらの草を払ったのですな。さすがベテランの味わいの句々です。

選外の、南出孝次氏も、松本隆司氏も、それぞれ三句ずつながら。祭りのさなかに不機嫌な馬も、それはいるね。かたつむりの動きっぷりも、なるほど独自路線か。着目がユニークで、溌溂とたのしい句々をいただきました。川崎岳史氏の先例もあります、次回もどうぞご投稿を。

神は賽子を振る

独楽ひとつ座敷童子のように立つ
愛の日やまだ文明は自殺する
笑う人いなくなっても山笑う
誰の背も追いたくなくてぶらんこす
辞表でも秘めた顔して蛙鳴く
水無月や炙れた凶も食ってやる
喜雨の中人に弥生と縄文と
夕顔や今日は昨日の神かくし
秋桜恐竜もまた居なくなり

奈良・奈良市職
川崎 岳史

俳句

秋蛍寄り添う魂と引く魂と
竜田姫ひとひら哀が愛になる
射抜かれる林檎彼女は三度脱ぐ
蟷螂の食い様母に子が宿る
生き死にを負いて潰れぬみちおしえ
未来から覗くような目鹿鳴きぬ
湯婆撫づどうか命とならんこと
蝉氷あなたの目にも水の星
赤い糸だけは切れぬと鎌鼬
夏繰る雪原ひとつ溶けてゆく
年賀状やめても友は友の顔
春雷や負けてはならぬ子守唄
指に蝶押され人から親になる
苗札になりたい人が見えている
紫陽花が咲いて岐路ではなくなりぬ
すずらんや遺影は光くれる影
子は世界全てと話す潮干狩

俳句

義母茹でた素麺武道娘かな

露草や朝が平等すぎて泣く

猫の尾が幸せを向く小春かな

今にしかできない笑顔七五三

探し物

数へ日や残したること出来たこと
秘密基地そのままにして冬夕焼
しゅるるる落葉の滑る道進み
初夢やこの一年の探し物
葦原の影に消えたる雉かな
午後の陽や玻璃の向かうのシクラメン
鬼役が一番人気追儺式
ネーブルを並べて日がな座りけり
春光に絵馬掛所音の立つ

大阪・自治労枚方市職員関係労組
光平 朝乃

俳句

風を知り頃合ひを知り梅の花
自撮り棒八坂神社の梅ひらく
ふうらりと出かけし夫の春の泥
春深き玉砂利に置く画板かな
花筵人事異動のことばかり
赤ペンでかこむ馬の名花吹雪
玉葱に涙してをり甘酢漬け
隊列のロードレーサー新樹かな
葦切のこゑに姿を追ひにけり
ただ青葉あをばの風の中に居り
春深む鋳物師の踏鞴踏みつづけ
弾痕の風化憲法記念の日
地蔵堂現の証拠に囲まれて
列島のぐにゃりと曲がる暑さかな
するすると男日傘のひらきけり
ヨイトセー鉾組みあぐる祇園祭
鬼灯や環濠守る地蔵堂

提灯に子の名をしるす地蔵盆
神域にお化け屋敷や宵祭
掛け声はべぇらべぇらと神輿かな
待ちわびし黄蓮華升麻咲きゆるる

佳作

きょうあした

満月にうつ向き向日葵（ひまわり）動かざる
鬼やんまついと身かわしまたとおる
夾竹桃帰省子（きょうちくとうきせいし）と父黙（もく）したまま
緑陰（りょくいん）のベンチは今日もあの人が

東京・都庁職（退職者）
山崎　俊定

送り火を焚く一隅の草を抜く
ようやくに殻抜ける蝉背で息す
ふる里の清き風なり帯ゆるめ
蜩や古木を一周幹まわる
鬼やんま玄関瀬戸口開くを知る
夏みかんどしんと落ちて昼寝覚む
春寝覚昨日の喧嘩忘れいて
朝涼の今日を始める勇気あり
マンションの絶壁高く油蝉
よく揃う炭坑節になってから
真赤夕雲連なり湯面も輝やいて
風船蔓八十路の心ゆれどうし
陽は落ちて谷間の三時は日暮時
山頂湖陽の入りてなお夕映えす

川柳の部

島田　駱舟

今回は八作品が寄せられました。三十句が一作句、二十句が二作品、十八句が一作品、十句が二作品、八句が一作品、六句が一作品で、十句以上が過半数を占めました。まずはホッとしました。というのも、短詩文芸は数句では作家の作句姿勢がよく分からず、最低十句は鑑賞したいと私は考えているためです。それは、作家の技量の一つに創作量が要求されるからです。創作時間の遅速は別にして、まとまった量を提供できないと、鑑賞者へ自分の世界を知らせることはできないでしょう。

その中から入選に田中良積さん（釧路市役所ユニオン退職者）の「無題」を選びました。田中さんは前回の佳作1に選ばれている実力者です。提出句数は三十句と最大です。最大だから選んだわけではありません。選んだ一番の理由は言葉をよくコントロールできていることです。したがって、作品の質が非常に安定しています。川柳界には言葉に振り回される作家が溢れています。大向こうを狙った表現や非日常的な漢語など、「どうだ」という言葉を使った作品はおおむね不安定飛な傾向になります。文字を扱う川柳家にとって、言葉のコントロールは不可欠です。

また田中さんは人間をしっかり観察しています。これも選ばれた理由です。しかも、自分に引き付けて詠んでいる作品がほとんどです。これは田中さんにはしっかりした信念や理念があるからに他なりません。要はブレない視点を持っていると言ってよいでしょう。

さらに表記にもこだわりが見えます。その典型はひらがなと漢字の表記に表れています。表記は鑑賞者の鑑賞環境に影響を与えます。漢字で書くのが普通の言葉をひらがなで書く、そこに鑑賞者は何かを感じるはずです。そこを作家は考えているのです。いわゆる演出です。表記にまで気配りが届くのは腕に覚えがあるからでしょう。演出といえば、最初と最後の作品に「無題」を配したのも、表記のこだわりの延長線にあると思われます。

社会性も魅力的でした。川柳は体制批判によく使われますが、直接的な言葉を並べるだけでは訴えは薄くなります。田中さんはそこを心得ていると思われます。社会への批判を少々抽象的な言葉で述べ、内容は鑑賞者にゆだねています。声高に批判する川柳よりもじんわり胸に残ります。

余談ですが、川柳は地域性というべき句風があります。北海道はかつてはいわゆる伝統系の結社が多かったのですが、現在は中道または革新系に移行しています。田中さんの句風も北海道の現住所の趣があります。

佳作は二編いただきました。佳作①は柳谷たかおさん（外ヶ浜職員組合）の「海色へ」、佳作②は南出孝次さん（松坂市職員組合）の「無題」です。

柳谷さんは二十句で応募しています。前回の佳作にも選ばれ

おり、力量を感じます。その力量がタイトルにも表れています。今回のタイトルに使われた「海色」はなかなか使いこなせるものではありません。このタイトルが柳谷作品を鑑賞するポイントになると思われます。

柳谷さんは句材を自分に求めています。一般的に川柳で自分を詠むときは、自分以外の人間との関係から何かを引き出します。そこに起こる喜怒哀楽がそのまま作品になります。しかし、柳谷さんは自分の中から何かを引き出して作品にしています。その結果、鑑賞者に問いを投げかけるような仕立てになっています。まるで夏目漱石の後期三部作のイメージがあります。

人間との間に喜怒哀楽は求めていない柳谷さんですが、植物や事象にはよく反応しています。「雪あかり」「たんぽぽ」「鰯雲」など、誰もがやり過ごしてしまうものへ敏感に反応し、そこから自分へライトを当てています。反応したものは人間ではありませんが、柳谷さんの感性ではそれは人間と同じように見えていると、私には思えました。ここにも「海色」を操る柳谷さんの感性が窺えます。

要は感受性が強い柳谷さんです。加えてそれをきちんと作品として表現できる力量が十分ということです。感じる、創るこの二つが創作者には不可欠です。それが最終句に集約されて魂の入った作品になります。海が「海色」に見えるのは、柳谷さんの魂が感じた何かなのです。

佳作②の南出さんは社会派一直線で、十句の提出です。やや強めの言葉が並んでいます。普段から政府の言動や法案に対して意見があるのでしょう。また、嘆かわしい社会現象にも一家言あると思います。作品にそれらをぶつけている感じがあります。いわゆる硬派の作品集です。

中世の落首にもみられるように、体制には常に民衆の目が光っています。民主主義の後進国とされている日本ですが、中世から続く体制批判は一種の民主主義ではないかと、私は考えています。そうしてその体制批判の最たるものが江戸時代の古川柳でした。「役人の子はにぎにぎをよく覚え」は著名な作品で、幕府が版木を削らせたほどの力をもった内容です。この力を川柳は持ち続けて現代に生きています。

南出さんはその批判力の延長線に立っています。訴えはかなり直接的ですが、国民が感じていることを端的に書いています。共感度は大でしょう。その共感が何らかの勢力になれば体制に訴えることができます。その意味で南出作品はポンプの呼び水とも言えるでしょう。このような作品が詠まれつづけないと、政治も社会も改善のきっかけを失うでしょう。

なお、できれば「騒がれり」「疲れたり」の文語表記は避けたほうが良いでしょう。理由は内容の重さに、文語の重さが加重され作品全体がより硬質になり、鑑賞者に緊張感を与えてしまうからです。

川柳は本音の文芸です。その分、鑑賞者の眼は厳しくなります。言葉を選び抜いて本音が正確に伝わるようにしたいものです。今回、初めて選句をさせていただきました。

島田　駱舟

無題

北海道・釧路市役所ユニオン（退職者）
田中 良積

彷徨の森で無題の絵を拾う
一瞬のきらめき永久の間の旅路
耳底で踊る魔笛の音符たち
てのひらの雪をなじっている失意
戯れの言葉に染まりゆく夕日
蟻だった頃を夕日にふと想う
そこそこに生きるつもりの泣きぼくろ
さけられぬ風の裁きも受けて生き
わが影の小さな駄馬の影とゆく
落丁もあり老残という影絵
不発弾もう抜け殻になる背広
線数多哀れヒト科の包囲網
私には開き過ぎです自動ドア
連綿と雨が語っている刹那
人間に哀しさがある理の乱れ

凜としていびつな形それも石
白黒の狭間を泳ぐ哀しい手
妥協また男の影がやせ細る
そんな夜は涙流れるままでいい
こめかみの辺り翻意を見てしまい
来し方は決して問うまい白い骨
笛の音とずれた踊りになるピエロ
間を繋ぐだけか私というピエロ
正論はよせよピエロがポツリ吐き
切り貼りの海で男の立ち泳ぎ
黄昏が迫るひと言いいそびれ
生きてきた人情に触れ生きてゆく
仮りの世に飽きるまで戯画描き続け
みんな地に還る上下のない命
黄昏て無題が続く現在地

海色へ

来る年へ福笑い買う夢を買う
雪明かり人に優しくしてますか
鳥も人もインフルエンザに泣かされて
バレンタイン男は弱い生き物で
たんぽぽが咲いている探し物やめる
種を蒔く実にならずとも種を蒔く
下駄箱がスキップすると夏になる
この指に蛍が止まるよう生きる
海の日は海　山の日は山の中
鰯雲友と一緒に老いてゆく
冬の雨賀状欠礼増えてゆく
吹雪く夜は桜を想う死を想う
さよならを最後の雪に告げたいが
探し物しているように雨が降る
辛いこと話せる花を木を植える
けん制球でいつもアウトにされる僕

青森・外ヶ浜町職
柳谷　たかお

何人に嘘ついたかな鶴を折る
死亡届　本人の僕届けたい
仲直りしましょにらめっこしましょ
世界中の夢を戦渦の地へ贈る
行く道に風あり風を信じます
拝啓　何色で生きていますか
アトム見て芽生えた僕の正義感
流れ星おいでと空をノックする
やさしさを包む蝶結びで包む
雨が打つ僕の砂漠の真ん中に
泣いちゃだめ泣いちゃだめだよ月が出る
不時着を重ねて僕が僕になる
おにぎりを見ると涙が出てしまう
海色になるまで海を見ています

無題

所得も自由も奪う時間外
特定の国の言いなり日本人
小事件大事件より騒がれり
時と場所量を選ばず降り続く
一人また一人昭和の偉人逝く
委員会なぜか映画の制作者
今時は冠婚葬祭金掛けず
携帯に人間関係結ばれる
雑草と呼ばれる物の生命力
都会より田舎暮らしに疲れたり

三重・松阪市職
南出　孝次

2018 まんが大笑

●テーマ●
「路（みち）」

審査員
佐々木ケンさん

1968年、東京大学入学。1968年東大マンガクラブ発足時のメンバー。機関紙「じちろう」に漫画レーダーを掲載。

2018年まんが大笑のテーマは「路（みち）」。機関紙・誌への既発表作品を含め、全国から42点の応募があった。審査は７月20日に行われ、「大笑」には「お引きとりをいただく以外に路（みち）のない人」を描いたヨッシー・イリエさん（愛知）が初受笑。このほか「アイデア笑」や「うまいで笑」など計13作品が受笑した。

【総評】2018大笑選評

今回のテーマ「路」で通学路を題材にした作品がかなりあり、その内３点を「笑」に選びました。誘拐とか車が突っ込むとか、最近では大阪北部地震でのブロック塀倒壊事故など通学中の事件、事故が多発しています。子どもは宝なのにほかにも虐待とか保育所問題とか、いったい安倍政権はそんな問題をほったらかして何をやっているのか、という風刺が入ると良かったのですが、問題を網羅しただけになった大西さんには「もう少笑」。あと２点は子どもを守るという絵で、迫力のある井家さんは「うまいで笑」、園部さんは少し線がうるさくて「もう少笑」。

「大笑」は、テーマの「路」も含めて質の高い多くの作品をエントリーしたイリエさん。敢闘笑の意味も込めて、麻生ザイム大臣の絵に。似顔絵が秀逸で、あのダミ声が聞こえてきそうです。

「アイデア笑」は３点ですが実はそれぞれ問題が。相澤さんは安倍首相の腑に落ちる説明のなさをよく表しています。が、顔があまり似てなく、特徴ある眉を描いた方が。松本さんのドクロの絵はすばらしいです。が、タイトルを一工夫すればいい風刺漫画になったのでは。阿部さんは自然破壊の状況を味のある絵で表現しました。が、ウサギではなく森に住む動物の方が。

「うまいで笑」は井家さんのほか、ストーリーマンガ的描線が達者な松久保さん、ただし、意味がわからない。ヒトコママンガ的絵のうまさの高橋さん、ただし、パンチ力が足りない。

「もう少笑」のもう１点は澤井さん。安倍政権には問題が多すぎますが、それをみんな詰め込んだのでかえって散漫です。

「報道笑」には松井さん、大植さん、沼さんの作品に。組合活動を題材にしてそれぞれにこなれた絵にまとめていて、他の「笑」でも良かったのですが「報道笑」という都合のいい「笑」があるのでそこにまとめました。

大笑

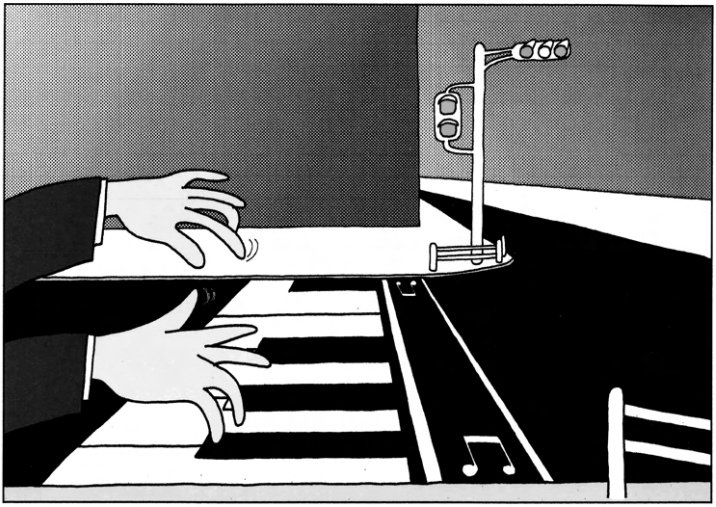
早くお引き取りを…

愛知・県本部　ヨッシー・イリエ

うまいで笑

ストリート・ミュージシャン

鹿児島・県本部書記労（退職者）
高橋　誠



うまいで笑

通学路（の安全確保）

石川・石川県職員労働組合
井家利之

うまいで笑

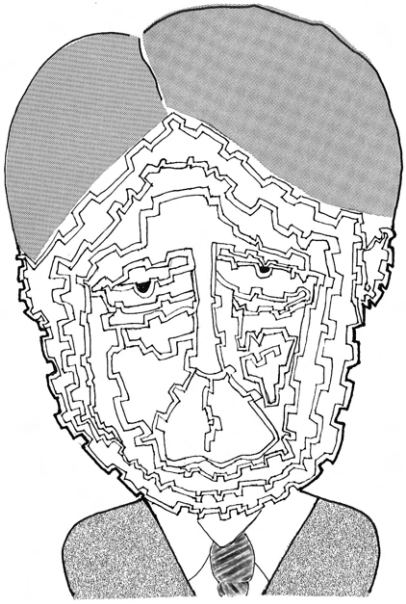
信頼を速さで運ぶ道路です！

神奈川・横浜交通労組港北支部
松久保　義和

アイデア笑

出口のない迷路

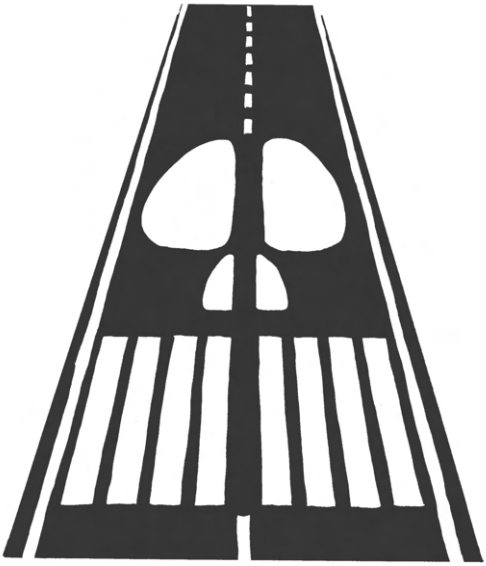
新潟・十日町市労連（退職者）
相澤　まさ子



アイデア笑

ドク路（ドクロ）

愛知・直属支部　松本　高徳

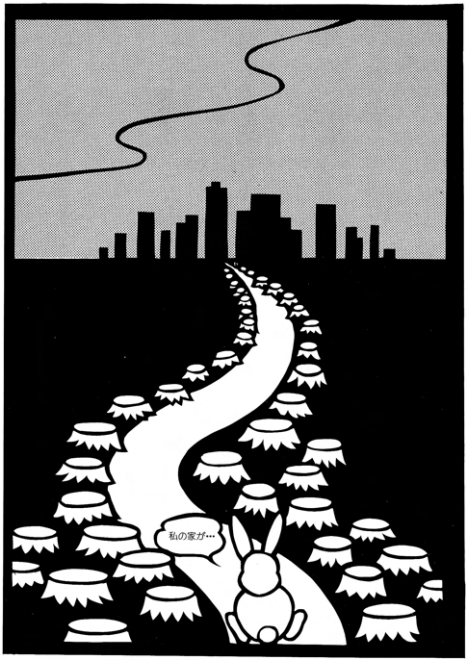


「ドク路」松

アイデア笑

未来都市への路

岩手・花巻市職員労働組合（退職者）
阿部　正介



もう少笑

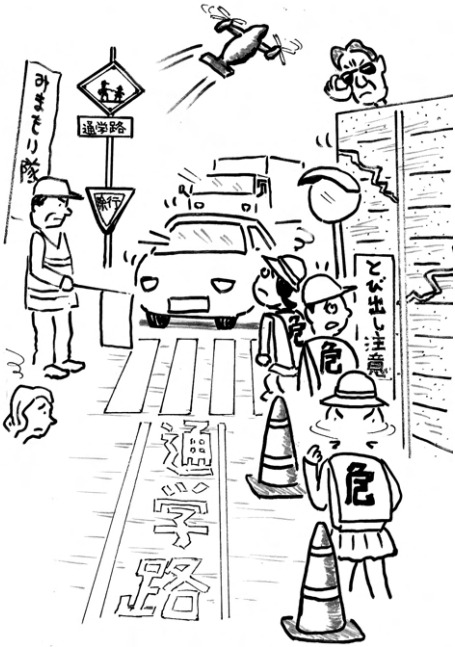
裏道

兵庫・明石市職労（退職者）
澤井　康樹

もう少笑

痛学路

兵庫・県職労（退職者）
大西　英剛



もう少笑

少子高齢社会

東京・立川市職労　園部　信哉

報道笑

未知との遭遇

三重・直属支部　松井　涼

報道笑

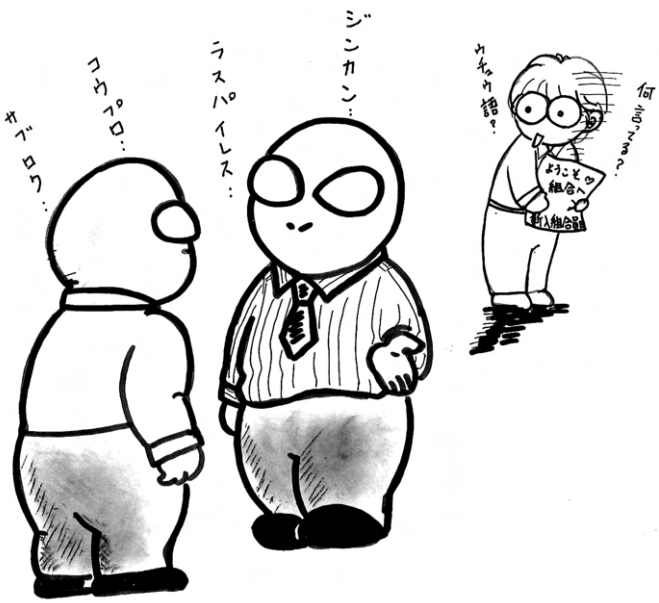
「路(みち)を踏み外さないように…」

兵庫・豊岡市職労　大植　賢

報道笑

未知(みち)との遭遇

静岡・書記労　沼　宣子



自治労文芸会議運営要綱

（名称）

第一条　この組織は、自治労文芸会議（以下「会」とよぶ）という。

（目的）

第二条　この会の目的は次のとおりである。

一、自治労県本部や単組の文芸サークルの創作活動を支援すること。

二、組合員（組合員の家族と元組合員を含む）に作品発表と批評の場を提供すること。

三、組合員に文芸活動に関する情報を提供すること。

（活動）

第三条　この会は前条の目的を達成するために次の事項に取り組む。

一、機関誌「自治労文芸」に関すること。

二、自治労文芸賞に関すること。

三、自治労の各種報道媒体への組合員の作品掲載に関すること。

四、「会報」等による、文芸サークルや作品の紹介に関すること。

五、文芸にかかわる講演会や研究会に関すること。

六、連合の各単産の文芸サークルとの交流、および他団体との協力連携に関すること。

七、その他、会の目的を達成するために必要な活動

（機関）

第四条　前条の活動をすすめるため、この会に幹事会と事務局をおく。

一、幹事会は年1回以上開催し、会の重要事項について審議する。

二、事務局は自治労総合企画総務局（東京都千代田区六番地1番）におき、会の日常事務を処理する。

（役員）

第五条　この会に次の役員をおく。

(1) 代表幹事（1　名）

(2) 副代表幹事（1　名）

(3) 幹　　事（若干名）

(4) 事務局長（1　名）

幹事は各地連1名選出を原則とする。代表幹事は幹事の互選によるものとする。

幹事の任期は2年とし、再選を妨げない。

事務局長は自治労総合企画総務局長が担当する。

役員は会の構成員として、諸活動の企画、機関誌編集等を分担する。

（費用）

第六条　この会の活動に要する費用は、自治労本部の支出金、機関誌発行に伴う収益金、寄付金などでまかなう。

（運営要綱の改廃）

第七条　この運営要綱の改廃は幹事会の審議を経ておこなう。

（附則）

第八条　この運営要綱は２００４年6月5日から適用する。

この運営要綱は２０１１年11月18日から適用する。

この運営要綱は２０１５年12月1日から適用する。

以　上

自治労文芸　第28号

2019年5月31日

発　行　自治労総合企画総務局

編　集　自治労文芸会議

〒102－8464　東京都千代田区六番町1

TEL(03)3263－0273

印　刷　株式会社 広報ブレイス